

# 群峰

8

二〇二三年四月  
富山文学の会



# 群峰 8

富山文学の会

## || 目次 ||

### ◇巻頭エッセイ

近藤 周吾

作家は二度デビューする

―辺見じゅんの場合

3

### ◇研究論文

立野 幸雄

作家とモデルの確執

―「天の夕顔」の光と影

11

久保 陽子

小寺菊子の労働観と小説「赤坂」に

おける揺らぎの諸相

23

千田 篤

富山県人が起業した出版社、北星堂  
書店

―戦前、海外に日本を紹介するこ  
とに貢献した出版社

40

金山 克哉

『人生記銘』についての調査報告

―詩人・高島高の多面性2

54

丸山 珪一

詩「潟の風景」

―堀田戦後文学の出發

76

◇随筆・報告

水野 真理子

翁久允研究を見つめ直して

―翁の人生の軌跡を辿る

115

今村 郁夫

『群峰』編集に生きている経験

123

◇2022年度 活動記録

125

## ◇巻頭エッセイ 作家は二度デビューする

―辺見じゅんの場合―

近藤 周吾

「近藤先生は、どうして小説を書かないのですか？」  
実は、このような質問をされることが少なくありません。

「文学者といえは実作者」という固定観念が根強く残っているからでしょう。実作者でないにもかかわらず、『北日本新聞』（二〇二〇年）紙上で「県内同人誌評」を担当したり、北日本文学賞（宮本輝・選）の地元選考委員を務めたりしているものだから、不思議に思われるのかもしれませんが。最近は、ますます返答に困る機会が増えてきました。

とはいえ、返答に窮するといっても、一言では説明できないという程度の話ですから、ここでまとめて回答しておこうと思います。

ええ、そのような質問をくださる方には、もれなく『群

峰』を進呈しまおうという魂胆です。（笑い）

たとえば、辺見じゅん、という作家のことを、皆さん、どのくらいご存知でしょうか？

はい、高志の国文学館の初代館長に内定していたのに、惜しくも急逝してしまったお方、です。角川書店の創業者・角川源義の長女で、角川春樹、歴彦のお姉さん、です。あるいは今冬、二〇二二年一二月に公開された、瀬々敬久監督の映画『ラーゲリより愛をこめて』の原作者、ということでも差し支えありません。

「シベリアの九月は、すでに冬の始まりを告げている。数日前には初雪が降った。」という無駄のない、引き緊つた二文によって幕をあげる原作『收容所から来た遺書』（文藝春秋、一九八九年）を読んだことがなくとも、丸眼鏡をかけた山本幡男<sup>はたお</sup>を熱演する二宮和也の表情と、その夫の無事を信じて待ち続ける妻を見事に演じきった北川景子の顔貌とを、映像として色あせずに記憶する向きはあるのではないのでしょうか。「なんで生き続けなく

ちやいけないんだ？」という問いかけは、シンプルながら実に普遍的なもので、原作であれ映画であれ、その切実さに変わることはありません。

ちなみに、原作と映画の脚本はともに文春文庫により手軽に読むことができます。その著者紹介(原作者紹介)には、次のように辺見じゅんの略歴が記されているので、引いておきましょう。

《富山県に生まれる。早稲田大学文学部卒業。作家・歌人として活躍。主な著書に、『呪われたシルク・ロード』『男たちの大和』(第3回新田次郎文学賞受賞)『昭和の遺書』歌集『闇の祝祭』(第12回現代短歌女流賞受賞)『収容所から来た遺書』(第21回大宅壮一ノンフィクション賞・第11回講談社ノンフィクション賞受賞)、『レクイエム・太平洋戦争』『夢、未だ盡きず』(第9回ミズノスポーツライター賞受賞)『ダモイ遙かに』などがある。2011年9月21日逝去。》

さしあたりここで注目してほしいのが、「作家」「ライター」という肩書き。それから、「ノンフィクション」というジャンル。そう、辺見じゅんは、小説家ではありません。

いや、厳密なことを言い始めると、事態は込み入ってきます。ここには記されていませんが、辺見じゅんのデビュー作は、清水眞弓名義の『花冷え』(一九六四年)までさかのぼるから。したがって、小説をまったく書かなかったというのは、肯綮に中りません。

けれども、父である角川源義から「こんな小説の一篇位は、誰だって書ける。もっと人生を知ってから書きなさい」と一喝されて以来、辺見じゅんは一切、小説を書かなく／書けなくなっているのです。父・角川源義が、師である折口信夫に言われたのと同様の言葉を娘に投げ、娘は良くも悪くもそれを墨守した、というわけです。

角川源義は、角川書店の創業者として知られています。学者・俳人としての顔もありました。デビュー作は『悲劇文学の発生』(青磁社、一九四二年)という国文学の研究書。書き出しは、こうです。「私はこの論考の中で、いかにして日本民族に、悲哀の文学とも称すべきものが発生したか、そしてその管理者は誰であったか、更になぜこの管理者が自分の味った悲劇として語らねばならなかったか、この事情を考えてみたかった。」

今日でも、角川ソフィア文庫に収められているので、

気軽に手に取って読むことができます。角川源義の略歴は、同文庫によれば、次のとおり。

《大正6年(1917)、富山県生まれ。國學院大學卒。大学時代は折口信夫や柳田國男に師事。昭和17年『悲劇文学の發生』を刊行。20年、角川書店を設立。24年、角川文庫創刊。27年に俳句総合誌「俳句」、29年には短歌総合誌「短歌」を創刊。蛇笏賞や遙空賞を創設する他、俳人協会・俳句文学館の設立など戦後の俳句・短歌ジャーナリズムの活性化にも貢献。著書に『語り物文芸の發生』『近代文学の孤独』『角川源義全句集』などがある。50年、逝去。》

角川源義の場合、創作でなく論文だったのですけれども、國學院大学を卒業した直後での早すぎる研究書の出版、しかも師に無断での刊行とあって、折口信夫の逆鱗に触れてしまいました。破門。源義の生涯を左右するほどの大きな出来事でした。

国文学界には長らく「拙速に単著を上梓してはならぬ」という不文律が幅を利かしていましたから、それに拍車をかけたという意味において、角川源義ひとりの問題ではなかったとも言えそうです。実際、娘のキャリアにも

影を落としつづけるわけですから、折口信夫も罪つくりな学者ですね。(苦笑い)

というわけで、辺見じゅんが『花冷え』という小説を書いてデビューしたことはたしかだとしても、そうであるにもかかわらず、いや、そうであるがゆえに、小説家ではなく、ノンフィクション作家が誕生したのでした。角川源義の標題の命名法になぞらえていえば、ノンフィクションの發生、です。

角川源義は、一九七五年(昭和五〇年)の一〇月二七日に亡くなりました。辺見じゅんが『呪われたシルク・ロード』によって、ノンフィクション作家としてデビューしなおしたのは、それより少し前の同年四月のこと。

歌作を再開したのも、同年八月に父の蔵書を携えて宮崎県椎葉村を訪れたときであったから、ノンフィクションと短歌という両輪の動きは、ほとんど軌を一にしていたと言えるでしょう。源義の生前に刊行された『短歌』誌に連作五〇首を掲載したのは同年の十一月号、第一歌集『雪の座』を新鋭歌人叢書(角川書店)の一冊として刊行したのが翌一九七六年のことでした。ちなみに私見によれば、『雪の座』という標題は、故郷・富山を念頭に置

くと同時に、折口信夫『恋の座』（和木書店、一九四九年）を意識していたのではないかと推測されます。

いずれにせよ、辺見じゅんの『デビュー作』には、『花冷え』と『呪われたシルク・ロード』と『雪の座』の三作があるということ、言い換えれば、辺見じゅんは、二度も三度も、デビューしなおした作家であるというのが、私の見立てです。

もちろん、辺見じゅんがノンフィクション作家であり、歌人であると同時に、幻戯書房——無粋きわまりないことを承知で若い読者のためにあえて指摘しておく、社名「幻戯」と併号「源義」は音読みすると共に「げんぎ」という音が重なり、和歌でいうところの「掛詞」になっている——の創設者でもあったという事実は、折口信夫が学者であると同時に歌人・釈道空であったという事実、そして角川源義が学者であると同時に出版人、俳人でもあったという事実と、きわめてわかりやすく符合しています。要するに、辺見じゅんは、父・角川源義を媒介して、折口信夫・釈道空の精神を継承しようとしたといっている。そのような系譜が、どうしてもくつきりと浮かび上がってしまうからです。

それでは、このような二重、三重のデビュー、あるいは三代にわたる精神のリレーは、いったいどのような効能を彼女の文学にもたらし、いかなる精華として彼女の表現として結晶するのでありましょうか？

ここからが、辺見じゅん論としても、あるいは文学論一般としても、最も肝要なところなのでしょうが、読者の関心を呼び覚ますだけではありません。もはや紙幅が尽きてしまいうです。

そこで、その責をふさぐべく、梯久美子『この父ありて 娘たちの歳月』（文藝春秋、二〇二二年）という近刊を、代わりに紹介しておくことにしましょう。『日本経済新聞』土曜版（二〇二二年二月六日～二二年二月二十六日）の連載をまとめたもので、渡辺和子・斎藤史・島尾ミホ・石垣りん・茨木のり子・田辺聖子・辺見じゅん・萩原葉子・石牟礼道子という九名の「書く女」とその父という問題系、すなわち「女性がものを書くとはどういうことか」という問いを、書き手も同じ土俵に立って、献身的に追尋し尽くした好著であると、私は高く評価しています。

《子が親を書くには、「近い目」と「遠い目」の両方が

必要である。前者は日常をともにした肉親の親密な目であり、後者は社会の一員として親を一定の距離をとって見る目である。」

「『書く女』とその父 あとがきにかえて」の的確な評言は、当たり前のことすぎて、かえって見失いやすい原理を衝いており、首肯できる卓見でありましょう。

ここまで来て、私が小説を書かない理由を改めて答えておきましょう。それはすでに書いてきたとおり、つまり、狭義の小説は書かないけれど、文学に携わる人間というものは、広義の小説というものは、つねにすでに書いているのだ、ということですよ。

どういう意味か？ 梯久美子は辺見じゅんを、次のように評していました。「源義を『私の父』としてだけではなく、『ひとりの男』として見る目を、作家としての仕事の中で獲得した」と。

蓋し、適評。狭義の小説から距離をおくからこそ、手に入れられる文学の境地というものが、たしかにある。そう信じられなければ、批評やノンフィクションのようなジャンルは成立しないものなのです。もし清水眞弓が小説だけを書き続けていたら、『私の父』は書けたかもし

れませんが、辺見じゅんのように「ひとりの男」は書けなかったに相違ありません。文学研究者もまた、実作者とは異なるアプローチではあるものの、やはり作家や作品、社会というものを「近い目」と「遠い目」で複眼的に捉えようとしているのです。

最後に、ここまで書いてきて、どうしても気にかかっていることを蛇足しておく、辺見じゅんは小説を書かなかったにもかかわらず、自らの人生というものをバツクヤードとして十全に活用し、雄弁に語り尽くしたという逆説ですよ。

小説を書かない／書けない作家の全貌に肉薄しようとする場合、随筆というジャンルを改めて視野に収める必要がありそうです。今回はデビュー作の話でしたが、二〇一二年、辺見じゅんが亡くなった翌年に幻戯書房から刊行されたのは、小説でもノンフィクションでもなければ、歌集でもなく、三冊の遺稿エッセイ集であった。すなわち『夕鶴の家』『桔梗の風』『飛花落葉』であったという事実も押さえておく必要があるでしょう。

スーザン・ソングは「言語は言語を阻止するために、沈黙するために、使うことができる」と言うが、私は「雄

弁な沈黙に惹かれている。

◆名歌名句抄

近藤周吾選

葛の花踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行き  
し人あり  
积迢空

日あるうち光り蓄めおけ冬莓

角川源義

花々に

眼のある夜を晩年の

父あらはれて

川涉りゆく

辺見じゅん

小さきをば子供と思ふ軒氷柱

山本幡男

# 研究論文



## 作家とモデルの確執

## ―「天の夕顔」の光と影

立野 幸雄

明治三十年（一八九七）の二月に奇しき因縁を持つ二人の男の子が生まれた。一人は、十八日に大阪市で鴻池と競うほどの資産家の子として、一人は、十日後の二十八日に香川県坂出市の病院長の子として生まれた。二人は共に裕福な家庭で幼少期を過ごし、それぞれ同志社大学、早稲田大学へと進み、四十年後に、作家とその作品のモデルとして出会い、昭和文学の名編に数えられる一編を生み出したが、共に晩年は不遇だった。作家は中河与一、作品のモデルになったのは不二樹浩三郎で、この二人に関わる作品が「天の夕顔」である。

「天の夕顔」は昭和十三年（一九三八）『日本評論』一月号に掲載された。作品の評価は、中河が『天の夕顔前後』で「発表当時、誰も見向きもせず、所謂黙殺せられて1行の批評さへ出なかった」と述べて、文壇からは無

視された。それに加え「こういうことがぼくの場合にはたびたびあったような気がする。社交から遮断せられてゐたせいかもしれない。」とも述べている。だが、発表して数日後の一月二十七日に、中河の許に永井荷風から手紙が届き、その内容が広まってからは、「永井荷風の手紙が次第に浸透したのか、本が出てみると、急に読者の歓迎をうけるに至った。」と述べて、幾らでも売れ、1ヶ月に三度も増刷するという有様で、その普及は驚くばかりであった。」と述べて、文壇でも与謝野晶子・倉田百三・穎原退蔵・久松潜一・保田與重郎・清水文雄・蓮田善明・北原武夫・相馬御風などが賞賛した。永井荷風の手紙の内容は「御手紙拝見致し御下され候創作天の夕顔早速拝誦いたし、この前単行本所載の短編は今回の大作、夕顔の素描なること始めて承知致し、尚更敬服致し、我日本の文壇も夕顔の一篇を得てギョーテのウエルテル、ミツェツェの世紀の児の告白、この二編に匹敵すべき名篇を得たる心地致し、又故人二葉亭が浮雲とも比較すべきものと存候、小生読過の際何の訳とも知らずトリスタン曲中の最後の場悲しみのモチーフを聞くが如き心地に相成候、く」とあり、西洋文学に精通している文

壇の大御所・永井荷風のこの激賞が当時の文壇や読者層に大きな影響を与えたのだろう。永井荷風の指摘の如く、「天の夕顔」はヨーロッパの伝統的な文学の流れに相応し、理解されやすい処が多く、ドイツ語訳(昭和十七年)、英語訳(昭和二十四年)、フランス語訳(昭和二十七年)、スペイン語訳(昭和五十三年)、他にイタリア語訳、中国語訳と、六カ国語に翻訳された。フランス語訳の際には、世界的な流行雑誌『ヴォーグ』や、新聞『ル・モンド』『フランス・ソワール』、文芸誌『ヌーベル・リステレー』などで批評が載り、それらは「ドミニク」「クレール」の奥方「若きウエルテルの悲しみ」「アドルフ」などの作品との比較で紹介された。それに加え、比較文学の権威・マリウス・フランソワ・ギユイヤールが『テール・ユメーヌ』誌に批評を載せ、アルベール・カミュからも激賞の手紙が中河に届いた。

だが、中河は「天の夕顔」を書く際、不二樹浩三郎の半生をモデルとしたが、不二樹は描かれた主人公の半生は自らの半生そのものだととして中河の描き方に憤慨し、二人の間には確執が生じた。二人が出会ったのは、昭和十二年(一九三七)、互いに四十歳の時、中河の妻で歌人

の中河幹子を介してのことだった。この時の出会いから「天の夕顔」が発表されるまでの経緯を中河の「泉郷奇譚」(一九三七)や「天の夕顔」、昭和十七年に不二樹が中河の「天の夕顔」を意識して「自らの真の半生」として書いた自伝的長編「冷たき地上」を参考にしてみても。

不二樹が、岐阜県山之内村から下山して東京都世田谷区祖師ヶ谷の森の中に土地を買って小屋を建てたのが、昭和十一年(一九三六)、三十九歳の時だった。その頃には相続した遺産を大方費やして僅かの金しか残っていないから。そこで、中学時代に励んだ柔道で生計を立てようと近辺の柔道場を探すと、按摩術の教授も兼ねた道場があったので入門し、按摩術も学び、翌十二年七月に道場主の指示で按摩治療の宣伝名刺を地域に配った際、中河与一の妻・幹子がそれを見て按摩治療を依頼した。不二樹は中河家を訪れ、治療しながら幹子に身の上話をし、その話を幹子は帰宅した夫・与一に話すと、中河は不二樹に興味を持ち、再度、不二樹に按摩治療を依頼した。こうして中河与一と不二樹浩三郎は出会った。

この出会いから、中河は不二樹に按摩治療を頼むつど、

再三、不二樹の身の上話を小説に書かせてくれと頼むが、不二樹は自分で書くつもりだとして断り続けた。だが、その年の八月に赤紙招集が不二樹に届いて麻布第三連隊に輜重兵伍長として入隊すると、不二樹は戦地での死を覚悟し、自らの半生を中河に書いてもらおうと決心した。出征するまでの内地での準備の三カ月間、不二樹は日曜ごとの外出時に中河家を訪れ、自らの半生を語り、それを中河が書き留めて原稿にした。しかし、中河が二度も書き直したのに不二樹は満足せず、戦地へ出発間際の三度目の原稿で不二樹は洩々了解した。その後、不二樹は上海に出征し、翌十三年の『日本評論』一月号に中河の「天の夕顔」は掲載され、作品の評価は前述したとおりであった。整理すると、「天の夕顔」は、不二樹が自分の半生を自分で書くつもりだったが、招集でやむなく中河に託した。だが、中河に一任したのではなく、自分が語ることを中河に口述筆記させたものだったが、それは最後まで不二樹の満足するものではなかったということになる。

このような状態で「天の夕顔」は中河によって発表され、それが好評になるにつれて二人の間の溝はますます

深まり、互いに「天の夕顔」の好評は自らの功績だと主張して相手への非難を繰り返すようになった。不二樹は「天の夕顔」は「ことごとく自分が資料を提供したものであり、中河がそういう男女の愛の形を文学として創造したのではない。自分と合田勝代という女性とのありのままの恋の姿を、自分の語るまま中河が筆記して、それを単に編集したに過ぎない。」（越後、奥飛騨、深山の思いこ、「しぶしぶ（私が）承諾して文章になった。ところがなんせ素材が優秀なものだから、それでどっと売れた。」『冷たき地上』【附】）と、「天の夕顔」の好評は自分の半生の生き方そのものが素晴らしいので読者の興味を引き、評価されたので、それを中河は編集して文章にしたに過ぎないと主張した。中河は「彼の話をもそのままノートに書きとった。くぼくはすぐにアウトラインによって構成を考へ、その頃興味をもってゐた和泉式部の歌を思いだし、それによって作品を組み立てた。」（「モデルの男は、自分の話したことが、そのままどこどこに出てくるので、著者が一人でその印税をとるのはけしからん、自分にも払ふべきであると言ふのであるが、それは文章といふものの秘密、全体の構想といふものが

わからぬ連中の言ふことで、文章といひ構成といひ、それから来る充実といふものを知らぬ人間の言ひがかりにすぎない。ゝあの書きだしの一節だけでも、あれは作者の長い間の体験を煮つめたものが出てゐるもので、あの数行でも幾度書きなほしたかわからなかった。あの中に出てくる和歌にしても、ぼくの若い日からの歌作から来てゐるもので、殊に最後の花火を主人公が打ち上げるところなど、これは二、三年前からの心の中に往來してゐたもので、それが丁度あの作品に役だったのである。」と述べて前々から書きたいテーマがあり、それに見合うのが不二樹の半生の話だったのでそれを取り入れただけで作品の高評価は自分の能力によるものだと主張した。

二人のこのような作品の評価の食い違いは、二人の間で作品のテーマについて十分な話し合いをなされないままに、両者銘々の想いで、それも慌ただしい口述筆記で作品をまとめたからだろう。言わば、設計図が曖昧なまま、短い工期で現場の流れに任せての突貫工事で一応は建造物を完成させたものの、出来上がった建造物は、関係者銘々の当初の思惑とは違っていたのに似ている。そのためか、口述筆記で「天の夕顔」の草稿をまとめてい

る間から二人の間には不協和音が続いていた。不二樹は中河の原稿に「文章ばかりを練って推敲すいこうして、本文はちつともよくなっていない。」と嘆き、何度も書き直させた。この「文章ばかりを練って推敲し」ということは、中河は文章表現を重視して、「本文はちつともよくなっていない」というのは、当初から中河は書きたいことが決まっているので内容を変えるつもりがなかったからなのだろう。つまり、中河は、当初から作品を描く際のテーマや構成が決まっているので本文（内容）を変えるつもりはなく、文章表現を練ることで作品効果を上げようとしたのだろう。だが、それは不二樹が中河に望んだものでなかった。不二樹の半生を題材にしていながら、不二樹と中河が描きたかったのは別々のもので、そのことが、「天の夕顔」の世評が高まるにつれ、好評の理由を両者互いに自らに都合の好いように解釈して誇り、相手の非を詰なぐつたのだろう。

それでは中河が描きたかったことと、不二樹が中河に描いてもらいたかったことはどんなものだったのだろうか。中河の「天の夕顔」と、その「天の夕顔」を意識し

て不二樹が書いた「冷たき地上」との比較から考察してみる。「天の夕顔」も「冷たき地上」も共に基の素材は不二樹が中河に語った「不二樹の半生」であるが、中河は、その素材から男と女に関わりあることを取り上げ、それらを絡み合わせてストーリー化し、文章表現や挿入歌などで工夫を凝らして浪漫的雰囲気を高め、悲恋的内容として「女の死」を加味して印象的に終わらせている。登場人物を簡略化し、それら人物の複雑な思惑を分析することなく、ストーリーの面白さに焦点をあて、それに歌や詩で文芸的雰囲気を漂わせ、死による悲劇性を付け加えて分かり易く展開し、つまり、単純なストーリーを平易な文章で描き、最後に愛しい人の死と、一途に愛してきたという男の純粹な片想いの心情を強調し、終わりに<sup>はかな</sup>儚い火花などを加えて万人受けする哀しくも美しい浪漫的な悲劇作品に仕立てている。このタイプの作品は永井荷風がヨーロッパ文学にも通じる秀でたものと賞賛するまでもなく、日本の伝統的な文学の一形態である中古の歌物語にもよくみられるものである。歌物語は和歌にまつわる恋物語が多く、死別や不遇を嘆く物語が多い。中河は歌人で歌物語も熟知しているので、冒頭に和泉式

部の歌を載せ、話の展開に建礼門院右京大夫や他の歌なども挿入し、女との死別や男の嘆きで悲恋の結末とする歌物語的な要素が「天の夕顔」には多分にみえる。伊勢物語の「東下り」で、恋に破れた男が、悲観して「身ようなきもの」に想って都を離れ、草深き東国へ下るように、実りのない恋に囚われた男が身を<sup>はかな</sup>儚み、深山に籠もり、悲恋の人生を嘆くというような歌物語にも似た語を、中河は前々から書きたかったのだろう。そんな折りに不二樹の半生を知り、それを題材に「天の夕顔」を書こうと思いつたのかもしれない。それゆえに、物語の構想が前からあった処に不二樹の身の上話から必要事項だけを拾い上げて用いたので、「天の夕顔」はあくまでも自分の創作だと中河は言い張るのだろう。

それに対して不二樹の「冷たき地上」は、彼が中河に語った自らの半生で、中河が「天の夕顔」で省いた部分を復元し、強調している。この省かれた部分は、不二樹の上高地、妙高山麓、有峰、飛驒の山之村の山小屋で過ごした体験の部分と病気の妻を離婚したことへの釈明の部分である。「天の夕顔」で省かれた部分をあえて復元、強調したのは、この部分が不二樹にとって極めて重要な

ことだったからに違いない。特に山籠もりの体験は「冷たき地上」で書き加えただけでは満足せず、後に改めて「越後・奥飛騨深山の思い出」として出版しているほどである。父の遺産で四十歳頃まで自由気儘に暮らしてきた不二樹にとつて、過酷な自然での厳しい山籠もりは彼の半生で最も忘れがたい貴重な体験だったに違いない。また、彼は自著『名作『天の夕顔』粉碎の快挙』で「天の夕顔」を百十八カ所の欠点があるボロ小説だと非難しているが、その欠点としているのは作品中の土地の様子・人物履歴・人間関係が、不二樹が実際に見聞き・体験したことと違う点である。彼が遭遇したことが「天の夕顔」で主人公が遭遇したことが違っているのが非難の中心になっている。これらのことから不二樹が自分で書くつもりで中河に書いてもらいたかったのは、女との恋も含めた自分の半生そのもの、言い換えれば不二樹の関心事はあくまでも自分で、自分の波瀾万丈に富んだ半生の伝記・実録めいたものだったのだろう。ただし、病気の妻を離婚した理由を妻側の非によるものだと強調したり、自分の能力や育ちを憶面もなく自画自賛していることから、ありのままの自分というより、自分の誇らし

い半生を描いたようなものを衆人に知って貰いたかったのだろう。

このように「天の夕顔」で二人が描きたかった想いは互いに異なり、その違いから諍いが生じたのだろうが、中河は作品の主人公のモデルの存在を当初は否定し、後にモデルの存在は認めたものの、不二樹の存在はあくまでも拒み続けているし、また、不二樹も作品の主人公は最後まで自分だと言い張り、文壇や新聞・雑誌社等に触れ回って法廷闘争にまで持ち込もうとしている。二人の作品に関わつての度をこした感情的なこだわりは、単に作品の性質上から生じるものばかりでなく、二人の人間性からも発しているように思われる。そこで二人の人となりをみてみることにする。

中河は「天の夕顔」が発表された当初、作品は文壇から無視され、それに加え「こういうことがぼくの場合にはたびたびあったような気がする。」と述べている。「天の夕顔」の文壇での黙殺はヨーロッパ文学に精通している者が少ない上、作品自体の矛盾や不備な点が目立ち、評価が低かったこともあるが、中河の日頃の文壇との対応にも問題があったようだ。彼は強度の潔癖性神経衰弱

(潔癖性ノイローゼ)で、接触するもの全てが汚く不潔な物に見え、帰宅した際には玄関で衣服を脱ぎ捨てて丸裸になり、全身を常備の昇永水しょうこうすいで丹念に消毒するほどで、そのため、外出を控え、人と接するのを避けたので文壇では極端な交際嫌いとして有名だった。その上、彼のこの潔癖性は他者に攻撃的で、口癖の「汚い、汚い」を周囲の者たちに辺りかまわず浴びせ掛けるので、作家仲間などでもすすんで中河に交際を求める者は少なく、横光利一・川端康成と共に新感覚派の作家として名を馳せたにもかかわらず、文壇や編集記者等からも疎まれ、変人扱いをされていた。彼のこの性向は初期の「肉親の譜」「清めの布と希望」「赤い薔薇」「女禮」などの狂気じみたノイローゼを題材にした作品からも窺い知ることができる。晩年はこの性向も穏やかになったが、多分に強迫性障害の傾向がみられ、不潔恐怖・洗浄強迫(汚れが気になり、何度も洗わないと気がすまない)や疾病恐怖(重病にかかってしまう怖れ)、それに被害恐怖(他者によつて自分に危害が及ぶ怖れ)などが執拗に続き、前述したように周囲から疎まれていた。このような性向が災いして、戦後に文壇で『天の夕顔』主人公モデル問題

や「ブラックリスト事件」(中河が左翼的な文学者の「ブラックリスト」を警察に提出したという噂。後に濡れ衣と分かる。)がまことしやかに囁かれ、それらの悪意に満ちた風評で中河は文壇から締め出されてしまった。また、不二樹についても「モデルが小生を訴へるとは一体何を訴へるのか。モデル自身にしても、自分が書いたなどとんでもない言ひがかりなどせず、あの作品のモデルは自分であつたと言つてゐれば、それだけでもどんなに誇れたか知れないのに、気の毒な気がする」と、頑なに「天の夕顔」は自分一人の創作であるとし、不二樹の言ひ分を被害恐怖から〈言ひがかり・脅迫〉として撥ね付け続けた。

一方、不二樹は、幕末に薩摩藩大阪蔵屋敷の町人蔵元で維新後は大日本製糖会社を創設した父を持つ、鴻池と競うほどの大阪の資産家の家に生まれた。家系には緒方洪庵や跡見花蹊(跡見学園創始者)などもいるが、兄二人と姉の四人兄弟の末っ子で、兄二人は慶應大学経済学部卒業後に長兄は渡米中に死去、次兄は不二樹家の相続を放棄したので彼が家督を継ぎ、姉は大阪で当時評判の美女で、この姉を不二樹は殊更こゝろより思慕して幼い頃から姉の

部屋に入り浸り、姉と共に茶や花の稽古をしていたという。また、同志社大学を卒業してから中河に会うまでの十六年間、そのほとんどは相続した父の遺産で自由気儘に暮らし、その間、勤めていたのは大学や姉からの懇願で五年間半ほどで、苦勞した実感といえは妙高山麓や山之村での山小屋暮らしのことぐら이었다。典型的な裕福な家の末っ子のお坊ちゃん育ちで、プライドは高く、幼児・少年性から抜けきれなく依存性が強く、独り善がりで思い込みの強いお山の大将だった。多分に自己愛性パーソナリティ障害(ナルチスト)の傾向もあるようで、自分の能力を過大評価し、自分の業績を誇張して注目や称賛を求める一方で、他者からのマイナスな評価に対し過敏に傷つくが、他者への共感性は薄く、他者の能力を過小評価するこの障害の特徴が所々にみられる。「天の夕顔」が好評になるにつれ、不二樹は中河の創作を否定し、自らの半生の素晴らしさが作品の好評の原因で、それを世間から認めて貰って賞賛を得たかったのだろう。ただし、二人は精神障害だったから諍いが生じたというのではない。二人のような性向は強弱の違いで誰にでもあり、それが日常生活に困難な状態に陥った場合が精神

障害になるのだが、「天の夕顔」の場合、互いのこのような性向が強い者同士がぶつかりあったことが、確執を生む一因にもなったのだろう。

中河の「天の夕顔」と不二樹の「冷たき地上」に再び戻って作品を見直してみる。「天の夕顔」は、中河に事前に構想があつたにしろ余りにも不二樹の体験を安易に作品に取り入れすぎている。不二樹から聞いた彼の行動の前後の事情やその折々の心情の吟味もしないまま、「天の夕顔」の主人公の行動として取り入れるので、「天の夕顔」のストーリー上での主人公の心情の流れや主人公自体の性格に矛盾が生じている。その点を不二樹は「中河がね、この材料、本当に咀嚼そじやくしていないんです。この主人公は、見る人が見たらわかりますが、性格が一定していない。まず早いところが変質者、その次が二重人格者、最後になつたら狂人的になっているの、性格が書けていない。文章は上手ですよ。文章は書きますが、人物の肝心の主人公の性格を書き分ける技術がないの。ある人はこのロマンスの筋だけ読んで喜んでくれるけれどもね」『冷たき地上』【附】と指摘している。だが、その不二樹として自らの半生の真実を描くとして「冷たき地上」を

書いたが、その内容にも幾つか疑わしい点がある。

「冷たき地上」で、山小屋での生活のことや結婚から離婚までの経緯を改めて詳細に補足しているが、結婚では娘の不二樹への軽率な行動ばかりを責めて自らの娘への対応は曖昧にしているし、病気の妻を棄てて離婚したことも、妻の容貌・性格の非を並べて結婚での被害者は自分だと力説し、そんな妻が病気になった時の自分の献身的な世話を自画自賛している。だが、不二樹の甥・吉田郷は「相手は伊勢の神主の娘で、顔立ちのよい素直な娘だった。化粧をさせて立派な衣装を着せると、どこかの華族の令嬢かと人が見返るほどだった。」(「不二樹家の家系」『小説天の夕顔余聞』所収)などと述べ、離婚は妻に問題があったというより、不二樹の独善的な気儘さにあったように述べている。また、不二樹の生涯を詳しく調査した中井三好は、山之村の小屋暮らしの中で不二樹は村の二人の女性に求婚したが断られたことを『天の夕顔』のかけで『述べているが、そのことについては「冷たき地上」には書いていない。「天の夕顔」の好評から、それを意識して「冷たき地上」では自らのことを書く際にも、一人の女を一途に愛する「天の夕顔」の主人公の

印象を損ねないように描いたのだろう。結婚・離婚などでの自らの正当性を強調し、山之村の娘たちへの求婚も省いている。「冷たき地上」は決して赤裸々な自分の半生を描いた、不二樹が求めた伝記的・実録めいたものではなく、強い自意識と自画自賛、他者に見た目の好い自分の姿を殊更ことごとくに描いている。

以上のことを整理すると、「天の夕顔」はテーマが明解で平易な文章でもあるので分かり易いが、そのことが外国語に翻訳しやすいが、登場人物たちの性格的な相剋そうこくが乏しく重厚さがなく、ストーリーに不二樹の体験談をそのまま安易に用いがちなので作品上の主人公の心情の流れに乱れが生じ、登場人物の心情や作品展開に矛盾が生まれている。「冷たき地上」は「天の夕顔」を下地にして、それに当時の不二樹の心情説明を詳しく加えるので観念的になって物語性が薄れ、不二樹の自己満足の個所が目立っている。中河、不二樹は非難しあっているが、「冷たき地上」は「天の夕顔」が下地にあるからこそ肉付けして作品として存在でき、「天の夕顔」は「冷たき地上」の基たる不二樹の体験談があるからこそ取捨選択・粉飾ふんしよくして作品として成立している。「天の夕顔」は、中河、不

二樹のそれぞれ一方のみによるものではなく、不二樹の体験談と中河の構想・文章があるからこそ存在し得ると言える。

ちなみに男主人公ばかりでなく、愛される側の女に目を向けると不可解なことがある。「天の夕顔」では主人公が四十三歳の時に二十三年間想い続けてきた七歳上の女が結末で亡くなる。だが、この女のモデルである合田勝代は不二樹が中河に話した時点では生存している。不二樹がこの時点から十三年後に勝代の姪から勝代の死を初めて知らされるからである。生きていることを知りながら中河は作品で女を死なせ、それを不二樹は認めたことになる。出征間際といえ、一途に長年愛し続け、現在も生きている女を死に至らしめるストーリーに不二樹が納得したのは腑に落ちない。また、十三年後にその女の死を知ったということは、山を下りてから十三年間、愛し続けた女とは没交渉だったということで、長年に渡り一途に想い続けてきたわりには不二樹の勝代への執着は薄いようだ。不二樹の勝代への想いに不審がわき、彼が中河に勝代への想いをどのように告げていたのかと疑問がわく。前述した中井三好の『天の夕顔』のかげで

は、山之村で不二樹は小屋で毎晩泣きながら女の写真を見ていたという。その写真の女が、不二樹が想い慕う合田勝代ならば一途な愛に生きる男の悲しみの姿を髣髴とさせるが、その写真の女は姉だった。それに不二樹の死後、遺品の写真帖には姉の写真ばかりが貼ってあったという。甥・吉田郷も不二樹の姉の接し方から「叔父の潜在意識の底には、姉の文子が幼児の印象として焼き付いていたのではなからうか」（「不二樹家の家系」『小説天の夕顔余聞』所収）と述べているが、中井三好も不二樹の根底にある思慕する女人像は姉で、その姉の面影を宿す存在として合田勝代を思い慕ったのではないだろうか」と述べている。お坊ちゃん育ちの甘えん坊で幼児・少年性を残している不二樹にとって姉は優しさと美を兼ね備えた理想的な女性として愛慕したもの、姉ゆえに恋愛の対象として表立った形にはできず、胸の奥深くに秘める一方、姉の身代わりといえは語弊あるが、その想いを合田勝代へと投影していたのではないだろうか。不二樹は、この姉への想いを胸奥に秘めて表には一切出さず、「冷たき地上」にも書かず、恐らく中河に自分の体験談を話す折りにも勝代への想いの中に姉への想いを込めて



人公は自分で自分こそ一人の女を一途に愛してきた純粋な男なのだと誇る男、一人の女を一途に愛してきた男の姿を見事に作品に描き上げたのは自分だと自分の文才を誇る男。まるで子どもじみた意地の張り合いである。(一途の愛)というなら、そんな彼らの傍らで彼らを氣遣って支え、一途に愛した女たちがいた。中河の場合、歌人で後に共立女子大学教授になった妻・幹子で彼女は彼の偏狭な性格をよく理解し、母性的な愛で包み込み、社会との仲立ちをして彼を守ってくれた。また、生活も顧みずに中河への怨念と独り善がりの執筆に囚われる不二樹を支えたのは妻・ハナだった。ハナは、不二樹の軍隊時代の部下の姉で、彼を氣遣い、こまめに世話をやく控え目な女だった。中井三好は「ハナは中河与一の『天の夕顔』を読んでいたし、それが不二樹の恋の半生であることも、全て承知していた。そして、不二樹が、今なお、合田勝代を待つ心に変わりがないと思っていた。しかし、その時はその時、不二樹の思うようにさせてやって、自分は静かに身を引こうと考えていた。ハナは自分がやがて死んだら、自分の骨を実家の墓に入れてくれとかねがね実家に頼んでおいたことからそのことを窺い知る事

ができる。このいじらしい心を、不二樹は充分に理解していなかったようである(『天の夕顔』のかげで)と述べている。銘々勝手な想いで息巻いている男たちよりも、そんな男たちを辛抱強く優しく見守る女たちの愛こそ「天の夕顔」の一途で純粋な愛の物語に値するのである。

#### 【参考文献】

- 『天の夕顔』中河与一・新潮文庫・昭二十九
- 『天の夕顔前後』中河与一・古川書房・昭六十一
- 「泉郷奇譚」(『三連符』所収)時代社・昭二十一
- 『冷たき地上』不二樹浩三郎・彩流社・平二十八
- 『天の夕顔』のかげで』中井三好・彩流社・平七
- 『小説天の夕顔余聞』上平隆憲編・高山市民時報社・平二十
- 『ひとりぼっちの戦い』森下節・金剛出版・昭五十六

## 小寺菊子の労働観と

## 小説「赤坂」における揺らぎの諸相

久保 陽子

はじめに

小寺（尾島）菊子（一八八四～一九五六）はしばしば職業作家として紹介され、明治から昭和にかけて活動し、数多くの作品を残している。小説「赤坂」は、一九一〇年一二月に、『中央公論』で組まれた「女流作家小説十篇」の一つとして発表された<sup>1</sup>。これにより菊子は「女流作家」の一人として名前を連ね、また同年一〇月には少女小説『文子乃涙』（金港堂）を刊行するなど、この頃に作家としての地位を確立した。

「赤坂」は、主人公・秋子が役所勤めを辞し、恋人Sさんとの恋愛へと向かっていくという、仕事から結婚へ向かう中間地点の物語である。Sさんとの交流や赤坂への引越などを経て、心持や外見が次第に変化していく、その移り変わりを秋子の視点で書いたものである。

菊子作品をその特徴から四区分した小林裕子は、「赤坂」を「社会的秩序や道徳、あるいは習俗との鋭利な対立を避け、これらとの妥協を図りつつ自己の可能性の伸展を図るもの」<sup>2</sup>に分類する。そして結婚する友人に動揺しながらも独身を貫こうとする主人公を書いた「ある夜」<sup>3</sup>との対照をみる。とはいえ、この引用の言辭が示すように、恋愛ひいては結婚へと向かう「赤坂」に、慣習への「妥協」的な態度を読むか、その先の自己の可能性の「伸展」を読むか、そのどちらに重きを置くかによって作品の見え方は異なる。慣習への逸脱と挫折、抵抗と馴化は菊子作品の特徴といえ、例えば菊子の結婚をめぐる作品を論じた西田谷洋が、「結婚制度への無自覚な回収と抵抗主体的な参画による自立の可能性と限界が示される」<sup>4</sup>と述べていることにもあらわれているように。

このことは「赤坂」にも当てはまり、それゆえ作品の評価は、一抹の寂寥感とともに温かな結婚へと向かっていく作品とする場合と、世間の規範を脱し変化を求める主体性を読み取る論とがある。前者の立場でいえば、杉本邦子は「役所づとめをやめた女主人公のかたい心持が、やさしい恋人の存在と、引越先の赤坂という土地のもつ

特殊な雰囲気に包まれて、しだいにやわらかなものに変化してゆく、その経緯を、さらりと描いた佳作」<sup>四</sup>とする。恋人との恋愛の中で心境が変化していく本作は、確かに女性視点でその内面の機微を捉えたものではあるが、男性に愛される女性像へと自らを嵌めていくようにも思える。こうした作品の旧弊さを塩田良平は「凡そ近代といふものから遠い雰囲気であり、叡智から退いたものであつて思想性に乏しい」<sup>五</sup>と批判している。

後者では、高野純子が「赤坂」が掲載された『中央公論』の「女流作家小説十篇」について論じ、当時の紙面において「家内にあつて、夫や子供に尽くす〈女性〉が「理想」<sup>六</sup>とされており、女流作家小説の同時代評では「男性の作つた影を自己の姿としている〈女性〉、旧い〈女性〉しか描かれていないという批判がなされていた」<sup>七</sup>と述べる。その一例が先の塩田の批評であるが、高野はそれに対し「赤坂」で秋子の原動力になっているのがSさんやそれへの思いではないとし、「秋子を動かしていくのは、そのような評価（叔母の言う潤いのある体\*注引用者）をもたらず自己の変化を求める気持ち、あるいは「此上更に／＼明るい世界に顔を出したい」という思いであ

る」<sup>八</sup>とする。Sさんへの恋情から男性に求められる女性になるのではなく、変化を求める秋子の主体性を積極的に見出そうとしている。

このように、「赤坂」は、結婚へと向かう女性の温かい心持ちを書いた物語でありながらも、その反面、女性の生き方への主体性も看取できる作品とし読まれてきた。本論は後者の論をより推し進めるものであるが、仕事を辞し結婚へと向かう女性の生き方の変化を主題としている本作を扱うにあたって、まず考えたいのは、菊子の女性観がいかなるものだったのかということである。もちろん、主人公・秋子と菊子とは別に考える必要があるが、作品の背後にある作家の価値観も押さえておくことで、作品の揺らぎの諸相をより鮮明化できると考える。菊子の労働観ならびに結婚観を中心に、小説が発表された一九一〇年頃に書かれたエッセイからその特徴を明らかにする。その上で、タイトルでもある赤坂という場所との関わりから、秋子の内面のみならず外見の描写について考察し、一筋縄ではない本作において、より詳細なテクスト分析を試みたい。それにより職業作家として身を立てようとする菊子の女性作家としてのふるまいの一端を

探っていく試みである。

## 一、職業作家・菊子の労働と労働観

菊子の生涯に渡る仕事を網羅的に調査し、選集を編んだ金子幸代は、菊子作品について、「生活に苦しむ女性を描くにしても菊子の目には、その豊富な職業経験に基づく確かな社会的視点がある」<sup>九</sup>と述べている。少女小説から出発し、少女や大人の女性を主人公にした多くの作品を残した菊子作品の写実性は、自身の労働経験に裏打ちされたものであるなら、菊子の労働経験とそれによって形成された労働観を、押さえておきたい。

まず、菊子が作家として身を立てるまでの略歴を、金子の作成した作品執筆年譜<sup>一〇</sup>を参照しながら追っていく。富山に生まれた菊子は、数え年一七歳の時、従姉・樽井ふさと共に上京し、ふさ夫妻の家に足掛け四年寄宿する。その間に、東京第一女学校（中退）と英語塾に通っている。一八九九年には、戸主である弟の計報（父は既に他界）により帰郷しているが、その時に実家の生活の窮乏を見た菊子は、「働かねばならない、勉強しなければ

ばならない。豪<sup>えら</sup>くならなければならない。人に頼つてはならない。黙つて、黙つて、自分で倒れるまで働くことだ」<sup>二</sup>と当時の心境を後のエッセイに記している。実際に、ふさ夫婦の離婚を機に家を出た菊子は、母と弟妹を呼び寄せ、家計を支えるために働くことになる。共済生命保険（現明治安田生命）で事務員をしながら教員伝習所に通い、その後千葉の港町にて小学校の代用教員をしている。この頃から尾島菊子の名前で少女小説を執筆し、一九〇三年には、第一作目とされる「破家の露」（『新著文芸』七月）を秋香女史の名前で発表する。また代用教員の経験をもとに、一九〇六年に発表された「漁師の娘」（『少女界』三月）では、貧困であるが才気ある教え子の物語を書いている。

東京に戻ってからは、東京高等工業学校（現東京工業大）のタイピストとして働いた。菊子が仕事勤めをしていた時の様子は後のエッセイ「娘時代」「美しき人生」（一九二五年七月）に詳しく書かれている<sup>三</sup>。このエッセイによると、事務員やタイピストとして働く菊子は数学の能力を重宝され昇給していったという。それでも「数学の頭脳<sup>あたま</sup>などは丸で無用」であり、「一心に志す文芸の世界

に浸ることのみ没頭してゐた」と書くように、文筆業で身を立てることが菊子の人生で最優先事項であった。

仕事面において一定の評価を得ながらも、それはあくまで生活の手段であり、「昼の中黙つて働いて、夜自由に勉強が出来れば、もうその他なんにも欲望がなかつた」というように、文筆で生活を立てる目標へ菊子が一心に向かつていたことがわかる。そして「なんにも欲望がなかつた」という中には恋愛も含まれている。異性から自由であることを自身の「唯一つの強味であり、矜持」と続け、これを放棄したら「自分の芸術的前途は終りである」とまで信じてゐた」と書いている。こうした「極端な辛抱強さと、此数年間の睡眠不足と、過度の心神の疲労」で倒れたというエピソードからは、働きながら帰宅後に原稿に向かう生活の大変な困難がうかがえる。何年もその生活を続けたというから、そこから一家の家計を支える責任感や作家への強い願望、またそれに向かい努力する強固な意志が伝わってくる。

こうした二足の草鞋から解放され職業作家となったことを、菊子は一九〇九年一〇月の『婦人世界』に発表されたエッセイ「楽しき我が家」で次のように書いている。

東京へ出てから八年。その間、独力で小さいながらも一家を背負つて立つて来た私の奮闘生活の苦心は、実に筆紙に盡されません。それでも、いろいろ職業を求めて今日まで支えてまゐりましたが、弟も妹ももう大きくなつて、家政を助けてくれますし、私も窮屈な勤めを退いて、好きな文学に筆を執つておりますから、漸く安心な身分になりました。二三

ここから代用教員・事務員・タイピストの職に就き、苦勞しながらも独力で一家を背負つてきたという菊子の自負と、そこから解放され、ようやく念願の職業作家になつた安堵や達成感が見て取れる。経済的事由によつて必然的に働かなければならない境遇にあつたとはいへ、こうした労働経験は、菊子の「此世は所詮遊んで暮らすところにあらず。女だつてそれ相当に働かねばなりません」<sup>二四</sup>という労働観や人生観を形成していくものであつた。菊子は一生懸命に働く理由を自身の習性とするもの、労働は人生の第一義とする作家人生を形成する一部であり、だからこそ並々ならぬ決意で働き、そうした労働経験を肯定的にとらえている。

こうした個人の経験を、より一般化していくのが、職

業婦人を取材した記者としての仕事である。菊子は『婦人画報』の記者として、一九〇九年から一九一〇年頃にかけて、職業婦人を取材し、その実情や困難を紹介する記事を誌面に発表している。一九一〇年二月の「職業に依りて生活する婦人の状態」では、「女子に生れながら一家の主婦としてよりも職業に依つて日常の生活をしてゐる婦人」として女医者、産婆、看護婦を紹介する。ここでは、「人の奥様となつて、足の爪先から頭のとつぺんまで旦那様の血を絞り、狭い家庭内を天地として翼を伸ばして被居る方達には想像にも及ばぬ程苦勞が多い」（傍点原文）と述べ、主婦として家庭に入ることと比べ、職業婦人の苦勞が並大抵でないことを説く。またこの文面からは、夫に経済的に依存し、狭い家庭の世界でのみ生きる女性に対してはやや批判的であることもわかる。

また同年一〇月の「婦人の就職難」では、高等女学校令（一八九九年）によつて女子が高等教育を受けるようになった結果、「充まらぬ夫を持つて世帯の苦勞ばかりしてゐるよりも、寧ろ職業を求めて自活した方が、結局氣楽であるという考へ」<sup>一五</sup>から、職に就く女子が増加してきたとし、しかしながら、働くにあつては経験のな

い人にはわからない様々な不自由や苦勞があるとし、その具体例を列挙する。そこに挙げられている項目は「肉体上の不便」「女子の職業を防ぐる男子」「前で追従して陰で嘲ける」「人の妻は殊に困難」「精神上の不便」であり、生理による身体の不調、異性間における風評、女性に職を奪われた男性の工作上的妨害、男性の親切の裏での嘲罵、主婦との両立の困難などが具体的に書かれている。こうした現代にも通じる働く女性の数々の不自由や不便といった苦勞は、菊子の経験に拠るものであろうし、労働を余儀なくされ苦勞してきたからこそ、時代の潮流として働く女性が増えたことに対して、その大変な困難や厳しさについて一言言を持つていたといえる。

このエッセイが発表された翌年の一九一一年には、女性の性や生の自由や権利を求めた青鞥が結成され、菊子はその創立とともに社員となった。青鞥の理念に基づいて女性たちの手からなる雑誌『青鞥』が創刊されるが、その第二巻第一号では文芸協会によつて上演された「人形の家」（一九一一年、帝国劇場の特集が組まれている）。その誌面には、家庭の主婦や母親としてではなく、個としての生を求めて家を出た主人公・ノラの自我の目覚め

に感銘を受けた論考が並ぶことになった<sup>一六</sup>。自らが働き、また職業婦人を取材し記事を書いていた菊子は、いわば家を出た後のノラの困難を既に論じていたということである。〈新しい女〉の議論が活発になる以前に、菊子は自身の労働経験と記者の取材を通して、女性の自立とりわけ労働に関して、空想上の理念ではなく現実<sup>一七</sup>に立脚した観点から、これらのエッセイを残していることは注目してよいだろう。

〈新しい女〉の議論が活発になる一九一三年には、「日本の婦人として私達は今日の婦人問題を如何に考ふるか?」『新日本』(十一月)という特集記事に、菊子もその一人として寄稿している。そこで自身の独身生活は「日本の法律」や「男子の圧迫」への反抗だと誤解されているかも知れないが、「一家の境遇上」のやむを得ないことだったとし「無暗と女の独立を勤めたり、或は極端な女子解放論とやらなどに賛成したりはいたしません」とし、次のように述べている。

只、私自身の単なる意見としては、女は、誰でも結婚するとしないうちに拘らず、自分一個の始末だけは出来るくらの覚悟と、それだけの技倆を持つてゐ

なければならぬまい、と始終さう思つてゐるのでございませぬ。(傍点は原文) 一七

このように菊子は青鞥をはじめとした当時の「極端」な女性解放論には慎重な態度を示し、「賛成」しないとした上で、「自分一個の始末」つまり経済的精神的な自立を唱えている。そのための「技倆」の必要性を説くが、これは職業やそれに相当する技術のことを指すだろう<sup>一八</sup>。革新的な女性解放の議論とは一歩距離を取りつつ、女性の自立を説く菊子のふるまいは、保守的に映っていたようだ。「女流作家十人十論」『處女』(一九一五年八月)という特集記事で嵯峨秋子が菊子の人となり<sup>一九</sup>を次のように評していることにもあらわれている。

菊子さまは決して所謂新しい女性ではないと思はれます。それは俊子さまのやうな活発放縦は見られませんが。雷鳥さまのやうな大胆でもありません。要するにすべてが消極的だと思ひます。言い換えればつましくしとやかな女性だと思ひます。即ち眞の女性を思はしめるお方です。なんとなく弱々しい處があります。それでゐて世間の女性のやうに弱いだけではなく何處かに強い處がほの見えます。それで

ゐて対世間、乃至対個人と言ふ場合には何時も円滑に無難にすますお方です。一九

こうした人物評は、この後に続く「何故もつと突込んでお書きにならないだらうかと言ふ所があると同時に、一つとして読みづらいものはありません」という作品評にも繋がっていく。このように同時代を生きた女性作家から見た実際の姿としても、菊子は〈新しい女〉ではなく、控えめでしかしその中に芯の強さがほの見える穏やかな人物として映っていたということがわかる。先の菊子のエッセイの引用では、「単なる意見」という控えめな言い方に反して、その意見を傍点で強調するが、こうした穏当さを保ちながらも強い意志で自らの主張をするふるまいは、後述する「赤坂」でもみられるものである。

以上をまとめると、菊子は一家の家計を支える大黒柱として、代用教員、役人、タイピスト、記者の職につき、これらの経験は作品の題材となっただけでなく、労働を余儀なくされた境遇から、労働への並々ならぬ決意とともに女性の労働を肯定的に捉え、女性の自立のために技術を持つことを推奨していたことが確認できた。また、記者として菊子は様々な働く女性を取材し、仕事を持つ

女性の苦労を詳細に書き、その困難をリアリズムの透徹した眼差しで見つめた。他方、主婦として家庭に入る女性に対しては、男性の庇護のもと暮らすことの従属性や家庭の中にいる狭さをやや批判的に見ている。

菊子は一九一四年、三五歳の時に画家の小寺健吉と結婚する。当時としては晩婚であり、夫が年下であったことと併せてマスコミに取り上げられることになる。遅かったとはいえ結婚という選択をし、しかしながら、それ以後も作家業に専念した。菊子は結婚に否定的だったというわけではなく、職業あるいはそれに相当する技術を持つこと、つまり自立的であることが、女性の自由や解放へと向かうと考えていた。労働の厳しさを経験し理解していたからこそ、「無暗」に女の独立を説く単純さを批判したのである<sup>20</sup>。

## 二、「赤坂」における秋子の変化と反転する価値観

では次に「赤坂」をみていく。主人公・秋子は職業婦人であった過去を「忌はしい」と否定していくように、一見すると、今までみてきた菊子の労働観を反転させて

いるようにみえる。しかし、労働から結婚への移行にあって、そこに描出されるのは一筋縄ではない秋子の心境、行動である。物語の出来事を時系列で追うと、秋子が役所勤めを辞すところから始まり、Sさんと目黒の散歩に出かけ、Sさんと別れた後その足で赤坂にある家の内見をして引越しを決める。赤坂の地で、芸者たちと触れ合う中で、银杏返しに髪を結ってみたり、三味線を習いたいと思うようになったり、内面と外見が変化していく。最後は三味線の師匠の家へと飛び込むところで物語は終わる。

冒頭で秋子は、気忙しそうに時計を見ている役所の同僚である富田に惜しまれながら勤めを退く。そして忙しい勤め人に交ざって「とぼ／＼」と袴を蹴って歩く富田の後ろ姿を見た秋子は「温かい血の通ふのを感じ」ている。秋子が富田や女役人だった今までの自分をまなざす視線は、時間に管理されながら忙しく働き、同じことを「毎日々々繰返して得意がつてゐる」ことに同情的で侮蔑的である。秋子が語る女役人の日課は、朝袴を着けて役所の門をくぐり、午砲がなると弁当をひらき、その昼休みに自分とは違う「平凡な女」を見下し批判する「快

談」に興じ、お金を数えあげた後に黒い事務服を脱ぎ帰路に着くというものだ。時間に管理され気忙しく働いていた過去は、後に「何等の潤ひもない冷やかな生活」と振り返ることになる。

こうして仕事を辞した後の秋子は、Sさんの「温かい情緒」や「長閑な」小唄や「緩りとした態度」に触れながら、温かでゆったりとした心持ちに変化していく。Sさんを思い「楽しい活々とした明るいことばかり考えてゐる」秋子は、周囲の人から「大変に圭角が取れた」と「さも満足したやうに」言われるように、その生活の変化は見た目にも明らかなほど、秋子の人生を充実させている。このように時間に管理されて気忙しく働く冷やかな女役人としての生活と、温かく情緒あるゆったりとしたSさんの恋人としての生活は、本作では、冷やかな／温かい、忙しい／長閑として対照的に書き分けられる。

しかしながら、こうした新生活は、かつては否定すべきものであり、女役人だった頃の「快談」では次のようなことが語られている。

それから例の、女が流行を追つたり、化粧をしたり、

はにかんだりするのは卑しい下心があるからだと言ふこと、男に食べさせて貰つて、其代りに如何無謀な事にでも屈従して全く自己を没却してゐること、島田や銀杏返しに結つてゐる女の無教育なこと、針仕事だの音曲だの計りを女の道と心得て、それ以上は時間を有効に利用することを知らぬ時代後れの女の多いこと、時計の必要を感じぬ女の憐れむべきこと、などを二十分の休み時間の「快談」としてゐる。

秋子は「得々として往来に平凡な女を嘲笑つた上級の女役人の当時のことは、最う思ひ出したくない」とこれらの過去を否定し、その上で、「平凡な女」の典型として挙げた、銀杏返し、音曲つまり三味線を習うことを、自らの生活に取り入れるようになっていく。この極端なまでの価値観の変化をもたらしたものがSさんなのか、自身の変化を望む心なのかはひとまず置いておくとして、この女役人の過去について語る秋子の語りに注目したい。小林裕子は女役人の過去を否定する語りに菊子の「新しい女」への反感が示されている」三とするが、むしろ、「赤坂」と対照される「ある夜」で独身を貫く主人公が自分の生き方を裏返すように友人に結婚を勧めている点

について「この矛盾に満ちた言動、言葉と認識との落差の大きさ、その皮肉と自嘲の痛み、それらの屈折した表現を通して、菊子は目覚めた女の動揺と、女性に対する抑圧の強大さを、裏側から照射している」三と述べていることが、そのままこの箇所にも当てはまるように思われる。これから「平凡な女」へと変化していく秋子にとって、かつてそうした女を侮蔑していたことを、これほどまで具体的に辛辣に語りなおすのは不自然ともいえ、さらにその女役人の過去を否定していく、二重の否定に秋子の抱える矛盾や屈折があらわれている。一枚岩ではない女性たちの姿が描出され、またそれは秋子という一人の人物の内にも生じる葛藤でもある。

また後の箇所で、女役人だった当時を「表面には清らかな理想を唱へ」ていたと語るように、「表面」という断りはあるものの、女役人だった過去を「清らかな理想」と語つてもいる。女役人の「十年の月日」は、完全に否定し切れるものではなく、価値観を反転させていく極端さの一方で、そこには割り切れない矛盾や屈折もうかがえる。

このように秋子はSさんがもたらしてくれる温かさや

長閑さに一心に向かっているように見えて、その語りは

単純ではない。Sさんと散歩し「満足と安心」を覚えた秋子は、「温かい今の心持」を大切に留めて置こうと、余韻を味わうため電車には乗らずに歩いて帰る。この場面ではSさんのぬくもりが心を占め、秋子の心は充足しているように思われる。しかし、その道中で貸家の貼札を見つければ、そのまま家を内見し転居を「うか／＼と即座に取極めて了つた」（傍点原文）のである。Sさんとの散歩の後で「何となく調子づいて」いたのならば、なおさら秋子はSさんとの将来を思い描いているはずである。仕事を辞めたのは「男に食べさせて貰」う「平凡な女」になるためではなかったろうか。冒頭で批判した「平凡な女」に変化していく物語の流れからすれば、そう読めても然るべきだろう。ところが秋子は家族とともに引越しをしている。秋子は母と弟妹と暮らしており、「家の柱に立つてゐる主人」と後の箇所でも語られている。秋子は仕事を辞してもなお、一家の支柱であり、いわゆる結婚を機に家庭に入るといふ発想を持ちえていない。「此度の家は好いですね」と新居を褒めるSさんも、秋子とその家族を独立したものと見ており、一家の新生活に干渉

しない。

### 三、「赤坂」がもたらした変化―銀杏返し

この赤坂への引越しは秋子にさらに大きな変化をもたらす。それは「周囲の空気が今迄と恐ろしい違ひ」である赤坂という特有の地によるものでもある。湯屋にいる女が「悉く芸者」という光景を「珍しかった」と語るように、赤坂は明治にあつては芸者街であつた。実際に菊子は赤坂に住んでおり<sup>三三</sup>、この独特な雰囲気を持つ赤坂から本作の題材を得たと推察される。

秋子は湯屋で芸者たちが「一心不乱に美しく／＼と扮り上げる」光景を見て、体を洗うのを忘れるほど「茫然」<sup>ほんやり</sup>とし、その見慣れぬ光景に衝撃を受ける。しかし、その後には「何か変つた扮装」<sup>つくり</sup>をしてSさんを驚かせたいとし、髪結いに行き銀杏返しに結っているように、美しい外見へと磨きをかける芸者の姿をみたことで、秋子もまた変化していく。

この銀杏返しという髪型は平出鱈二郎『東京風俗志中の巻』（富書房、一九〇一年）の「女髻」の項によれば、

「少女より年増に至るまで、通じて結はるゝが上に、簡易にして手づからにも結はるれば、最も行はれ、奥様といはるべきも、また平常はこれに結ふが多かり」<sup>二四</sup>とあり、年代問わず多くの女性がしていた一般的な髪型であることがわかる。ところが秋子は、銀杏返しを「下女か、さもななくば賤しい業をする女の結ふものだと思つて、今迄心から軽蔑していた」という。そして「素人」や自分ほど年輩の奥さんが結っていると、「趣味の低さ」や「教育の有無」を想像したくらい「下等な髪と心得てゐた」と続ける。この「下等」はかつての「上級の女役人」と対比されるものである。

また先の「快談」の中で銀杏返しとともに批判されている島田は、「普通には、妙齢に至れば島田、嫁ぎて後は丸髷に結ふを習ひとす」<sup>二五</sup>とあるように、結婚前の女性のごく一般的な髪型であることがわかる。結婚へと繋がっていく島田や、多くの「奥様」がしている銀杏返しをこれほどまで批判するのは、それが家庭の主婦として「男に食べさせて貰つて、其代りに如何無謀な事<sup>どんな</sup>にでも屈従して全く自己を没却してゐる」女性を連想するからである。

このように秋子の価値観は、「上級」という意識から世間一般の多くの女性を見下し痛烈に批判するものである。もちろんこれは当時の回想として語られるものの、この場面の語りにあつても「平凡な女」批判を止めていない。その銀杏返しに秋子は結うのだが、その姿を見た顔なじみの芸者の福子は、「えゝ。能く似合つてよ。束髪よりか如何に好いか知れない」と言葉をかけているように、それ以前の秋子は束髪だったことがわかる。束髪は洋装とともに普及した髪型で「優美を欠く所多ければ次第に衰へて、女学生の如き一部のものに止まるびみにな」<sup>二六</sup>り、再び流行したものの「女髪結を要せずして手づから結ふべく、髷の飾りといふものも少ければ、呼んで儉約髷など々嘲るもあり」<sup>二七</sup>という。つまり優雅さに欠け、高等教育を受ける女学生がする質素で合理的な髪型であることがわかる。女役人として一家を支え儉約する堅実さのあらわれであり、だからこそ、島田や銀杏返しに結う女性たちへの反発がことさら強かつたのだと考えられる。

ただそれを「今日は何となくのんびりした気持」(傍点原文)で、銀杏返しに結っており、傍点でことさら強調されているように、特段深い考えもないままに、また赤

坂の雰囲気に流されるように結っている。これはかつて自分が批判していた「自己を没却」することに他ならない。そして本作で時間に縛られた女役人の「冷やかな生活」と対比されるSさんへと向かう生活は、長閑、のんびり、暢気、気楽、悠然といった言葉が用いられている。これらはSさんや赤坂の土地やそこにいる芸者がもつ「情緒」として捉えられる一方で、冷やかな頭でないこと、のぼせていること、明晰な思考を持ちえていないことでもある。

#### 四、「赤坂」がもたらした変化―三味線

さらに秋子は「此年になつて何だか変な事は変」と感じながらも、三味線を習いたいと思うようになる。それは隣に住む質屋の大家夫婦が奏でる三味線と唄が漏れ聞こえ、湯屋で顔なじみになった芸者の福子と三味線の稽古について話し、その福子が通う常磐津の師匠の家が近所にあるといった赤坂という環境によるところも大きいだろう。引越し当初、隣から音が聞こえてきた際には、「気楽な質やだ」と思った」とさして気にも留め

ていない。むしろ、銀杏返し以上に三味線を弾く女性を「みくび軽蔑つて、三味線！」と云へば直ぐ墮落を連想した位、見下げてゐた」という。しかし、銀杏返し姿の秋子が、いつもの湯屋では誰と間違われたのか三助に芸者の席に通され、鏡に映る自分の姿に「笑を抑えきれなかつた」ほど満足し、また福子にも似合っていると褒められ、すっかり気を良くしたことで今度は三味線へと興味を向けていく。

福子から三味線を習うことを勧められ、一旦はそれを断りながらもその時、「潤ひ」という叔母の言葉を思い出しているように、三味線を習い唄や所作を身に付けることは、叔母から足りないと言われた女としての「潤ひ」を補うものである。その意味では女性らしさを獲得しようとすることであり、Sさんあるいは世間から求められる女性像へと近づくものである。また、秋子はSさんに唄を習うことを勧めており、それは三味線と唄を奏でる質屋夫婦を想起させ、二人が夫婦になつていくことを連想させる。

しかしながら秋子にとつて三味線を弾くことは「卑しむ」ことであるという認識であり、それを習うことに二

の足を踏むのは、中学に行く弟や女学校に行く妹が驚くことや、一家を支える「主人としての権威を損なう」と、<sup>うろ</sup>「第一世間の聞えが煩さい」ことが挙げられている。

つまり、世間一般の価値観からして三味線を習うことは、聞こえが悪いことであり、秋子は決して社会が要請する模範的な女性になろうとしていないわけではない。三味線を弾く女に「墮落」を連想したというが、「墮落」とは社会規範からの逸脱に他ならない。

また秋子が银杏返しに結った際には、それを見たSさんを想像し、「さも自分の趣味に合ったやうに莞爾<sup>にじやく</sup>として見上げた彼美しい晴々した顔が、如何に私の感情を柔げるか知れない」と述べているように、Sさんの趣味に合うことは秋子の一つの喜びである。しかしながら、Sさんに三味線を習いたいことを告げた時に、「真実？偽でせう。それとも習ふ勇気がありますか、あるならおやりなさい」と反対こそしていないものの、驚きを持って受け止めている。

このように世間の価値観からすれば三味線習いは「卑しむ」ものであり、特段Sさんの趣味に合うともいえない。ただSさんが乗り気でないもののそれを認めている

のは、Sさんは絵描きであり、それゆえ「世間とは没交渉<sup>ゆつたり</sup>の、悠然とした調子の者」であるからである。三味線を習うことは、世間一般の価値観から逸脱する行為であり、しかしながら、その世間との関わりが希薄なSさんに許容されることで、一般的な価値観から外れてはいるものの、一人の男性の愛の範疇に留まるのである。

とはいえ秋子が歌いたいのには、「骨身に泌み渡るやうな哀つばい謡」で「悲しい唄でも謡つて、しんみりした心持になりたい」（傍点原文）という。質屋夫婦のように二人で奏でることになるだろう音は、決して明るいものではない。「哀れ」で「しんみり」とした心情を抱えたまま、Sさんへと向かっている。

また秋子は「此上更に／＼明るい世界に顔を出したいと焦つてゐる」というように、Sさんとの新生活は明るさへと向かうものであるはずが、季節は秋から冬先にかけて移行していく。「霜月の冷たい風が裾にヒヤ／＼する夕方」に、芸者の待合が並ぶ通りを横目に見ながら常磐津の師匠の家の戸をくぐるところで物語は終わるが、最後には「顔が赫<sup>くわつ</sup>として俄に身裡が熱くなつた」という一文が置かれている。躊躇しながらも意を決して戸を

くぐる秋子には、〈冷たさ〉でも、〈温かさ〉でもなく、〈熱さ〉という情熱のほとばしりがある。ここに世間体を省みず自分の意思のままに飛び込んでいく主人公の姿がある。それは「此頃此様事にばかり頭脳を悩ましてい」る」ほど、悩んだ末の選択であり、世間と自己との葛藤の末、自らが選んだ道である。「平凡な女」批判の上に成り立っていた女役人としての冷徹な生き方でもなく、ましてや自己を滅却した従属的な女性でもない。Sさんと愛情を育みながらも、自分の生き方に変化と明るさを探り求めて悩み邁進する姿がそこにある。

## おわりに

以上、前半部では「赤坂」が発表された一九一〇年頃のエッセイから菊子の労働観の特徴をみた。事務員、代用教員、タイピスト、記者という職業経験を通じて、女性の労働の困難を痛感・熟知していたからこそ、女性解放や自由を主張することには慎重な姿勢を示していたことが確認できた。自他ともに〈新しい女〉という自覚、認識はなかったようだが、その一方で、職業経験を通じ

て労働の重要性と厳しさを理解し、女性の労働やそれに相当する「技倆」を持つことが精神的・経済的に自立へと繋がり、ひいては生の充足へと通じるものとして肯定されていた。

後半部では、そうした労働を思い出したくない冷たい過去として否定し、Sさんの温かい情緒に触れながら結婚へと向かう主人公・秋子の変化を書いた小説「赤坂」を取り上げた。役所を辞して世間一般的な結婚へと向かう大筋において、しかしながら、そこに収まらないテクストの諸相を、芸者街であった赤坂という地への引越しによって、秋子の内面と外見に生じた変化を、銀杏返しや三味線習いといった風俗に着目し考察した。秋子の語りからは女役人であった過去を否定し切れず、一家の主人として自立し、また世間という規範に抗い自分の欲望を成就していく〈熱さ〉があることを指摘した。

このようにエッセイで表出された労働や女性の生き方に関する価値観と本作で描出される女性主人公のそれとは一見すると大きく隔たりがある。主人公が潤いのある女性に変貌していく本作は、一般誌に「女流」作品を執筆するにあたり、菊子も男性中心社会ならびに文壇にあ

って、ある種それに見合う作品を書いたとも推察され、また菊子の持つ慎重さや穏当さのあらわれともいえよう。しかしテクストの細部を見てみれば、主人公は、異性との恋を育みながらも決して従属せず、世間の求める価値観とは異なる自らの願う明るい生活へと、悩みながらも邁進していくものであった。それを可能にしたのは、女優人として一〇年間に渡る苦勞や困難の経験を経た、自立的な生き方のできる「技倆」を持つ女性だったからである。

## 付記

- ・ 本文の引用はすべて『中央公論』（一九一〇年十二月）に拠った。
- ・ 旧字体は新字体に改めた。
- ・ 引用文の漢字のルビは適宜省略した。
- ・ 本稿は、富山文学の会六月例会（二〇二二年六月一日、於・富山高等専門学校射水キャンパス）での口頭発表に基づくものである。貴重な意見を賜った方々に深謝申し上げる。

## 注

- 一 「女流作家小説十篇」の掲載作品は、水野仙子「娘」、小金井喜美子「借家」、森しげ女「おそろひ」、国木田治子「鶉」、長谷川時雨「冬のくるころ」、岡田八千代「絵の具箱」、尾島菊子「赤坂」、永代美千代「二銭銅貨」、野上弥生子「人形」、小栗籐子「多事」である。
- 二 小林裕子「職業作家」という選択―尾島菊子論『明治女性文学論』（翰林書房、二〇〇七年）
- 三 西田谷洋「小寺菊子の小説にみる結婚と少女の自立」『始更』（二〇二〇年十月）
- 四 杉本邦子「尾島（小寺）菊子解説」『日本児童文学大系第六巻』（ほるぷ出版、一九七八年）
- 五 塩田良平「解題」『明治女流文学集（二）』（筑摩書房、一九六五年）
- 六 高野純子「中央公論」と「女性」―明治四十三年「女流作家小説十篇」を読む『文藝と批評』（一九九四年十月）
- 七 注六に同じ。
- 八 注六に同じ。高野は「自己の生き方や納得できる価値観の形成に関する彼女たちの試みが、屈折した形で収斂してしまうことの限界性は否めない」としながらも、当時の時代相を考慮すれば評価できるとしている。

- 九 金子幸代「小寺（尾島）菊子の少女雑誌戦略―家出少女小説『綾子』の『冒険』―」（『小寺菊子作品集1少女小説・小説』（桂書房、二〇一四年）
- 一〇 金子幸代「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島）菊子研究―作品執筆年譜を中心に―」（『富山大学人文学部紀要』（二〇〇九年八月）、金子幸代「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島）菊子研究2―人と作品―」（『富山大学人文学部紀要』（二〇一〇年二月）、『小寺菊子作品集3随筆・評論』（桂書房、二〇一四年）の略年譜を参照した。
- 一一 小寺菊子（四）前後三たびの帰省『女性日本人』（一九二三年八月）↓『小寺（尾島）菊子選集第二卷（大正期I）』（富山大学人文学部比較文学・比較文化研究室、二〇一〇年）引用はこれに拠る。
- 一二 「娘時代」『美しき人生』（一九二五年七月）↓『小寺菊子作品集3随筆・評論』（桂書房、二〇一四年）引用はこれに拠る。
- 一三 小寺菊子「楽しき我が家」「婦人世界」（一九〇九年十月）↓『小寺（尾島）菊子選集第一卷（明治期）』（富山大学人文学部比較文学・比較文化研究室、二〇一〇年）引用はこれに拠る。
- 一四 小寺菊子「困難と戦ひし十年間」「少女界」（一九一一年五月）↓『小寺菊子作品集3随筆・評論』（桂書房、二〇一四年）引用はこれに拠る。
- 一五 小寺菊子「婦人の就職難」「婦人画報」（一九〇九年十月）
- 一六 菊子は後に「人形の家」について次のように書いている。「当時イブセンの『人形の家』と共に、『故郷』は私たちの若い心を極度に刺戟し、あらゆる感激と興奮に酔はせたものだつた。いづれも束縛された女の過去の生活から解放を叫び、新旧思想の衝突を取扱つたものであるから、さふいふ新しい劇を見るといふことだけでも既に若人の胸が踊つてゐるのに、須磨子の熱狂的な度強いほどの演技が珍らしくて、全く私たち文学の世界にあこがれる青年子女をすつかり現実からはなれた世界に誘ひ込んでしまつたのである。『人形の家』のノラも、『故郷』のマクダも、自分といふものに見覚めて家出を決行した女たちであつた。」小寺菊子『故郷』を見る』（『花犬小鳥』（一九四二年一月）↓『小寺菊子作品集3随筆・評論』（桂書房、二〇一四年）引用はこれに拠る。
- 一七 尾島菊子「日本の婦人として私達は今日の婦人問題を如何に考ふるか?」（『新日本』（一九一三年一月）
- 一八 後に書かれたエッセイでは「職業につくつかぬは別問題として、あたゝかい幸福な家庭のヒロインとして立派に立つてゆく上にも、経済的に独立し得るだけの能力を持つてゐることは非常な強みでもあり、又一般女子の地位を向上させる唯一の手段であらうと思はれる」と述べている。「技倆」とは「経済的に独立し得るだけの能力」であり、それを「非常な強味」であり「女子の地位を向上させる唯一の手段」とより明確に書いている。小寺菊子「同性の眼に映じた女学生（一）翼を伸ばし行く女学生へ」『女性性

本人』(一九二三年四月) ↓ 「女学生たちへ」 『美しき人生』 (一九二五年七月) ↓ 『小寺菊子作品集 3 随筆・評論』 (桂書房、二〇一四年) 引用はこれに拠る。

一一四〜一一五頁。  
 一一二頁。  
 一一六〜一二七頁。

一九 嵯峨秋子「尾島菊子さま」 『處女』 (一九一五年八月)

二〇 「文芸に現はれたる好きな女と嫌ひな女」 『読売新聞』 (一九二二年五月一日) の記事で菊子は、「天の網島」のおさん酒屋のおそのなど凡て純日本式の最も女らしい女が大好き」とし、「嫌いなのはイブセンの「ノラ」のような女」と書いている。このことは注一六の引用にあるように「人形の家」を見た時の興奮とは相反するように思われる。しかしこの演劇が「全く私たち文学の世界にあこがれる青年子女をすっかり現実からはなれた世界に誘い込んでしまった」と述べているように、菊子にとってノラとは、文学の世界の理想であり、現実離れとして捉えており、それに対する反感であったともいえるだろう。

二二 注二に同じ。

二三 注二に同じ。

二四 「尾島菊子女子はこの間、赤坂区新坂町七十二から同区表町三の三十二へひつ越した」という記事がある。「新しい女(その十二) 尾島菊子女史」 『読売新聞』 (一九二二年五月二九日) ↓ 『新らしき女』 (聚精堂、一九一三年)

二五 平出鯉二郎『東京風俗志』 (富書房、一九〇一年) 中の巻「女鬻」の項 ↓ 『東京風俗志』 (原書房、一九六八年) 引用はこれに拠る。

## 富山県人が起業した出版社、北星堂書店

―戦前、海外に日本を紹介することに貢  
献した出版社

千田 篤

## 【はじめに】

一九一五年（大正四）、第一次世界大戦開戦の翌年、東京神田錦町で、北星堂書店（ほくせいどうしよてん）という出版社が創立した。創業者は富山県出身の中土義敬（一八八九―一九四五）である。当時二十六歳だった。

同社は、関東大震災、東京大空襲の災禍を乗り越え、二代目社長中土順平の後継を経て、戦後も同地にあった。その間一貫して、同社は出版事業を通じて、国際貢献してきた。

具体的には、日本文化を英訳本で欧米に紹介し、欧米文化を日本で紹介してきた。

また、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン一八五〇―一

九〇四）の東京帝国大学における英文学講義録等を出版し、小泉八雲関連の出版社として、国の内外で高評を得た。

こうした対外的な活動の一方で、同社は、日本における英語教育用に多数のテキストを出版し、日本の中等高等大学の英語教育に貢献してきた。

たとえば、一九四三年度（昭和十八）において、同社の英独教科書を採用する学校（大学学部、高等學校、専門學校等）は、二百四十七校にのぼっている。

こうした事業の様相を、たとえば第二次世界大戦終戦の前、英国のマンチェスター・ガーディアン紙が、次のように評している。

「東洋に於ける唯一の英文書出版商北星堂で出版された書物が英文学の本場であるイギリスの市場に現れるようになったことは、面白い現象である、北星堂と云ふ商号は即ちポールのスターの意味を取ったものである」

海外の評判は、この他にも、オヴザーバー（倫敦）ニ、

スフェア（倫敦）、紐育タイムス（米国）などがあり、北星堂を賞賛している。

北星堂によるこうした紹介は、決して我田引水によるものでなく、後述の【第一】で同社の感慨として述べるように、確固たる自負に裏付けられたものである。

あるいは近年の日本国内にあって、平川祐弘氏が、次のように記述している。

「戦後の日本で英語翻訳書を出版したのは講談社インターナショナルだが、それが出版事業を停止して以来、日本は外国に向けて自国の出版物を自前で世に送り出す、という手だてを失ってしまった。採算が取れないからであろう。そのことを思うと、戦前の日本で英訳書物を出版した The

Hokuseido Press は尊敬に値する」<sup>三</sup>

このように同社は、日本にとって欠くべからざる業績を上げてきた。

しかしその実態を知る人は一部の識者に留まり、世に知られることは少ない。

たとえば、小泉八雲を知るに格好の書籍『小泉八雲事典』の索引をみれば、北星堂として三〇項目が上がっている。しかし、それらは本文中の参照書籍の発行元として掲げられているにとどまり、同社の実績を説明する項目はない。

以上のことを踏まえ、先ず同社の事績を、同社が一九三八年（昭和十三）に発行した「欧米向け」「国内向け」二冊の出版図書カタログに基づき、【第一】【第二】で概説してたどる。

そして、同社（創業者）が世に残してきた資料群が、後世に伝えるべき貴重な資料群であること、ことに富山県内に保存すべきであることの意義を考察したい。

### 【第一 欧米向け・北星堂出版図書カタログ】

《カタログ名》

*The Hokuseido Publications*

*Books on Japan—Books on The Far East—The Works of Lafcadio Hearn, etc.*

この出版図書カタログは、一九三八年（昭和十三）秋版で、海外の読者に向け、全文英語のみ八十三ページの小冊子である。

巻頭に小泉八雲の言葉を引用し、正しい知識の伝播習得の大切さを示している<sup>四</sup>。続いて同社の出版事業に対する信念が掲げられている<sup>五</sup>。

このカタログは二部構成になり、それは

第一部は、Books on Japan and the Far East

第二部は、The Works of Lafcadio Hearn

である。以下これに沿ってカタログの概略を示す。

### 《第一部 Book on Japan and the Far East》

第一部では四十五冊が紹介され、いずれにも海外の諸紙の書評が複数添付されている。

最初の紹介書籍は JAPAN'S FOREIGN

RELATIONS—1542-1936, A Short History である。

同書のポリュームは約六〇〇ページで、日本が西欧勢力と初めて接触した時期から、満州問題の時期までを扱っている。これには、All About Book, Melbourne/ Great

Britain and the East, London など海外五社の書評が添付されている<sup>六</sup>。

他に紹介されている書籍に、『福翁自伝』の英訳本 THE AUTOBIOGRAPHY OF FUKUZAWA YUKICHI がある。この英訳本についてのエピソードは、参考文献に掲げた『日本の生きる道—米中日の歴史を三点測量で考える』を参照いただきたい。

明治の人物を紹介する書籍として THREE MEIJI LEADERS: Ito, Nogi, Togo が掲載されている。伊藤博文、乃木希典、東郷平八郎の事績である。

さらに、CHA-NO-YU 日本の昔話、倉田百三の『出家とその弟子』、菊池寛の『藤十郎の恋』、芥川龍之介の小説も英語に翻訳されている。

これらを総括する同社の感慨は、この後【第二】で紹介するカタログの中で次のように記されている。

弊堂は兼てより我国の文化を海外に紹介せんとし、夙より小泉八雲の各書を始め現代日本の代表的小説或いは劇、最近に於いては我國の風俗、習慣或いは政治外交に関する各書をも出版しました

ところ世界的に非常な高評を博し、今や三十六ヶ  
 国の諸外国の市場に我北星堂本の進出を見るに至  
 り我国文化のために聊か貢献を尽しつゝある事は  
 欣快とするところでありませう。

なお、戦前のこのカタログには掲載されていないが、  
 戦後の欧米向け出版物には、例えば二代目社長中土順平  
 の手による *HAIKU* (R.H. Blyth 著) 等がある。同書は  
 欧米の「俳句ブーム」の下支えとなっている。

《第一部 The Works of Lafcadio Hearn》

第二部では、同社が最も誇りとする小泉八雲の書籍類  
 が紹介されている。

冒頭には、かつて小泉八雲が東京帝国大学で行った講  
 義集「英文学講義集」全四巻が、小泉八雲の死後に同社  
 の手によって完成したことを喜び、それを  
 「PUBLISHER'S NOTE On the Complete Lafcadio  
 Hearn Lectures」で二ページにわたり掲げている。

それは、次のように始まっている。

It is with great pleasure that I am able to  
 announce the publication on the thirtieth  
 anniversary of the death of the great  
 Interpreter of Japan, of two volumes of  
 Lafcadio Hearn's lectures On Poets atherby  
 bringing the issue of the Complete Lafcadio  
 Hearn Lectures to a conclusion.

こうして小泉八雲の関連書籍の出版に心血を注いだ経  
 緯を英文で記述しているが、和文でも概略次のとおり記  
 している。

関東大震災（大正十二）の前年に、小泉八雲の  
 親友であり、八雲の死後遺稿管理者たるミッチェ  
 ル・マクドーナルドが、グラントホテルの二階で、  
 中土の右手をしかと握りしめ老の眼に涙を湛えて  
 「今後長い年月の間にかの偉大な文豪の遺著を発  
 行してくれたならば、ラフカディオもどんなに満  
 足する事であろう」<sup>七八</sup>

カタログでは、同社と小泉八雲との因縁を記述し、一九三四年（昭和九）、小泉八雲三十周年忌に『英文学講義集』が完成したことを述べている。そして、同社の出版になる小泉八雲の著書十六冊ならびに関連図書二冊が三十ページにわたって紹介されている。

また、小泉八雲を解説する記述として、「LAFCADIO HEARN'S LIFE」[Lafcadio Hearn Memorial in Japan]「The Lafcadio Hearn Library Toyama Koto Gakko, Toyama」の三稿が付いている。

このうち三番目の文章は、（旧制）富山高等学校に、小泉八雲の蔵書が収納された経緯が述べられているものである。これは、内外の小泉八雲研究者に、富山の重要性を宣言したものといえるだろう<sup>9</sup>。

さて、このセクションに於いて注目すべきは、同社が出版した小泉八雲のこれら著作物に対して、海外の書評が潤沢に添付されていることである。たとえば、イギリスの小説家ラディヤード・キップリングが同社に手紙を寄せている。

こうしたことは、とりもなおさず同社の出版物を通し

て、海外が日本の出版文化の水準の高さを認知していることであり、それこそが同社の功績である。

右に取り上げたカタログ以外に、同社の専ら小泉八雲関連の出版カタログとして、四十六ページ建ての英文のカタログが残されている<sup>10</sup>。

このカタログの表紙の最下段には小さな活字で、ON SALE BY MAJOR BOOK-SELLERS THROUGHOUT ENGLAND AND AMERICA と記されている。見落としてはいけない記述である。

さらに、同社が小泉八雲に関連する出版で日本の研究者と豊潤な交流があったことは、同社に残された次の七言絶句の漢詩でその一端を知ることができる。句頭には小・泉・八・雲と織り込まれている。当時の小泉八雲研究家の敬慕の念がみてとれる。

小 驅英魂文壇雄

泉 源神國永不盡

八 朵靈峰招颺客

雲 州歸化吾界人

内ヶ崎作太郎先生作 義敬書

これはもとより、中土家により守られてきた小泉八雲  
関連の資料は、富山大学附属図書館（中土文庫）と「高  
志の国文学館」に寄贈され、それぞれ保管されている。

なお、参考図書に掲げた『ラフカディオ・ハーンの英  
語教育』には、平川氏の北星堂の詳細な解説とともに、  
同社が出版した小泉八雲関連書籍リストがある。

## 【第二 国内向け・北星堂出版図書カタログ】

《カタログ名》北星堂出版図書総目録

この出版図書カタログは、国内向けのカタログであり、  
次のように分かれている。なお数字は掲載冊数。

中等程度各英語教科書 34

高等程度教科用原書其他（199）

小説・随筆・紀行 84、論文 44、哲学・科学 13、

劇 6、歴・伝 17、運動 1、

政治・経済・思想・社会 13

詩 10、英会話・英作文・英文典 11

Cheap Edition

Pole Star Library

辞典及便覧

Lafcadio Hearn 関係書

受験準備・英語英文学自修参考書其他 35

日本及極東関係書其他 36

## 《第一部 英語教材について》

ここで注目されるのは、中等程度あるいは高等程度  
教科書の内容であるが、まず中等学校用テキストの紹介  
に当たり、冒頭で同社は編集・出版の意図を次のように  
掲げている。

内容は夫れ夫れの程度により日本の学生に適す  
るやう編纂してありますから、外国出版のものを  
その儘抜粋してとんでも無い難解な語句に出くは  
すやうな事は絶対にありません。

印刷は綺麗で体裁もよく、また誤植や文字の不  
鮮明な点はありません。値段は大へん安く真に実

質本位を旨として居ります。

常に準備してありますが、萬一品切の場合でも一週間で必ず間に合わせますから、途中ご迷惑をおかけすることはありません。

虎の巻の発行を絶対禁じてあります。

この最終行には当時の学生たちの嘆息・落胆する心境が垣間見えて、ニヤリとしてしまおうが、それはさておき、個別に見てみると、中等程度では、イソップ、シンデレラ、シエークスピア等のお馴染みの顔ぶれが並ぶ。高等程度では、ロンドンの *The Call of the Wild*、ディケンズの *Christmas Carol*、コナン・ドイルの *Memories of Sherlock Homes*、*Selected Essays of T. H. Huxley* その他多種多様である。

そこで、もしもこれらを広く眺めれば、戦前の英語教育の水準を伺い知ることができよう。

そして、ただ書名のみで推測するのではなく、実際に手に取って、その英文の平易・難度をわが目で考察するならば、単に日本の英語教育の歴史をたどるばかりでなく、昨今の英語教育との重要な比較資料となるに違いない。

い。

で、実は、創業者中土家の手元に、先の戦災を免れたこれら教科書の現物が残されている。

全てが残っていたわけではないし、現存しているものでも初版ばかりではなく、重版後のテキストしか残されていないものも多い。しかし、それらを初版の出版年度にさかのぼって、重複を避けて一種一冊のみとして分類したところ、結果五百六十九冊（種）であった。その内訳は、次のとおりである。

年号／初版冊数	年号／初版冊数	年号／初版冊数	年号／初版冊数
大正 04 / 3	大正 05 / 2	大正 06 / 3	大正 07 / 6
大正 08 / 4	大正 09 / 4	大正 10 / 3	大正 11 / 11
大正 12 / 7	大正 13 / 29	大正 14 / 34	大正 15 / 32
	以上大正 138 冊		
昭和 02 / 31	昭和 03 / 34	昭和 04 / 28	
昭和 05 / 41	昭和 06 / 32	昭和 07 / 32	
昭和 08 / 28	昭和 09 / 29	昭和 10 / 30	
昭和 11 / 10	昭和 12 / 30	昭和 13 / 20	

昭和14／35 昭和15／8 昭和16／26  
 昭和17／8 昭和18／6 昭和19／3  
 昭和20／0

以上昭和431冊 総合計569冊

「図表1」参照

ここに掲げた最初の年、大正四年（一九一五）は創業の年である。新刊の無い最後の昭和二十年（一九四五）は、創業者社長中土義敬が二月に他界した年である。そして八月で終戦を迎えた年である。やがて後継の中土順平が外地から戻って来ることになる。

さて、ここに掲げたのは、三十年間すなわち大正四年から昭和十九年にわたるテキストの現物である。こうしたテキストあるいは副読本の類は、その時々々の教育の現場では重宝されるが、結局のところ使い捨てるのが常である。

ところが、幸運なことに五百六十九冊（種）の現物が残っている。中には、検定に出されたとの貼り紙の有るものもある。内容の推敲の跡が残っているものもある。これらが今日に伝わってきたのは、版元創業者の手に

あればこそその幸運というべきである。

日本の英語教育の変遷を考えてみると、先に述べた一九四三年（昭和十八）年四月現在における同社の教科書を採用する学校は、二百四十七校であった。

この中には、東京帝大理学部物理学教室や第一高等学校にまじり、海軍経理学校、陸軍科学学校、陸軍経理学校、あるいは海軍工廠行員養成所がある。

これらの学校が採用しているテキスト名はわかるのだが、残念ながら、現物の中にはみあたらなかった。しかし、この当時は、今日の俗説では英語教育が差し控えられていた戦時下であるが、しっかり英語教育がなされていたことがわかる証左である。

このように、創業家に残されたテキスト類五百六十九冊は、終戦前までの日本の英語教育史を考察する貴重な資料となるだろう。

これらは、日本を代表する国際貢献に寄与した北星堂の二つの事業、すなわち日本文化の紹介事業、小泉八雲の関係書籍の出版事業につづく、三つ目の事業、日本の英語教育に果たした業績の全貌を知る貴重な資料である。

## 《第二部 その他》

右記のほか、この国内向けカタログの「日本及極東関係書其他」のセクションの内容は、英文による日本紹介書籍であるが、それは英文カタログと重複するので、説明は割愛する。

ただ言えることは、これら海外向けの書籍は、日本国内よりも、海を渡った彼の地の研究機関や図書館に、今もなお沢山が保存されているということである。このことは、日本の小泉八雲研究者から側聞したことであるが、さもありなんとと思われる。

従って、海外における「戦前の日本研究」は、北星堂書店をキーワードにして探索すれば、現在の我々が知らない「欧米人の日本観」がわかるかもしれない。しかしそれは、今後の研究にゆだねる。

### 【第三 小泉八雲を取り巻く富山県の英語研究者人脈】

ここまで、北星堂書店の出版事業を、三つに分けてみてきた。

最後に、戦前戦後における、同社をめぐる富山県出身の英語研究者等について、生年順に列挙を試みる。

するとどうだろう、列挙した人たちの生年は重なり一群の人脈となる。実に壯観である。「図表2」参照

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）一八五〇生、一九〇四没

一八九〇年（明治二三）来日、松江、熊本、東京で教鞭を執り一九〇四年（明治三七）九月五十四歳で生涯を閉じる。

死後その蔵書二千四百三十五冊は、旧制富山高등학교で「ヘルン文庫」として大切に所蔵され、現在は富山大学附属図書館にある。当時この蔵書は、東京では北星堂によって荷造りされ富山に輸送された。その店頭の写真が残っている。

南日恒太郎（なんにちつねたろう）一八七一生、一九二八没

英文学者。英語教育面で「南日英語」と言われ、学習院教授を経て、旧制富山高等学校初代校長。

富山高等学校開設時「ヘルン文庫」の創設に尽力。創業間もない大正五年の北星堂から『英文藻塩草』『英詩藻塩草』を上梓。「ヘルン文庫」の隣室に「南日文庫」がある。

田部隆次（たなべりゅうじ）一八七五生、一九五七没

南日の次弟。英文学者。小泉八雲に学ぶ。「ヘルン文庫」創設、北星堂の小泉八雲の講義録の執筆等に尽力。関東大震災の時、中土義敬が田部の居室に寄宿した記述が残る。

田部重治（たなべじゅうじ）一八八四生、一九七二没

南日の四弟。英文学者。法政大学教授。ワーズワースの研究のほか、山岳関係のエッセイを多数残した。

馬場はる（ばばはる）一八八六生、一九七一没

旧制富山高等学校の創立並びに「ヘルン文庫」創設に私財を提供。

中土義敬（なかつちよしたか）一八八九生、一九四五没

現在の富山市月岡に生まれる。南日とは縁戚にあたる。富山県立商業高校卒業後上京、南日の紹介で三省堂に就職し出版を学ぶ。二十六歳の一九一五年（大正四）、東京神田錦町で英語関連書籍（後に独逸語書籍も）の出版事業を専らとする北星堂書店を創立。

尾島庄太郎（おしましようたろう）一八九九生、一九八〇没

英文学者。早稲田大学教授。日本イエイツ協会初代会長。『英吉利文学と詩的想像ケルト民族の稟質の展開』『現代アイルランド文学研究』等を北星堂から上梓。

西崎一郎（にしぎさいちろう）一九〇三生、一九八三没

英文学者。お茶の水女子大教授。中土順平の義兄。小泉八雲「英文學講義集」完全版の完成に当たって、「弊堂が未発表の諸講義を全部網羅せる、この完全版刊行の計画を立てましてから、（小泉）先

生の愛弟子であった田部（隆次）、落合両教授は、改めて当時のノートより集録し厳密な校訂を施され、更に富山高校ヘルン文庫の西崎教授に嘱して故先生の全蔵書を博搜校合して貰ひ名実共にここに完成版としてのヘルン文学評論の全貌を明らかにした」と解説に有る。

中土順平（なかつちじゅんぺい）一九二五生・二〇〇五没

北星堂書店二代目社長。義父（叔父）義敬の死後、外地から戻り社業を継ぐ。「HAIKU」(R.H. Blyth 著)の出版や禅の日本文化の紹介に尽力。その死後、遺族が小泉八雲関連資料を富山大学（ヘルン文庫）の隣室に「中土文庫」がある）及び「高志の国文学館」に寄贈<sup>三三</sup>。

このように列挙すると、中土家の親族による次の言葉に実感がこもる。

すなわち「北星堂の周りの富山県人の英語人脈による、陰に陽の協力があつたようだ」との言葉である。

そのことが、富山県出身者の創業になる北星堂が国際貢献をしたことの意義を、一層と際立たせていると思われる。

ここまで俯瞰すると、北星堂の小泉八雲関連の資料が、富山県内のしかるべき施設に引き取られ保存されているのは、もつともである。

残す課題は、北星堂の事業のうち、日本紹介の英訳本資料と、英語教育資料の二つの行く末である。

これらも漏れなく富山県内の施設で保管されるなら、錚々たる富山の英語人脈とともに郷土の誇る財産となるであろう。

#### 《参考図書》

- 『ラフカディオ・ハーンの英語教育』《友枝高彦・高田力・中土義敬のノートから》監修 富山大学附属図書館ヘルン文庫 平川祐弘 弦書房 二〇一三年
- 『日本の生きる道―米中日の歴史を三点測量で考える』平川祐弘著 飛鳥新社 二〇一六年
- 『小泉八雲事典』監修平川祐弘 恒文社 二〇〇〇年

図表1

北星堂の学生向け英語テキストの現存数

「初版の出版年次」による種類数

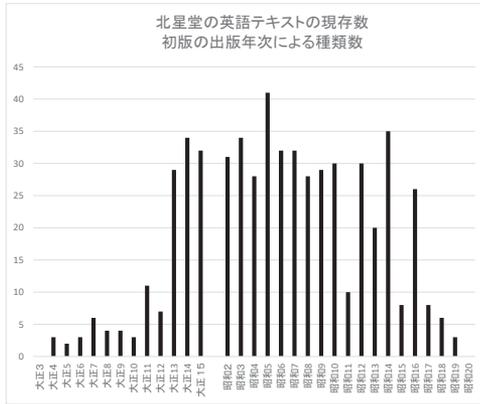
各年度の初版種類数はもっとあるはずだが、不明

■整理・千田篤  
■(平成28/11/07現在)

- 注意 1 増刷を重ねたテキストは、初版年度に限り1冊として数えた。
- 注意 2 同じ内容の重複するテキストは、1冊として数えた。
- 注意 3 若干の脱漏、重複があると思われる。

- 注意 4 この他に、戦前の英語の入学試験問題集も多数有り
- 注意 5 年次ごとの、出版カタログも多種類あり
- 注意 6 当社は、戦後の欧米で「俳句ブーム」を巻き起こした、「HAIKU」の版元である
- 注意 7 「福翁自伝」の英語訳本の出版元である。
- 注意 8 富山大学の「ヘルン文庫」を東京から富山へ搬送の時、荷造り搬送した拠点
- 注意 10 戦前は、小泉八雲の書籍出版で、国内外外で知られた出版社だった

初版の出版種類数		初版の出版種類数	
1 大正4	3	13 昭和2	31
2 大正5	2	14 昭和3	34
3 大正6	3	15 昭和4	28
4 大正7	6	16 昭和5	41
5 大正8	4	17 昭和6	32
6 大正9	4	18 昭和7	32
7 大正10	3	19 昭和8	28
8 大正11	11	20 昭和9	29
9 大正12	7	21 昭和10	30
10 大正13	29	22 昭和11	10
11 大正14	34	23 昭和12	30
12 大正15	32	24 昭和13	20
		25 昭和14	35
		26 昭和15	8
		27 昭和16	26
		28 昭和17	8
		29 昭和18	6
		30 昭和19	3
		昭和20	0
		昭和計	431
大正計	138	合計	569



図表2

小泉八雲と富山県英語研究者の生没関連年表

氏名	西暦(生・没)
小泉八雲	1850 (生) - 1928 (没)
南日恒太郎	1871 (生) - 1928 (没)
田部隆次	1875 (生) - 1957 (没)
田部重治	1884 (生) - 1972 (没)
馬場はる	1886 (生) - 1971 (没)
中土義敬	1889 (生) - 1945 (没)
尾島庄太郎	1899 (生) - 1980 (没)
西崎一郎	1903 (生) - 1983 (没)
中土順平	1915 (生) - 2005 (没)

1924 ヘルン文庫開設  
1945 終戦

北星堂創立

## 注

一 これらの賛辞は、西曆一九三八年（昭和十三）の「北星堂出版総目録」の裏表紙に掲載されているものである。他に倫敦タイムスによると、

「普通以上の正確さ、調味を以て其本を印刷とした北星堂の手際は正に賞讃に値する。そして大へん立派に作られて居ると云ふことは己が仕事を愛する職人によつて、製本された事を語つて居る」。

オヴザパー（倫敦）

「立派な紙に、見事に印刷された北星堂の本は日本人のつくつたものに対する誇りであり、且つ英國の出版書肆が讀者に課せなければならぬ価の殆ど半額で出版されている。」

北星堂による（こう）した紹介は、決して我田引水によるものではない。確固たる自負に裏付けられたものであろう。

二 注一に同じ。

三 『日本の生きの道』平川祐弘著 飛鳥新社 二〇一六年八月二日刊。

四 When People are correctly informed upon a subject, they are likely, in the mass, to think correctly in regard to it. When they are ignorant of the matter, they are of course apt to think wrongly about it. But this is not all. What we do not know is always a cause of uneasiness, of suspicion, or of fear. When a nation thinks or feels suspiciously upon any subject, whether

through ignorance or otherwise, its action regarding the subject is tolerably certain to be unjust. Nations, like individuals, have their prejudices, their superstitions, their treacheries, their vices. All these are of course the result of ignorance or of selfishness, or of both together. —Lafcadio Hearn—

五

The Hokuseido Press publish English books on English and American life and literature, to give Japanese students more correct knowledge of things abroad. It is also their desire to introduce the aspects of Japan to readers abroad through the publication of books on Japan by well-known writers. More important books of the latter group are given in this catalogue for readers abroad who would like to know about Japan and the Japanese, study the Far East, or appreciate Lafcadio Hearn. In the hope that it may prove of interest to admirers and students of Hearn, comments and criticisms on his books have been printed here with little mutilation.

六

A fair, sound and very complete summary of "the vibrating motive, and the penetrating significance of Japan's diplomatic game in the world to-day"

七

「北星堂出版図書総目録 1938」。

八

The Hokuseido Publications Books on Japan—Books on The

Far East—The Works of Lafcadio Hearn, etc.

九 小泉八雲の死後、その蔵書二千四百三十五冊が旧制富山高高等学校に収納された経緯や、富山県人の英文学者たちの苦心のほどが述べられている。同蔵書は、現在、富山大学附属図書館で「ヘルン文庫」として大切に保管され、富山県人の文学的滋養の基として誇りとなっている。

一〇 『Hokuseido Publications of The Works of Lafcadio Hearn and Glenn W. Show and others. Reviews on the Hokuseido Books By Critics Of the World』

一一 昭和十九年度 北星堂発行高等諸学校大学 英・独教科書目録附昭和十八年度御採用校一覧表。

一二 田部重治選訳『ワーズワース詩集』(岩波文庫 初版一九三八以後二〇〇〇年代も増刷を重ねる)の中に、(この訳詩の内で「七人の姉妹」は、家兄南日恒太郎の訳出せるもので、これを「」に拝借することにした。)とある。

一三 *DEVIL'S HERITAGE BY HIROYUKI AGAWA TRANSLATED BY JOHN M. MAKI THE HOKUSEIDO PRESS 1957*

『天皇さんの涙 葎の髓から・完』阿川弘之著(文藝春秋 二〇一一年)。

阿川弘之氏が、アメリカで出版の叶わなかった小説『魔の遺産』の英訳本、英訳名 *DEVIL'S HERITAGE* にしつつ、『天皇さんの涙 葎の髓から・完』で次のように書いている。

私がシアトルを離れて約半年後、完訳が出来上がったけれど案の定、発行元は見つからなかった。あちこちで断られた末、結局東京神田の北星堂書店が引き受けてくれる。同書店店主中土順平さんの、「此の著作は英語圏の人々に読んで貰ふ価値がある。うちで出さう」と、採算無視欠損承知の決断によつて、昭和三十二年(一九五七)八月、『*DEVIL'S HERITAGE*』と題する小部数が上梓された。アメリカの読者層にとつて私は全くの無名作家だったし、反響らしい反響は殆ど聞えて来なかったが、読んで評価してくれた少数読者の一人にジョン・スタインベックがある。

## 『人生記銘』についての調査報告

## ―詩人・高島高の多面性2―

金山 克哉

富山県の滑川市立博物館に高島高の詩集『人生記銘』が収蔵されている。本稿ではその調査報告を兼ね、『人生記銘』の紹介を行う。「群峰 第七号」で報告した『久遠の自像』に続く報告となる。

高島高の詩集と言えば、高嶋修太郎刊行の『詩が光を生むのだ』が二〇一三年に桂書房から出版されて以来、私達にとって比較的手に取りやすいテキストとなった。

また、二〇二一年には伊勢功治による『北方の詩人 高島高』が思潮社から刊行されたことで高島高への注目度はさらに高まってきている。二〇二一年一月には富山市立図書館にて「高島高シンポジウム」が開催され、翁久允財団の須田満、詩人の池田瑛子、細川喜久恵、前掲書著者の伊勢功治、「富山文学の会」の金山克哉がそれぞれ報告を行い、議論をかわす中で高島への理解を深め、

富山という風土について改めて考える機会を得た。

このようにして近年、高島高研究は進展している。今回、詩集『人生記銘』に触れることで今後の高島高研究に少しでも貢献できれば、と思う。

高島には三冊の詩集パンフレット、『太陽の瞳は薔薇』（昭和七年）・『ゆりかご』（昭和九年）・『うらぶれ』（昭和九年）があるが主な詩集は次の四冊である。

『北方の詩』 昭和十三年

『山脈地帯』 昭和十六年

『北の貌』 昭和二十五年

『続北方の詩』 昭和三十年

『人生記銘』「序に代へて」の末尾には、「昭和十七年十月三十一日／故郷滑川町竹風庵にて／鷹鳴山人／高島高識」とある。したがって『人生記銘』は第一詩集『北方の詩』、第二詩集『山脈地帯』を経て後の詩集ということになる。高島が軍医として応召するのが昭和十八年であるから、その一年前の刊行ということになる。「記銘」とは「新しい経験を受け入れ、それを覚え込むこと」（『日

本国語大辞典(小学館 昭和五十年十一月一日)である。この詩集にはどのような「新しい経験」が詩の形で描かれ、刻まれているのか。

『人生記銘』の「序に代へて」の一部をここに引く。

これは、東京昭森社発行の拙著詩集「老子と僕」のコピイである。「老子と僕」は、新制作派の内田巖画伯の装幀で、昭森社よりそのうち出版される筈であるが、このコピイの中から選んだものが非常に多い。これらは多く昭和十五年より、十六年、又中には昭和七・八年の頃のものもあるが、十五年から十六年の頃のもの、その頃、最も自分に、発表の機会を与へてくれた。文芸雑誌「旗」「詩原」又春陽堂の「日本の風俗」らに多く発表した。所謂「北方の詩」以後の第二期の活動期のものである。尚、最近の詩をまとめて、やはり内田画伯のカットで、「神洲述志の歌」が上梓されるはづであるが、「老子と僕」「神洲述志の歌」の二冊が刊行されるれば、自分としては又新しい境地をもとめて、碎骨せねばならぬと思つてゐる。いづれにしても「人生記銘」と名付けた、このコピ

イの詩は、本になる「老子と僕」と共に、自分としては、なつかしく必要な詩が多く、出版、今後の詩作らに、相当な役割を果すものであると思ふ。

『人生記銘』所収の詩は、「序に代へて」によれば昭和七・八年のものから昭和十五・十六年の作品で構成されていることになる。昭和七・八年は高島高が東京の昭和医学専門学校で学びながら詩を書いていた時期である。また、昭和八年には萩原朔太郎・北川冬彦・千家元麿・佐藤惣之助らが選考を務める詩コンクールにて「北方の詩」が一等当選している。さらに、発表の機会を多く得て、より旺盛な活動を見せた昭和十五年・十六年は父が倒れて郷里である滑川に帰ったのちの時期である。富山県滑川にて自宅の離れを「北方荘」と名付け、医業と並行して旺盛な文学活動を始めている。つまりこの『人生記銘』には、東京で書かれた詩と、滑川に帰ってから書かれた詩の双方が所収されていることになる。どちらの時期も、高島高にとつて大きな転換期である。高島高自らもここに収められた詩が自分にとつては「なつかしく必要な詩が多く、出版、今後の詩作らに、相当な役割を

果たすものであると思ふ」と書いている。

また、やはり「序に代へて」によれば、『人生記銘』は、「所謂『北方の詩』以後の第二期的活動期のもの」だという。『北方の詩』はモダンリズムの手法を取り入れながらも、まさに厳寒の北国を詩の中に閉じこめたような詩集であった。北国のエキゾチズムにおいて詩壇に高島高の存在感を示した『北方の詩』以後の展開に、この『人生記銘』は大きな影響を与えていると考えることができると、高島自身も「新しい境地」に至りつく過程だと自認している。『人生記銘』はのちに出版される予定であった『老子と僕』のコピーである。『神州述志の歌』も『老子と僕』同様、刊行されることはなかった。「神州」が日本の美称であることから戦時における日本称揚をうけた内容となる予定だったと推測される。(無為自然)の老子と戦時の美称「神州」を冠した詩集が同時期に構想されていたことについては、高島高の思想の複層性を考える上でも興味深い。

では、『人生記銘』と題されたこの詩集がどんな詩を収録しているのか、便宜上、いくつかのテーマに分けながら作品を紹介したい。

## 一、詩集の「目次」

まず、『人生記銘』の「目次」を総覧してみる。

序に代へて

### 第一部

早春の譜 / 白鳥 / 抒情歌 / ひととなり  
大岡山今昔物語 / 直江津挽歌 / 剣の夜明けに  
春 / 李太白 / 李太白が贈内 / 寒駅待車  
山の療養所 / 心象の窓 / 横浜の病院友訪  
義妹敦子臨終 / 亡弟明大追慕 / 雲と思想  
新春 / 茜雲 / 秋日帖 / 秋の小川  
父逝去 / 宇奈月にて / 別れ / 雄獅子  
横山大観頌 / 下山 / 調査終了日  
東京第一ホテルにて / 日本詩

### 第二部

ロダンと彫刻 / 仮面 / 輝くばかりの明眸  
古枯と庭 / 春と新任 / 病院 / 生存  
ゲーテ / 和田の浦 / 生活 / 横浜旅情  
馬込の冬 / 荏原中延の夏 / 波止場で

牧歌的風影 / 島 / 月明 / 魚津中学街道

町祭りの手記 / 深淵 / 孤筆

ある墓碑銘 / 銀座松坂屋屋上より

雪の降る感情 / いのちの森 / 夕暮

小駅待車 / 何でもない春 / 春と滑川

故旧の歌 / 人生理法 / 利休 / 老子出関

U温泉地にて / ある年の日記より / 浦にて

祖先の墓 / 曇日 / 花と雨 / 田園抒情

ある日の家持 明るい風影

一・二部に分けた構成である。通観して分かるように、詩の題名を見るだけでも様々な内容の作品が所収されていることが知られる。恋愛の詩、東京・横浜の詩、思想的な詩、医師の視点で書かれた詩、富山を描いた詩、戦争の詩、近親者の死を描いた詩など、特定されたテーマに分類できない詩ももちろんあるが、〈冬〉の詩人・高島高の〈多面性〉を知る上で重要な詩集であることは間違いない。

## 二、恋愛の詩

若き日の初々しい恋愛の詩が巻頭を飾る。詩集『北方の詩』に見た寒冷の鋭さとは対照的なやわらかな表現で書かれた詩「早春の譜」を引いてみる。

雨もびしやびしや降つてゐるし

本当に小麦の芽も真青で真直ぐで

幾分白い茎も見えて

その上土の黒さはここ特有だ

空も水玉灰色で

こんな四方田圃ばかりの雨の道を

歩くといふことは

けつして僕個人の趣味ではなく

もちろん

これは二人のカルチュアの性質によるのです

そして感情の交歓を

恋だといふのは

あなたにも失礼ですし

また恋愛の表面化は

こんな風景には俗すぎます

あなたの白い足袋に

小麦の芽が真青にうつるほど

こんな明るい雨の日に

何故二人は少し暗くうなだれながら歩かねばなら

ないのだらうか

そして

こんなに永遠に向かふ二人の感情は

これは人生以上の人生でせうか

しかしこれはたしかに

人生の記録の一つの証査に違ひありません

未来が本当に偉大な肉体の詩を書くやうに

ああ恋愛の焰はこんなに内で燃えはぢめます

たとへばあなたの肉体の一部を

僕の肉体があづかつてあるやうに

これではやすらかすぎてさびしいのです

あんまり明るすぎてかなしいのです

男と女が二人で自然の中を歩いている。互いの恋心は高まっているが、その恋心が表面化することを抑制しよ

うとする心もまた同時に働いている。おだやかな田園風景を前にして恋愛が表面化することを「俗すぎます」と認識する主体がいる。互いの気持ちを通じ合っているかと思える瞬間は若い男女にとっては嬉しくもあり、同時にその嬉しさをどう処理していいかわからない時間でもあるようだ。喜びの裏側で、そこはかたないさびしさやかなしさを呼び起こす恋というものの両義性が、しめやかな言葉でゆっくりと表現されている。本来は他者である男女が交歓する中で心を通わせ、互いに別個に所有するはずの肉体というものをまるで共有したかのように夢想する中、「やすらかすぎてさびしいのです」「あんまり明るすぎてかなしいのです」という、喜びと寂しさという一見矛盾した感情に挟撃される心理が何の衒いもなく表出されている。清岡卓行は「恋愛詩のメタフィジックをめぐって」『詩と映画／廢墟で拾った鏡』昭和三十五年十月・『現代詩論体系第五卷』所収・大岡信編・思潮社・一九六五年十二月十日）において次のように述べている。

人間は恋愛体験において、日常的・社会的な現実の枠を越えようとする永遠の生命感に似たものを味わ

う。その意識は、それまでとは違ってしまった世界の構造に直面する。具体的で有限であるさまざまな境界線がぼやけ、それらが無限であるものとつながっているように生き生きと感じられたりする。しかし、その充溢する虚無は認識できない。しかも、認識できない宇宙の全体性そのものの中心に、恋人が位置しているかのようである。

清岡が言うように、恋愛は「自分と他者」「有限と無限」の「境界線」をぼやけさせ、人生が「認識できない宇宙の全体性」へとつながっているのではないか、という感覚を新たに私達にもたらす。この「早春の譜」では、恋愛の永遠性を通じて「人生以上の人生」の存在を感知しはじめた高島高の若々しい認識を読み取ることができる。恋愛とは他者との邂逅を通じて、マルティン・ブーバーが『我と汝・対話』（訳者 植田重雄・岩波書店・一九七九年一月十六日）の中で言う、単なる相対的存在に過ぎない「それ」ではなく、客体化の波に捉えられず、かつ他との比較・境界の上存在することもない「なんじ」と出会うことによって世界との関係性が変化していくと

いう営みなのかも知れない。

### 三、東京・横浜の詩

第一詩集『北方の詩』は、具体的な地名を削ぎ落として創られた世界であった。しかし、『人生記銘』には高島高の関東での生活を彩る様々な地名が出てくる。日比谷公園のベンチで一人池を見つめたり、三田の下宿や田町駅近辺を描いてみたり、都市計画上はまだ田舎町だった大岡山を素描してみたりしている。また、関東で出会い心を通わせた友人たちのことが朴訥とした調子で語られた詩もある。さらには、高島高が働いた横浜市電気局友愛病院、東神奈川行きの電車、伊勢佐木町や根岸橋などのエキゾチックで叙情的な横浜風景が描かれた作品もある。そして、戦争に向かう世相にあつて様々な国の人達がロビーでくつろぐ近代建築の先端を思わせる東京第一ホテルの様相、詩友と歩いた馬込の田園、新興都市である荏原中延の商店街の明るい街並みと電化が進んだ中で池上電車の騒然とした様子、帝都・東京を象徴する、まるで写真のような銀座松坂屋のモダンな様子などが描

かれています。東京・横浜が発展していく過程を詩の中に  
見て取ることが出来る都市生活史として読むこともでき、  
また、そのような都市の発展を当然の環境として享受す  
る詩人の感性の履歴として読むこともできる。富山を離  
れ関東に遊学した高島高は、おそらく、都市の生活が自  
身の人生にもたらず豊かさを自覚し、それを忘れないよ  
う、手放さないように心を砕いていたのではないか。自分  
自身の経験を慈しむ視線が詩の中に、確かに感じられる  
のだ。

例えば末尾に「古き手記より」と付言のある詩「抒情  
歌」の一部はこうだ。

われは孤独の旅人なりし  
三田の下宿にひとり憩へるころは

進むべき道もなく愛すべきすべもなく  
ただうつろな日々を送りししか

華やかな街の灯夜々にまたたけど  
われは孤独な旅人

伊勢功治の年譜『北方の詩人 高島高』によると、  
高島高は昭和三年（一九二八年）に「文学をより学ぶた  
め、上京。日本大学の文科予科に進む。東京市芝区三田  
三丁目、聖坂下の石若宅に下宿」とある。離郷し、東京  
生活を体験する中での寂寥感が伝わってくる詩だ。自身  
を「孤独の旅人」としてとらえ、華やかな都会の雑踏の  
中でなすべきこともままならず過ごすやるせなさが描か  
れている。詩というより「古い手記」の一部をそのとき  
の心情を保存するためにそのまま切り取ったような作品  
となっている。都会で味わう孤独が、詩人の抒情を育て  
たのかも知れない。

詩「大岡山今昔物語」はユーモアにあふれた青春の詩  
だ。日本大学にて文学を学び始めた高島高であったが、  
昭和五年には父の願いを受け入れて日本大学を中退した  
のちに、昭和医学専門学校へと入学し医師を目指してい  
る。その時に下宿したのが大岡山であった。現在の大岡  
山駅は目黒線と大井町線が乗り入れ交通の便もよく住み  
やすい閑静な街でありながら、近くには東京工業大学（二  
〇二四年に東京医科歯科大学と合併する予定）があり学

生たちでにぎわってもいる。長い詩なので部分を引いていく。

大森区と目黒区との接点

郊外電車も十分二筋交叉して

田舎者のちよつとしやれた郊外行きにはすつかり面喰せるし

といったつてここをすつかり都会といふわけにはゆかない

都市計画は皮切りの田舎町だが元々市外大岡山で風月堂と支那ソバ屋とマーヂヤン屋きりなかつたんだ

自分が下宿する街を都市計画の視点から説明する視点が面白い。東京郊外が田園都市化の流れに乗って開発されていくさまが見て取れる。そして、そのような途中の中に高島高もまた時代の気風を感じながら生活していたのだ。この詩はさらに、東京工業大学の学生達でにぎわう飲食店や、正宗白鳥が通ったとされるトリコロールカラーでフランス風を装ったコーヒー店の様子を素描する。

時々大岡山に出没し、一人がぶりとコーヒーを飲んで去って行く正宗白鳥が気難しい人柄だったのか、詩には

けつして他人を賞めたりしない文学も流行しやうとしたもんだ

青年たちはなるべく人のものは認めないようにしやうといふ

とある。正宗白鳥の厳格さに影響され、青年達がやや狭量な批判精神を流行させていたことが描かれている。他者批判に忙しい、肩に力の入った青年達の力み具合がユーマラスに語られている。このようにして、かつて下宿した街を、細々とした部分まで書き留めておきたいという衝動を高島高は感じていたのだろう。そして、人生を豊かに彩ったこれらの土地や人を、抽象化することなく、まるでアルバムを編集するかのように詩の中にあたたかく保存している。街は急速に開発され、かつての面影をなくしていく。だからこそ自らが過ごした時間の一回性を大切にしたいと願う高島高がいたのではないか。

## 四、思想的な詩

高島高には、李白・老子・利休・芭蕉・西行・大伴家持・ロダン・ゲーテらの芸術観や倫理観、人生観に触れた詩がある。高島高には古今東西の古典に目を向け、そこに現在の自身を投影しながら人生観を形成してきた側面がある。また、自覚的に古典を読み、吸収した詩人だった。『高志人』にも良寛や利休、芭蕉に関する評論・随筆を多数発表している。

詩「ロダンと彫刻」では、彫刻「考える人」が「ロダン自身がモデルになつてゐるのです」とし、「(ノミよりおれの心の方が鋭すぎるのだと)」というロダン自身の発話を引き出している。そして、詩の語り手はロダンに対して「いいえ心の方がありません」とやんわりと反論・提言する。芸術表現における道具(ノミ)が可能な作業領域よりも表現者のスケールの方が勝っているため、その道具(詩においては言葉)では完全なるイメージの具現化が困難であることを示唆している。詩人は、「言葉」という、意味的にも、音声的にも、歴史的にも制限された道具の中で、常により血肉化した表現を求め

るからだ。

さて、詩「茜雲」は平安後期の歌人で「三夕の歌」の西行と江戸前期、紀行の中で俳諧を確立した芭蕉、それぞれのダンディズムを連鎖させながら歌っている瀟洒な作品だ。

雲にはいろいろあるんだな

虹色の雲もあれば

薄墨色の雲もあるんだ

野を遠く夕暮れが来て

山脈の頂には

まるで旅愁のやうな

茜雲

男の中の男の西行が

いつのまにか

秋の夕暮れの野末の小道を

ひとりどぼどぼと辿る旅人となり

風や草木を友として

今宵も月に流転を嘆き

あの山麓の草原を宿とするか

露や小虫にとりかこまれ

——ああ解脱、強さ

人の世をあくまで強く生きんとする思想の夢でも見やうといふのか

なる程後世芭蕉も云つた

——死にもせぬ旅寝の果てや秋の暮

三夕の歌の一つとして知られる西行の「心なき身にもあはれはしられけり鳴立つ沢の秋の夕暮」(『新古今和歌集』巻四・秋上・三六二)は、あかねさす秋の夕暮れの美しさに心を奪われた西行の告白でもある。『新編日本古典文学全集43』(小学館 一九九五年一〇月)には「ものの情趣を感じる心のないこの出家の身にも、しみじみとした情趣はおのずから知られることだ。鳴の立つ沢の、秋の夕暮れよ」と訳がある。美に心奪われながらも「解脱」や「強さ」を希求する求道的な姿勢が高島高の勤勉さと共鳴しあっているように感じられる。また、最終行の芭蕉の句(『野ざらし紀行』より)は西行とは違ったかたちで秋を捉えている。紀行の果てにたどりついた閑寂の秋の暮れ。旅寝を重ねてものたれ死にせずにいること

への諧謔がアクセントとなった句だ。茜雲の美しさに西行が反応し、芭蕉が旅寝の果てにやはり秋の暮に到達する。日本文化を過去にたどりながら、千変万化する雲の色彩に着目し、旅愁を誘う茜雲をたなびかせることで西行と芭蕉とを時空を越えて出会わせる詩法である。史を通観し、己の糧とするべき表現と出会った者のみに許された方法である。

さらに、高島がどのような芸術観、人生観に近接していたかを知るために詩「老子出関——父半茶が所有放庵氏の絵に題して」を引いてみる。

……………道沖にして之を用ふ

或は盈たず、

淵として万物の宗に似たり。

其の鋭を挫き、

其の粉を解き、

その光に和し其の塵に同ず、

湛として或は存するに似たり。……………

老夫子己を捨てて

道を説くこと

かへつて

あたかも万物の宗に似たり

野にひそめば

かへつてあらはる

賢五千余言

その真諦は

全てこれ世界

人生にかかはり

為無為を識別す

或は上善若水

曲則全

希言自然

と礪破す

かかる静感の中にひそめる

老夫子の胸裡に

ついに天下をうれふるの気来たり

愛牛にまたがつて

住みなれた草蘆を出でんとす

大成若欠

其用不弊か

今老夫子

白髪春日に光らせながら

若草萌える

故郷の山河を静かに去る

用兵有言

吾不敢為主為客らの句章を思ひうかべ

莞爾として青空にみとれながら

画家・小杉放庵の「老子出関」に着想を得て書かれた詩である。詩の冒頭、文字下げで書かれた書き下し文は中国の道家である老子のものである。『新釈漢文体系 第七卷 老子・莊子 上』（明治書院・昭和四一年一〇月三〇日）によれば、「道は空虚な器のようにならつぽであるが、それをいくら用いても永久に充滿することがなくて、あとが使えなくなるようなことがなく、奥深くて万物の祖先であるような感じがする」（無源第四）とある。神秘的かつ超越的な道家思想が示されている。

この詩全体を読めば一目瞭然だが、老子の思想を理解するためのチームが散りばめられている。「為無為」（安民第三）には特別なことは行わず自然のままにしておく

こと、「上善若水」（易性第八）には、水は万物に潤いを与えているが、だからと言って自分を強引に主張することもなく柔軟に形を変えながら低きに流れていくこと、「曲則全」（益謙第二十二）には曲がった木は柱の材料にならないので長く生き延び大樹になることができるということ、「希言自然」（虚無第二十三）には、聞き取れない幽かなささやきこそ言葉の自然な在り方であり、必要以上に大袈裟な表現は不自然であるということ、「大成若欠」「其用不弊」（洪徳第四十五）には、真に大成した人物は一見欠けた所があるように見えるが、その徳を用いればつまずき倒れるような失敗をすることはなく、本当に満ちているものは空っぽに見えてその働きは枯れることがないということ、「用兵有言」「吾不敢為主為客」（玄用第六十九）には、自分からはけっして主導権を握ろうとしないので柔軟に受け身の立場を取るということ、などの意味がそれぞれある。

老子の思想をたどりながら高島自身も（無為自然）を愉しむかのような内容となっている。洋の東西を問わず、優れた古典に親しむことが高島高に詩作のエネルギーを与え、かつ、医師として多忙な日々を送ってもなおその

職を全うせんとする活力を与えていたことが思われる。高島高の詩を支えているものが、古今東西の思想であり芸術観であることを示す詩群である。

## 五、医師の視点で書かれた詩

高島高の魅力の一つに「医師の視点で書かれた詩」がある。拙稿「高島高詩集『山脈地帯』における「戦争の詩」（「群峰」第五号 富山文学の会 二〇一九年四月二〇日）でも触れたが、高島高の詩は、医師の視点を獲得することで輝きを増すことが多い。

『人生記銘』にある医師の詩は、横浜で勤務していた時代のことや山間部の医療機関と思しき場所での勤務のことなど、自身が医師として働いたことへの感慨を述べたものが多い。詩「横浜の病院友訪」には「遠心沈殿器」「食塩水」「浄留水」などの医学用語が頻出する。久しぶりにかつての学友が働く病院を訪れ、医療現場の空気を吸って懐かしさを覚える詩だ。詩「調査終了日」では、労働者たちが必要とするカロリーや栄養素を「熱量」「脂肪」「蛋白質」「炭水化物」「塩類」「脚気」「ビタミンB」

などの用語を用いながら説明している。鈹夫たちの健康を気遣う医師のとしての優しさがさりげなく描かれている。

高島高は、滑川に戻り父の後を継いで医師として働くわけだが、医師としての土台を築いたのは昭和医学専門学校での学びと横浜での勤務経験であったに違いない。

生涯をつらぬく職業観を形成した東京・横浜時代は、医師・高島高にとっては極めて重要な時期であり、その記憶や経験を詩の中に定着させておきたいという願いがあったに違いない。

## 六、富山を描いた詩

立山や剣岳などの名山はもちろん、保養に行った宇奈月や地元の県立学校（魚津中学）現魚津高校・滑川商業学校現滑川高校・水産学校）二〇二一年閉校の海洋高校）など寒冷の（北方）のイメージ以外の富山の地名や学校名が頻出する。水橋駅や富山電鉄など公共交通に関する語、幼い頃に遊んだ郷愁あふれる和田の浦（滑川の海岸）などの語が見られ、高島にとって、記憶や経験の源泉と

しての富山が詩に描かれている。また、散文「寂光」に出てくる林間学校の情景ともイメージが重なる加積高塚浜も登場する。その他には、常願寺川やそのほとりの針原などの地名が見られる。

詩「小駅待車」を引いてみる。

半曇りの空は引心器を失ったやうに  
何か風景を浮き浮きとさせ

たとへば重量を失った農家や

畔のはんの木たち

遠い山脈に

綿毛のやうな雲が二つ三つ浮き

まるきり掌でつかめそうな風景が

水橋駅の構内に

上り三時三十二分発の

富山電鉄電車を待つてゐる

僕の魂の中心にうつり

風もわづかに草をなでるぐらひに吹き

何る程これでは

大変

第六交響樂に似すぎて

歓喜と苦惱を

抱いたベートフエンも

あつちこつちを

歩くやう

(神の啓示といふものを

再びわれわれは考へるとき

このやうな風景の中を

一人で歩むべきである)

小川は

時々光つた短刀をかざして流れ

水車はにぶくまはつてある

(僕が住んでゐる

滑川町の側面をながめるにも

都合がいいし

誰もゐないこの小つぽけな停車場の

この二十分の待車は大変すつきりして

ルナンを読むには丁度よい

北陸の薄曇りは、何も全てがどんよりとした灰色では

ない。曇りは曇りでも、この詩の冒頭に表現されたように、風景全体を浮遊させる爽快さをともなつた「半曇り」がある。そのような「まるきり掌でつかめそうな風景」の中、水橋口駅にて富山電鉄電車富山方面行きを待つ「僕」がいる。

ベートーベン作曲の第六交響樂「田園」は軽快にしてよどみない音楽である。五つの樂章に分かれており、それぞれに「1、田舎に到着したときの朗らかな感情のめざめ」「2、小川のほとりの情景」「3、農氏の楽しい集い」「4、雷雨、嵐」「5、牧人の歌 嵐のあとの喜ばしい感謝の感情」の題がつけられている(『作曲家別名曲解説ライブラリー ベートーベン』株式会社音楽之友社 一九九二・一〇・三〇 参照)。田舎の景色を十分に喜ぶベートーベンの姿を幻視しながら、「神の啓示といふものを／再びわれわれは考へるとき／このやうな風景の中を／一人で歩むべきである」と僕は心内でつぶやく。田舎の景色の静謐などかさを全身で感じ取る瞬間は、一人で歩くことによつて感得されると言う。詩「故郷挽歌―僕はこの若き日の詩篇を愛するがゆえに憎む」(『北の貌』所収)にもあるように、高島高の詩にはこのような

「ひとり歩き」が登場する。「故郷挽歌」の場合、東京から富山に帰郷した男が町の喧噪をあえて避け、山麓の雪道をあてもなくさまよいながら自己の存在を確かめる、という内容だ。歩行は、詩人にとって重要な創作の磁場なのだろう。われわれ読者は、電車が来るまでの二十分という待ち時間を、このような至福の時にかえられる感性の在り方に驚くはずだ。

詩「何でもない春」を紹介する。

僕の家の病室の裏手の田圃を流れる溝川に

近頃小鮒がふえて来た

明るい春の日射しの下でこいつらすばしっこい

回診が終ると

僕はいつもこの川つぶちに来ていつまでもみてゐる

濃緑色の藻の下をたくみにツーツーツつばしる

あたりは菜種が一面に咲いて

いろいろな蝶々が来て舞つてゐる

こないだ春の風景を

真実つたへるやうな文章を書きたいと思つて

僕は今にしてかけない

菜種の花はいい花だ

医師として回診を終えると、病室の裏手の川を見るのが日課だったのか。川を見ながら心を空にして、再び仕事に対する気持ちを整えているのか。そして、菜種の花にかこまれた春の風景を「真実つたへるやうな文章を書きたいと思つて／僕は今にしてかけない」と告白する「僕」がいる。事物や感じたことを厳密な意味において言語化することは不可能なのかも知れない。しかし、詩人であればその不可能を可能にしたいと願うのもまた事実。この詩は一見のどかな春の風景を描きながらも、それを描ききることができない自身のジレンマにそつと触れている。

『人生記銘』の最後を飾る詩「明るい風景——滑川街道より快晴の立山連峰を望む」を引く。故郷滑川の風景を素朴な感動をもって描いた詩だ。

空は明るいカラリスト風

いくつも白くうかぶ雲はオパールか

山脈の頂には

白雪の氷結帯が延々と走り

こんな空は

色彩画家に言はすれば藍とも群青ともいふのならう

近くに見える滑川商業のグラウンドの

バスケットボール台のペンキは

白くキラキラ光り

校庭の柵に立つてゐる二三本の赤い小旗も燃えるや

うで

(こんな風景は少し小器用な素人画家でもすつきり

と書くことが出来るだらう)

こんなことを考へながら僕は今更

自分の故郷の田野の風景を見直しつつ

水産学校の講義の帰路に僕はここを歩いてゐる

今でも街道といはれてゐる

この滑川街道は

こんな晩春の快晴の

明るく見せる雪の山脈の風景で

その山麓は緑野で

これでは断然日本のチロルといつてもよい

その風景の明るさは

富山県立滑川高等学校のホームページによれば、詩中

の「滑川商業」は大正二年に滑川実科高等女学校として

創立されており、大正十三年には滑川商業学校として再

編され、現在の滑川高等学校に至っていることがわかる。

また、「水産学校」は平成二十四年に閉校し、滑川高校に

再編統合された海洋高校の前身である。明治三十三年に

「富山県水産講習所」としてスタートしたこの学校は、

昭和十六年に「水産学校」と命名されていることから、

この詩が書かれた時期が昭和十六年以降であると推測で

きる。いずれにしても滑川を代表する二つの学校が登場

する珍しい詩だ。また、高島高が応召する昭和十八年ま

での期間、「水産学校」で教鞭を執っていたことが分かる。

滑川は立山をごく間近に仰ぎ見る場所にある、海と山

が隣接した街だ。対岸には能登半島が眺望される。「僕」

は「滑川街道」から「自分の故郷の田園の風景を見直し

つつ」歩いている。ここでは故郷の再認識が行われている。

「故郷挽歌」において見られた故郷に対する屈折した

劣等感や余所者意識はなく、医師でありながら教育活動

にも従事するなど、地域共同体に貢献する者の清々しさ

さえ読み取れる。「チロル」とはヨーロッパ中部にあるアルプス山脈東部の地域を指すが、非常に牧歌的な景観を有した地域である。故郷滑川を「日本のチロル」と呼ぶ「僕」は、(北方)を明るいものとして捉えている。高島高にとつての(北方)は寒冷だけではなく、このように明るい側面も持つのである。

## 七、戦争の詩

詩「剣の夜明けに——われはある朝かく感ず」という戦争に関する詩の前半部分を引く。剣とは富山県の立山連峰にある剣岳のことである。ちなみに、傍線部は、本文異同を示す箇所である。

われは愛す日本の夜明けを  
大陸に散つた幾多の正義の血は  
今やアジアの夜明けの太陽の色とにぢみ  
かかる大どかな神代の夜明けが  
再び東海の朝をひらく  
アジアの夜はアジアにこそ開くべきであつた

それへの懷疑は、夜の苦悶として長く寝苦しいアジアは病んでゐた悪辣なる西方的政策を前に果たしてわれわれアジアの夜は何を反省しなければならなかつたか

昭和十六年十二月八日朝まだき

大詔畏み奉りて

アジアに立つた

アジア的アジアの個性は

もはや夜明けの色で染めぬかれた

再び神的個性は

盟主日本の国土をつらぬき

個性的大陸の夜明けを呼んだ

(ほうむれ英米人類の敵！)

十年隱忍のほぞが切り放たれた

神は再びアジアにある

アジア的アジアは

もはやアジアのみのアジアではない

人類は世界のためにこそなければならぬ

人類のためのアジアは実現しないか果して

この詩は、詩集『山脈地帯』（昭和十六年二月二十日）にも載っている作品だ。同名同内容の詩が「高志人」第八巻第五号（昭和十八年五月一日）にもあり、そちらには副題として「あるひはわが撃ちてし止まむ」とある。また、『人生記銘』と「高志人」の「剣の夜明けに」には「昭和十六年十二月八日朝まだき／大詔畏み奉りて」（はうむれ米英！人類の敵）／十年隱忍のほぞは切り放たれた」という詩句がある。『人生記銘』においてはこの部分が後から別の筆記用具で書き足されている。ということは、最初はこの部分は書かれる予定ではなかった、と推測することができる。追加された内容は「具体的な日時（昭和十六年十二月八日）、真珠湾攻撃が行われた日である）、天皇の勅命があったこと、特定された敵国名（米英）」である。

詩集『山脈地帯』は、昭和十六年二月二十日に刊行されている。つまり、真珠湾攻撃の約十ヶ月前である。だから、当然ながら「剣の夜明けに——われはある朝かく感ず」は、これらの具体的記述がないままにすでに完成し、詩集に所収されていたことになる。そこに真珠湾攻

撃が十二月になされたことで、その情報をあとから追加するに至ったことが分かるだろう。かつ、「高志人」第八巻第五号（昭和十八年五月一日）では副題が「あるひはわが撃ちてし止まむ」（敵を撃退したら戦いをやめよう、の意。敵を打ち破るまで戦いをやめない、ということ。）に変わっていることから、戦局に応じて副題を変えていることがわかる。真珠湾攻撃がなされていない昭和十六年二月の段階では、副題は「——われはある朝かく感ず」であり、真珠湾についての詩句は挿入されていないため、あくまでもアジアを代表する盟主日本を中心とした大東亜共栄圏とその経済圏の確立についての願いが抽象的に描かれた詩であったことが推察できる。しかし、昭和十八年代になるとガダルカナル島撤退や連合艦隊司令官山本五十六戦死、アッツ島玉砕など、戦況が悪化する。「わが撃ちてし止まむ」はまさにそのような苦況を反映した副題となっている。

詩に具体的事実を後から追加するということは、詩の抽象度を下げることにつながる。だが、抽象度を下げてもあえて具体性を付与しようとするということは、詩の表現としての成功は別にして、その記述に記録的要素

を持たせたいという強い作為が働いたとみるべきである。具体性を増強しながらも、「剣の夜明けに」後半には、「アジア的個性」が「世界的個性」にまで結びつき、やがては「宇宙」全体の「守護神刀」になっていくという拡大的なイメージでアジアの隆盛が描かれていく。アジアの可能性の解放を夢見るナシヨナリズムの影響を見ることができこの詩は、高島高の戦争の詩の中でもわりと直接的に国家繁栄を描いたものだ。（詩集『山脈地帯』に収められている戦争の詩は、兵士の無事を願ったり、無理をせずに療養に専念するよう願ったりする医師の視点で描かれていることが多かった。）

戦争と詩の問題は、言葉の問題を研究する者にとっては一ひとつの最終局面だ。国の統制がある中、主体が言語をいかに選択し、統御し、かつ統御しないか、という問題は、戦争の詩はもちろん、いかなる時代や体制下においても、詩の自由を司る本質に関わる問題だからだ。そうであるならば、副題を変え、具体的事実を付加して書かれた「剣の夜明けに」シリーズは、言語を自己の肉体や経験に落とし込んで発するというよりは、時流に委ねながら発せられたものであるとすることができらるだろう。

戦時が悪化するにしたがい、その意識は高まっていったと推測できる。ただし、自己と時流の境界線がどのようにつ引かれたか、あるいは引かれなかったかについてはもう少し多角的に考察する必要があるだろう。

#### 八、近親者の死を描いた詩

妻とし子の妹・敦子の死を宮沢賢治の詩「永訣の朝」風に描いた詩「義妹敦子臨終」は胸にしみる詩だ。昭和十三年、敦子十七歳にして逝去。副題に「敦子すがた人並こえて美しく生れ而して春をも知らず逝きぬ」とある。宮沢賢治のスタイルをその痕跡がはつきりとわかるくらいに模倣している点が特徴的だ。年若い肉親の死を描くとき、「永訣の朝」がひとつのテンプレートとして扱われ、それが独自に変奏されていることがわかる。ここにその一部を引く。

外は雨だか曇だか

じめじめなんだか暗い音がする

と言う冒頭を持つこの詩は、宮沢賢治の「永訣の朝」の雲交じりの空を思わせる。賢治における東北の空と高における北陸の空が時空を越えてつながる。

晴着着る日もあきらめて

雨や曇と一緒に

今宵どこかへ行こうと云ふ

おかあさん晴着をきせておやり

頬紅も充分可憐にぬつておやり

(今度生まれてくるときこないな苦勞せぬよう生まれてくるわかあちやん)

年若くして雨や曇とともに消えていこうとしている敦子。せめて死に装束と死に化粧だけは十分にしておやりたいの思いが描かれる。(今度生まれてくるときこないな苦勞せぬよう生まれてくるわかあちやん) という敦子の声は、宮沢賢治「永訣の朝」における妹・とし子の声「うまれでくたてこんどはこたにわりやのごとばかりでくしまなあよにうまれてくる(生まれてくるにしても、今度はこんなな自分のことばかりで苦しまないように生ま

れてくる)」を思わせる。宮沢賢治「永訣の朝」が「銀河」「太陽」「気圏」「兜率」などの詩語を用いた宇宙的・仏教的・拡大される時空のイメージであるのに対して、高島高の詩はあくまでも日常的であり、肉親としての素朴な温かみを感じられる。敦子の母親を呼ぶ「かあちやん」という呼び方も、暮らしをともにしてきた母子のいかにも日常さながらの表現である。

また、弟・明大の死については、詩「亡弟明大追慕——明大生まれながらにして聡明／七つにして神童の名をとる」がある。昭和十一年七月(一九三六年)、優れた弟が病に斃れる。享年二十三歳。高島高は弟に対して詩の中で「今こそ昂然と胸を張り／昂然と行け」と呼びかける。幼い日、弟と過ごした日々はどんなことにもかえがたいとし、「この兄もおまへと二人ぶんの力をもつて胸を張り力をもつて人生をわたつて行かふと思ふのだ」という自身の決意を述べている。死にゆく者を前にして生きる決意に至りつく点は、やはり宮沢賢治「永訣の朝」の「わたくしもまつすぐにすすんでいくから」という述志と呼応する構造を持つ。

詩「父逝去」は父・高嶋地作の死(昭和十六年・一九

四一年）を悼んだ詩だ。高島高は父のことを「巖のごとき不動の魂」であったと表現している。父の生き様を、

「その生涯が／夢でなく／確固たる信念の／世界の上に立つて／あらゆる苦悩を／つらぬいて／生きぬいた」と認識する高島がいる。そして「今や父のままの魂たらんとする子は／今こそ本当にありあまる力が／肚胸にみなぎつてくるやうな気がする」とし、その魂を父から受け継ぐ意志を明確にする。近親者の死に触れることで、高島高は生きる決意を固めていく。

高島高にとって、詩は挽歌の役割を果たしている。親しい人の死をすくい取る表現形式として、高島高は詩を選択したのだ。「序に代えて」に言う「新しい境地」とは、親しい人達の死をもすくいとり、作品の中に永遠化する方法意識のことでもあったろう。対象が近ければ近い程、感傷を制御することもまた困難になる。しかし、それを可能にするための詩法を、高島高は模索し、実践し、自らの生への意志を確認したのではないか。

### （まとめ）

第一詩集『北方の詩』には、北国の厳しい寒さをモダンズム風に切り取り、誰が読んでもそこには一枚の写真に収められた寒冷の〈北方〉が現前するような「類型」が集められていると、詩集『山脈地帯』の「あとがき」にある。

しかし、『人生記銘』は『北方の詩』とはまったく異なった方法で書かれている。そもそもテーマが多岐に分れており、〈北方〉の詩人・高島高の多様な一面が垣間見られるように構成されている。恋・故郷・東京・文学・医学・季節・思索・古典・思想家や詩人達のこと・親しい人の死など。これらはすべて高島にとって看過することのできない、それぞれに重要な〈もの・こと〉だったことがよくわかる。テーマにあわせて詩の言葉も緩急使い分けられている。ある意味で具体的な意味や状況を〈北方〉というテーマのもとに抽象化した『北方の詩』の世界を超えていくために必要な詩集だったのが『人生記銘』であった。我々の人生では本当に様々なことが同時に起こる。仕事、家庭、戦争、恋愛、生、死、そして心理的

な出来事。『人生記銘』においては、人生の折々の場面や生活の瞬間を慈しむように描かれた詩が多い。詩の源泉とは、あくまでも肉感をもつて感じ取られたその時代、その風土、その他者と過ごしたことで生じた摩擦、そして、何ものにも代替できない無二の「その瞬間」である。

高島高が『北方の詩』以後に向かう方向性は、ここに顕著に示されているだろう。

※本稿は二〇二一年十二月五日（日）に、翁久允財団と富山市立図書館主催で行われた「高島高シンポジウム」（於 富山市立図書館）での報告をもとにしたものである。

## 群峰 第4号

発行日…2018年3月3日

### ◇研究論文

木下 晶

林忠正「外山博士の演説を読む」をめぐる日本西洋

美術教育の提言

孫 媛媛

芥川龍之介の金沢訪問と室生犀星

水野 真理子

小寺菊子の作品に垣間見る宗教観―他力信心の女―念

仏の家」より

谷川 拓矢

現代女性作家による富山文学の変遷―木崎さと子から

山内マリコへ―

### ◇講演筆録

上田 正行

千石喜久と言う詩人―「日本海詩人」を視野に入れつゝ

### ◇文学散歩 報告

黒崎 真美

魚津文学散歩報告

### ◇2017年度 活動報告

## 詩「瀉の風景」

## ―堀田戦後文学の出発

丸山 珪一

## はじめに 初出テキストの登場

詩「瀉の風景」は、二七歳の堀田善衛が一年九ヶ月滞在した上海から帰国して書いた最初の作品である。小稿のタイトルは、この詩が戦後最初に書かれた作品だという意味ではない。堀田は敗戦をすでに中国で迎え、上海の諸雑誌にいくつかのエッセイを発表している。それらが彼自身の歩みにとつてもつ意味は言うまでもないが、日本の読書界に向けて発信されたものとは言うことはできない。彼の中で日本へ帰国するかどうかの去就も定まっていなかった。また帰国して最初に発表した作品というのでもない。彼は一九四七年の正月に佐世保に上陸したが、上京して将来の見通しをつけるに先立ち、郷里の伏木に一時滞在していた。詩はここで生れた、あるいは

少なくともここで発想されたと思われる。二月か三月と堀田は書いている。だが、発表は少し遅れて、翌年になつて『個性』という雑誌に発表されたのであつた。かねがねそれがどんな雑誌なのかを知りたく、また詩が掲載された号をぜひ見たいという思いはあつたのだが、ようやく入手したのはつい最近のことである。戦後初期には膨大な数の雑誌が氾濫し、争つて買い求められもしたが、公的図書館などでも保管や整理が丁寧になされなかつたため、何年も経つと、忘れられ、見つけ出しにくい状態になつてしまつていた。私が調べた限りでは、この詩に言及したどの人も掲載誌を見た気配がなく、したがつて詩の初出形も確認されていなかった。

さつそくページを開いてみて、テキストの違いに私は目を瞠つた。私たちがこれまで詠み、考える対象にしてきた、『堀田善衛全集』等に掲載の詩テキストを現行形と呼ぶことにすると、初出形には語句や行分け・行下げに変化があり、現行形にはない三行が加わっている。現行形はその修正版なのである。今私たちがこれを基に論じあうことは当然のことで、何ら問題にはならない。しかし初出形は詩の生れ出た時点と結びついており、修正さ

れた現行版をもってそのまま初出時の発想と同一視することは許されない。とは言え、それを今の時点ですべて区別できるものか、いささか心もとなくもあるが、詩を帰国時の作者もろとも問題にし、あるいは作品の歴史性そのものを問う場合にはその検討は避けて通れないであろう。本稿でこの詩を取り上げるのは、初出テキストの紹介とともに、この問題を重要な論点の一つとしていふからである。詩に即し、また可能なかぎり、それを作った時点の作者に近づいて詩を理解することが求められる。

まず、二つのテキストに即して異同を確認し、現行形によって論ずることができることとできないことをはっきりさせること、この詩の掲載の歩みをたどり、いつどこでテキストに変化が生じたか、つまり現行形によって論ずるようになったのはいつからなのかを探ること、そして、これまで詩がどのように論じられてきたかを検討し、そこで出された論点を私たちの議論に必要なかぎりで組み入れることなどが必要である。その上で、新たに気づきたいいくつかの点を検討し、最後に詩の全体像をまとめてみることにしたい。少し長いが、最初に詩の初出

形テキストの全体を掲げておこう。現行形との違いに關わる部分は傍線によって指示してある。現行形のテキストについては、本稿第二節に挙げた諸著のどれかを手に取ってもらうのがよいが、第一節の説明を参照して復元することもできるだろう。

### 瀉の風景

冷たい瀉に傾いた

足跡一つない濡れた砂濱

その後景に

焼きはらはれた手も足もない木々

ほろほろくづれる土塊（つちくれ）

そして廣々と黙ずんで光る瀉を吹く風

そこに

ごろりと轉つてゐた

お前 屍

僕はお前を小屋にかついで帰り

土間にねかした――

ずしりと重なお前は

黙つてねたまま

僕を見てゐる

低い空にキイキイひびく釣瓶をあやつり

水を汲み上げ

砂濱に死魚をあさり

土を掘りかへし

喰ひ物をあつめては

薄い落日を小屋のとば口で眺める 一日

……屍よ

夜 僕は以前のやうに星々を仰ぐ

しかし星は以前のやうにその意味を語りはしない

星 夜 土 水

これらも僕には死んでゐる

それにしても屍よ

この静けさは何だらう

僕は小屋裡に火を燃やし

時々以前を思ひ出すのだ

少年——たしかに僕は故郷を出る道筋にゐた

そこで記憶が中斷する

火田民が襲つてきて

そのどさくさに

機を見て僕はお前を扼殺したらしい

非道い人々が 一物も残さずに奪ひ合ひかつ

ぎ去つたそのあとに

ごろりとお前がころがつてゐたのだ

裸で血も流さずに

……夜 真夜中に

音 音を聞きたらうと

暗いしじまに

眼をひらき耳をそばだて そして

無 無に疲れ安らつて小屋の椅子に帰つてく  
ると

毎夜 真夜中に啜り泣くのだ

お前 おそらくは僕の青春の屍よ——

物静かな小屋の火の傍で

屍と夜を送り僕は無言だ

屍は僕に何かを期待してゐる

《僕は斯く在る……》

もう一度の叫喚

もう一度の火田民が来なければ

僕は生きないか

しかしこの荒地に誰が訪れよう

屍よ お前は

恐らくは僕を惜しんで泣く――

そしてそれが憎しみにかはらぬうちに

ああおさらばの夢

弾力のある土地の夢!

空は白む

死魚をあさるべき朝がまた来るのだ!

いつお前は僕を殺すだらうか

## 1. 初出テキストと現行テキストの比較

現行形では、詩は九連から成っており、うち行下げの連が五つあり、それらを前の連に従属したセットと考えるとき、詩は四つの部分に分けられる。初出形ではそのようになっていない。そのあたりを念頭に置いて、両テキストを比べてみよう。( )の中に私のコメントや問題提起などを書き入れた。

語句の変化 キイキイ↓キイヴィ(第三連) 詩のな

かで唯一の擬音語であり、カタカナで表記されている。(私の推定では、もとの原稿は「キイヴィ」だったろう。初出形は誤植というより、印刷工が堀田の文字を正しく読み取れなかったものと思われる。また詩人のオリジナルな擬音は校正者にとつても判断が難しい。現行版で訂正されたと言つてよいように思う。／この音でまわりが音のない世界であることがかえって強調される。詩の音調、さらには色調などを考えてみるきっかけになるだろう。／表記への注目は現代の詩における記号なども含め視覚的要素

ということを考えさせる。また現代詩と朗読の問題にも関わるであろう。）

行分け・行下げの異同 行間に着目して言えば、詩連が九つという点では変わらないが、現行の最終詩連五行のうちの二行が、初出では切り離されて八連目にくつつく形になっている。また第六連は行下げがなされていない。（現行版では行下げは連単位でなされていて、その前の連に従属するというのが私の判断だが、初出形ではかなり様子が異なる。現行形でそれが訂正されたと言いつつてよさそうだが、行上げ・行下げそれぞれの基準がどこにあるのかにまでさかのぼって考えると、別の考え方もありうるかもしれない。／現行版の九連目と初出形の八連目の間で二行の移動があるわけだが、これはさらに解釈にも変化を及ぼすのではないか。／第六連と第七連は内容上一続きだと考えられるだろう。印刷時にページを跨いだために、現行の形「第六連の行下げがなされず、行間が空いたこと」になったのではなからうか。）

加除 現行人連目の四行の前に別の三行があった。（下

線部分。ここがおそらく最も重要な差異であろう。一見してこの三行の「ある・なし」は全体の解釈に影響を与えそうだ。過去の自分から脱皮できるかどうか、初出形は叫喚を伴う外からの一撃を想定している。期待しているかのようだ。「僕」は希望と絶望の淵に立っているのか。／現行形でこの3行の削除はなぜ必要だったのか。／そしてこの3行の中には「火田民」の語が再登場し、堀田にとつてのこの語の重要性を示している。堀田とこの語の原意はずれた使用との不可解な結びつきの問題にどこまで迫れるか。）

初出形と現行形の変化を考慮に入れながら、詩のイメージを大ざっぱに抑えておこう。詩の核心にあるのは、「僕」と「屍」の対峙である。この主題が詩の最後まで貫かれる。まず場としての渦（砂浜）が提示され、そこにごろりと転がっている「屍」を「僕」が登場して砂浜の小屋に運んで帰る。それに自分を認めたのだろう。「僕」はこの小屋に孤独に暮らしていた。「屍」は「僕」の動きを黙って見ている。「屍」とは、明らかにメタファで、

過去となったはずの自分を、現在の自分のうちに生きる、制御しがたい存在として感じていることの表現である。詩は、「僕」の昼の日常を示した後、漆黒の闇の中の小屋の火のもとでの沈黙の対話へ、さらに先の知れぬ夜明けへと展開する。間に「以前」と呼ばれる、夜空に星が意味を輝かしていた少年時代や、あいまいな記憶をはさんで、「火田民」に襲われたこと、そのどさくさに自分で扼殺した「青春」がその「屍」らしいことが示される。「屍」は口をきくことはないが、夜の小屋で、「僕」に向かつて啜り泣きし、何かを期待しているかのようにある。先立つて示された、日々の生活を支える食い物の調達に追われる「僕」の日中の空虚な姿に向けられた示唆であろうか。そしてさらには、「僕」を惜しんで泣いているかのような様相を示すようになる。しかし「僕」は「斯く在る」しかなく、「屍」がそんな「僕」に「憎しみ」を持つようになるのではないかと怖れる。

「僕」と「屍」の対峙の関係にある種の変化が見られ、詩の終結部には切迫感が漂っている。夜明けの向こう側への詩の姿勢は明白と言えるだろうか。この点で初出形と現行形とは違っていないのか。それよりも「僕」と

は、「屍」とは誰のことなのか。自明であろうか。「僕」とは詩の発話者である作者のことであろうか。「お前、おそらくは僕の青春の屍よ」と呼びかけられる、その青春の実態は何だろうか。これらはもちろん詩のなかだけで答えることができない問いである。と言って、勝手な推測も許されない。詩と切り離せない、その作者に関わるからだ。この詩が生まれ出た具体的な事情というものを知る必要がある。

詩の展開において「僕」と「屍」の対峙に転換をもたらしたのは、第五連の「記憶の中断」を伴う「火田民」の襲来である。小屋のなかの夜の光景は、いわば心理的親密空間であり、自己の過去との内面的な問題のようにも見えるが、対峙関係の過去に遡る大きな外界に由来する淵源を示唆したのである。その「どさくさ」のなかで「僕」は「屍」を「扼殺」したらしい。「扼殺」とは何ともどぎつい表現だが、その背後に何があるのか。そして「屍」は「僕」に何を求めているのだろうか。重要な位置を占める「火田民」の語はさしあたりまったく不可解というしかない。語とイメージ的につながりそうな第一連の「焼きはらわれた手も足もない木々」は、荒地の描

写ではあつても、「どさくさ」には関わりがないようだ。

## 2. これまでに刊行されたテキストの再点検——詩の掲載史

テキストの改変がいつ、どこで、どのようになされたかを知るために、この詩の掲載の歩みを遡って調べてみた。掲載を確認できた以下の諸著についてテキストと出典を検討する。

『現代詩集 歷程篇』（歷程同人編、一九五二・五、角

川文庫） 「堀田の詩四篇を収める。「潟の風景」は

『個性』の初出形に同じ。」

『荒地詩集一九五二』（一九五二・六、荒地出版社）

「戦後詩五篇を収める。初出形に同じ。」

『日本現代文学全集・九九（野間宏・堀田善衛集）』（一

九六五・五、講談社） 「戦中詩抄として六篇、戦後

詩抄として四篇を収める。「潟の風景」のテキストは

ここで顕著な変化が見られ、現行版はこれに基づく。

しかし、編集者である本多秋五の「作品説明」には詩

の説明そのものがなく、なぜテキストが変化したかが分からないだけでなく、出典も挙げられていない。本多も与えられた詩をそのまま受け取り、掲載したのだと思われる。巻末には作品の出典にかなり詳しい「堀田善衛年譜」も付いているが、ここにも「潟の風景」は抜けている。おそらく年譜の編集を担当した久保田万太郎も初出に当たることができなかったのだろう。他方で変化したテキストを掲載しているのだから、堀田自身から手直しした詩の提供を受けたと考えるのが自然であろう。」

『戦後詩大系四（ハ〜ワ）』（一九七一・二、三一書房）

「上記『日本現代文学全集』に同じ。」

『堀田善衛全集』（I期、II期とも筑摩書房） 「上

記『日本現代文学全集』でのテキスト変更を引き継いで

いる。ただし「解題」には詩の出典が挙げられてい

るのだが、『個性』一九四七年五月号と誤記されてお

り、やはり初出の現物確認はなされていないと思われる

。したがってテキストの変化についても言及されて

いない。」

『堀田善衛詩集』（一九九九、集英社） 「堀田の死

後に出版されたものだが、新たな編集の手は加えられていない。「解題」、「テキスト」ともに全集に依拠し、初出についての誤記もそのまま受け継いでいる。」

『別離と邂逅の詩』（二〇〇一、集英社）「ついでながら、このもう一つの堀田善衛詩集についてもここで言及しておきたい。堀田が上海から帰国した一九四七年の半ば頃、自身で先立つ時期の詩をまとめて刊行しようとして意図していたが実現しなかったのを、彼の死後清水徹が点検し、「資料篇」と「解説」を付して刊行したものである。堀田の予定した「あとがき」によれば、「大部分昭和十二年頃から二十年の春頃までに至る、ほとんど全部戦争中の作品」とのことであり、「瀉の風景」など戦後の作は、もとより収録されていない。ただ堀田は、その後一九五四年の新日本文学会での講演「私の創作体験」三のなかで、自分が詩人として出発したことに触れ、「そのうちに詩集をまとめますが、これも読み返してみても、実に子供っぽい詩なので弱りましたけど……」と言っており、この時期になお詩集刊行への意図を示す発言として、また見直したためらいを示したとも取れる発言として注目され

る。この『詩集』の詩にはほとんど手が入れられると書かれているが、「瀉の風景」の場合にも同様に戻録の前に手を入れたと考えられる。それが一九六五年の講談社版文学全集でのテキスト改変に結実したのでろうと私は推定する。改変は、一九五二年に相次いで刊行された『現代詩集 歷程篇』でも『荒地詩集』でもなされていなかったから、それ以降、一九六五年との間のことになる。」

以上をまとめると、講談社版文学全集への掲載時に、作者自身によって手を加えられたテキストが登場したと判断され、それ以降の掲載はすべてそれに基づいている。しかしテキストに変化があることについては、いずれの版にも触れられていない。明らかに誰も雑誌の初出形を見ていず、見る事ができなかったようだ。何よりも堀田自身手を入れたことを言っても書きもしなかったから、そのせいでもあるろう。全集の「解題」の誤記は、誰もが信頼してかかるだけに、その直接間接の影響ははるかに及んでいると推定される。「」内に書き入れたいくつかの問題については、のちに必要に応じて取り上げたい。

### 3. 雑誌『個性』と『批評』——戦後初期の発表舞台

詩の初出を掲載した『個性』<sup>四</sup>誌の入手が小稿を書く出発点になったことは先述した通りだが、私はその号の目次に並ぶ筆者たちの名（小田切秀雄、赤岩栄、吉田秀和、清水幾太郎、野間宏、武田泰淳等々）を見て、当時から紙質はよくなく、六四ページの薄いものながら、とても意欲的な雑誌だと思った。他の諸号のうち、直接手にして目を通すことのできなかつたものもあるが、幸い古林尚や大屋幸世の、総目次を含む詳細な調査報告に基づく紹介もあり、これらにも助けられながら、堀田にとつての大きな意義をもつたこの雑誌について、また戦後初期に堀田に重要な発表舞台を提供したもう一つの雑誌『批評』やその他の雑誌のことも併せて書いておきたい。

『個性』は、一九四八（昭和二三）年一月に新興の思索社から創刊された。雑誌の中心にいたのは片山修三<sup>五</sup>で、彼はその前青磁社にいて、総合雑誌『思索』の編集に当たっていたが、独立して『思索』と『哲学』の二誌を出すことになり、四七年九月同社を設立したのである。

堀田と親しい小山弘一郎や青山庄兵衛も青磁社からいっしょに付いて来た。『個性』の実際の編集は次長的那須国男がやっていたらしい。片山も那須もまた小山も青山も、さらにやはり編集部にいた鈴木重雄も慶応の仏文科で堀田のすぐ上にいたから、まるで慶応仏文科の巣窟のようだった。彼らはそれぞれに同誌に自分の小説を載せている。片山は紙上で小林秀雄、清水幾太郎、花田清輝らと対談し、二度のドストエフスキー座談会には自らも出席している。『個性』の刊行は、『思索』とともに混沌・乱世の戦後思想・文学界に大胆に切り込もうとする試みであった。雑誌の紙面はタイトルのうたう個性とともに、文学を中心に知識人の当面する問題に鋭い目を向けており、「知識人戦線」を提唱していた。『個性』は同人誌でなく、片山が集めた自立した文筆家の連合というような性格で、雑誌自体がその提唱に相応していたようだ。最も盛んな書き手は福田恒存だったと見られる。創刊号には紙面の半分を埋めて、椎名麟三の「深尾正治の手記」が載り、第二号には安部公房の「終りし道の標べに」が掲載されたように、そして堀田の登場や白井浩司によるサルトル「嘔吐」の翻訳が示すように、新興の戦後文学

を背後から支える拠点雑誌の一つであった。しかし、雑誌継続のためには、用紙の分捕り争いに勝たねばならず、だんだん大手を中心に出版界も整理されて行き、六月にはすでに不渡り手形を出していた。思索社は一九五〇年三月に倒産した。『個性』は四九年一月号で終刊になるまでに全二二二号が出たが、堀田はここに詩を二篇（『瀉の風景』、「暗黒の詠唱と合唱」）、小説を二篇（『波の下』、「共犯者」）二つに分けられているが、もとは一作品らしい）、そして翻訳小説を一篇（シユテファン・ツヴァイク「最後の賭」）掲載した。『個性』は、帰国した堀田にとって以前から同人で戦後復刊された『批評』誌と並び、文学復帰への近道であり、また重要な舞台であった。帰国したばかりの堀田の背後にあるのは、一年九ヶ月過ごした上海生活であったから、日本の文学界とは話がるまるでかみあわない感を抱いていたが、慶応仏文科時代の、また『批評』の文学仲間たちからの助けはまことに有難いものだったであろう。この年外国ニュース専門紙である『世界日報』<sup>六</sup>への就職も「お前向きの仕事場だ」と鈴木重雄<sup>七</sup>が教えてくれたのだった。（それに彼にはもう一つ私たちが前提すべき重大なことがあったと思われる。

る。上海行の前に結婚した夫人と離別し、子供の養育費を支払い、上海で得た恋人と新しい生活に入ろうとしていたのである。自分自身とともに彼らを支えていく生活の資を手にしなければならなかっただろう。）

『批評』誌は、一九三九年八月に山本健吉、吉田健一、中村光夫（外遊中）、伊藤信吉、西村孝次、斎藤正直、平野仁啓ら一人によって創刊された。彼らの何人かはこの時点ですでにその文筆によって批評家として、外国文学研究者として認められた存在であった。同誌復刻版の磯田光一による「解題」<sup>八</sup>によれば、当時の文学界での『批評』の位置は「昭和初年のプロレタリア文学の残渣を克服しつつ、一方では土俗・伝統に関心を向けながらも、『日本浪曼派』にみられる民族意識には同化せず、この後者の局面においてはリアリズムと西欧精神を尊重した傾向」にあり、昭和一〇年代の政治的動向とは調和しにくい雑誌であった。日米開戦にさえ直接の影響を見せなかった。この戦時下の『批評』は、四四年四月に出て休刊し、四五年二月にガリ版で復刊したのを最後に廃刊となった。通巻五六冊を出した。ここに堀田は詩を五篇、評論を四篇発表し、「西行」を六度にわたって連載したが、

未完に終わった。

堀田は一九四二年に慶応大を繰上げ卒業<sup>九</sup>し、翌年から国際文化振興会<sup>一〇</sup>調査部に勤めていたが、その上司・調査部副部長の伊集院清三<sup>一一</sup>の紹介と口添えで『批評』の編集発行人の吉田健一に紹介され、詩を認めてくれた吉田の紹介でその同人となった。最年少同人であった。堀田の詩の背景としては、まず彼がフランス文学科の卒業論文<sup>一二</sup>で「ランボオとムイシュキン」と取り組んだように、ランボオやヴァレリーのフランス象徴詩がある。ランボオは自分でもいくつか訳を手がけ、ヴァレリーの詩「海辺の墓地」を繰り返し声に出して朗誦していた。また慶応で級友の芥川比呂志や村次郎らが加わっていた同人誌『山の樹』<sup>一三</sup>に首を突っ込んでいて、同誌が紙の配給統制により『詩集』<sup>一四</sup>誌と合併してからは同人に加わり、詩を掲載している。『山の樹』には、編集の中心にいた鈴木亨の立原道造追悼文が堀辰雄の評価を受けて『四季』<sup>一五</sup>の立原追悼号に転載されたのがきっかけになって、そこから中村真一郎や加藤周一らの帝大生らも加わって来、『四季』とメンバーがダブり、紙面にもそれが反映している。初め堀文学に反発していた堀田もそうで

はなくなつたようで、芳賀檀の影響もあると思うが、とくに立原道造の詩<sup>一六</sup>に親炙したようだ。やがて散歩の途上で出会う堀と口をきき合うようになり、訪ねて詩を見てもらい、感銘の言葉を記している<sup>一七</sup>。『詩集』とは合併したものの、日本的抒情を断ち切ろうと試みる異質な詩集団で、戦後の『荒地』の母体であった。「若き日の詩人たちの肖像」<sup>一八</sup>にエリオットの「荒地」の訳をめぐるそのメンバーの「良き調和の翳」と「ルナ」によるやりとりが描かれ、主人公もそこに口を挟んでいるように、彼らは堀田にとって早くから新宿のカフェで知り合った、気さくに話し合う仲間だった。小説は、それぞれ「新橋サロン」<sup>一九</sup>、「新宿の詩人たち」<sup>二〇</sup>と名付けられた、この二つのグループの間であつて、どちらにも属さず、どちらにも親しい仲間のいる主人公が両者を越えた道を考えている姿を描いている。タイトルにいう「若き日の詩人たち」とはほぼ彼らのことであり、芥川比呂志、村次郎、鈴木亨以外に、上述の小山弘一郎、青山庄兵衛も含め、田村隆一、鮎川信夫、中桐雅夫、牧野虚太郎、三輪孝仁、白井浩司、加藤道夫などもモデルとして重要な役割を果たす。

『批評』にはこの年七月号から作品掲載され、一月には西村、吉田、山本らとともに編集同人となつて、この時期編集を担当していた山本とともに直接編集にも関与した。河上徹太郎、芳賀檀三、武田泰淳が入つたのは堀田の後だが、河上、芳賀とはその前から親しくし、大きな影響を受けた。芳賀はこの時期堀田の「師」であつた。同人の身近にいた小林秀雄からも明らかな影響がある。そのランボオの翻訳と論考には強い刺激を受けた。小林がいつ同人になつたかは不明。顔を合わせたのは戦後かもしれない。(影響の点では他に上に記した堀辰雄、さらに保田与重郎も重要だ。)一九四四年一月末に召集令が来、『批評』に連載中で、それまでの試みの総仕上げを目論んでいた「西行」を打ち切り、「別離辞」を書く(二月号)。同じ号に、山本健吉が「後記」に「堀田善衛が應召した。この若き詩人批評家に幸あれ」と送る言葉を書いている。山本はさらに次号に痛切な「堀田善衛君の應召を送る序」を書いた。これはこの種のものとしては異例の長文で、編集の折に往来し、親密に話し合つて得た堀田の豊かなエピソードに満ち、「詩人批評家」の次世代を継ぐべき堀田への暖かい励まし言葉となつている。

なお堀田は一九四三年一二月に結婚し、世田谷区その相手の親戚からの借家らしい住まいで暮らしていた。結婚式では、芳賀が新郎の前途を祝い、英文学者の西村孝次が文化学園での教え子であつた新婦を讃えた。新婦は二年二月の生だから、堀田の四歳ほど下である。堀田は文化学園に親しくしていた仲間たち(「アリョシヤ」三のモデル・三輪孝仁もその一人)がいて、しょつ中出入りしていたから、その中の誰かに紹介されて知り合つたのだろうか。堀田は四四年二月に富山で東部第四八部隊に召集され、不在中の四月に男の子が生まれており、逆算すると結婚式も少々慌ただしかったようだ。彼は隊には一〇日ほどしかいず、二月のひどく寒い時期で、重装備のままで兵營の便所に入り、転んで肋骨を折り、そこから肺をやられ、富山の五福にあつた陸軍病院で三ヶ月ほど入院生活を送つていた。そして五月には召集解除され、この後九〇日間の「療養期間」が続き、伏木の自宅で静養した。間には買つて来た大魯迅全集を次から次へと読んだ。その後、竹内好『魯迅』、小田嶽夫『魯迅伝』、武田泰淳『司馬遷』、「史記」の世界」なども読んだ。堀田は夏には上京し、彼の住まいに『批評』同人たち

が集まって、会が開かれた。快気祝いでもあろう。同人会はさらに翌四五年一月初めにも河上の家で行われ、同人たちに近しく音楽家として知られる元上司の伊集院も客として出席し、「支那論」がはずんだというから、いざ上海へ行く堀田の事実上の送別会だったと思われる。三月一〇日の東京大空襲に遭遇し、その二四日に上海へ向けて飛び立った。上海行きについては、河上徹太郎<sup>三</sup>に相談に行ったが、河上は在日中国人たちに親身に世話をし、彼が呼びかけた中国語講習会にも堀田も参加していたし、しばらく前にそこから帰って来たのだったから、これ以上はない相談相手だっただろう。その河上に渡航を「酔狂」と言われたが、どうにかして脱出したいという堀田の気持ちは深刻だったようだ。自身危うく帰国できない目に合いそうだった河上としては、堀田を危地へ送り出したくなかったに違いない。

このように『批評』は、堀田にとつて戦争末期の主要な発表舞台であり、すでに他の諸雑誌に詩やエッセイを發表していたとはいえ、ここで「文学的出發」をしたと言つてよいだろう。文学界での場数を踏んだ先輩たちに恵まれていたことも注意を引く。彼らに「詩人批評家」

としての将来を大いに囑望されていたから、上海からの帰国がどんなに歓迎されたか想像に難くない。一九四七年堀田が上京してすぐの頃に、有楽町のカストリ屋で『批評』同人による堀田と先に帰国していた武田泰淳の歓迎会<sup>四</sup>が行われた。もっともスタンド風の店で、一〇人ばかりの仲間が一行横隊に並んで、お互いに隣としか話ができなかったらしいが。一方、前年末から『批評』と『近代文学』の会の同人たちの話合いなども進められていたが、これは『文芸』編集長の杉森久英の肝煎りになるもので、河出書房が後援する、いわば当時の批評の二大潮流の顔合わせであった。堀田にも作家や批評家たちと出合い、知り合う機会が急速に拡大して行った。また上海で知り合い親しくなった女性と武田は堀田と三角関係<sup>五</sup>にあり、二人は埴谷雄高にそれぞれ相談に行っていたから、埴谷のほうも堀田が来るのを興味津々で待ち受けていたに違いない。こういったことはいずれにせよ詳細不明で、それはそれでよしとすべきものだが、武田が工夫して自らの小説の材料にしたのに対し、恋の勝利者のほうの堀田は何としても書くまいと努めていたような印象を受ける。夫人との離婚は堀田には難題とも言うべき課

題だった。話し合いはなかなか捗らず、その実現は一九五二年の初めにまでずれ込んだ。その一方で一九四八年半ばに、世界日報社の倒産で退職を機に逗子に移り、新しく女性と同棲して作家生活を目指すことになり、翌年には娘も生まれ、母方の籍に入れられた。

堀田は他に上記の『現代詩集 歷程篇』に見られるように、すでに上海から訪れた南京で草野心平と知り合つて『歷程』に誘われ、同人になつていた。上海へ行く前にもこの詩誌の編集を担当していた井出則雄からも書けと言われていて、そのつもりもあつたのだろう。このあと、『近代文学』にも詩や文章が載るようになる。小説が何度か文学賞の候補に上つたが、やはり一九五一年度後半期の芥川賞を受賞したことが一つの画期になつたであろう。それまでは貧窮の時代であり、吉田健一や河上徹太郎はこの面でも気を配つて翻訳の世話をしてくれたりした。

#### 4. 「僕」と「屍」

すでに二つのテキストを比較しながら、詩のあらまし

について述べたが、もう少し立ち入つて考えてみることにしよう。繰返しもあると思うが我慢していただきたい。この詩を主対象としてではないが、堀田詩の流れのなかで取り上げたいいくつかの論考<sup>三</sup>があり、いずれも刺激に富み、私としてはこの詩への理解がそれらの論考と驚くほど異なるところもあり、その分大いに勉強になつた。

それらの検討の過程で得た材料も併せて論じたいと思う。詩を貫くのは僕と屍の対峙的な相関関係である。そしてこれは詩の展開に連れて微妙に変化がある。これを見ることがこの詩を理解する鍵だと私としては思う。

「足跡一つない砂浜」に「ごろりと転がっていた」「屍」は「ずしりと重」かつたが、「僕」に小屋へかつき込まれ、土間にねかされ、「黙ってねたまま」「僕」を見ている（第一〜二連）。「僕」は、「屍」に向かつて自問し、「以前を思い出す」。星々が「その意味を語」つていた故郷にいた頃を、そこから出ようとしていた少年時代を、それから記憶の中断があるが、「火田民が襲つて来」たことを。それは記憶を失うほどの大きな「どさくさ」だつた。「屍」は「僕」が「機を見て扼殺したらしい」（第三〜五連）。「屍」は「僕」に向かつて「毎夜、真夜中に啜り泣く」。

「屍」は「恐らくは『僕』の青春の『屍』」なのだ。そして『僕』に何かを期待している。」しかし『僕』は斯く在る。(第六く七連)——以上、第一連から第七連までの「僕」と「屍」の関わり方を見ると、初出形と現行形とでほぼ変わらないと思われる。黙って「僕」を見ていた存在の「屍」が、火田民の記憶をはさんで、扼殺した当人らしい「僕」に向かって啜り泣く存在となる。第五連は内容上、詩全体のなかに特異な位置を占めている。現在が生成変化の過程・結果であること、そしてその変化は同時に外の大きな世界と関わっていることが示唆され、たんに「屍」の内面の問題にとどまらない。「僕」はその過程で恐らくは彼の青春の時を奪ったのだ。しかし「僕」はもはやそれを取り戻すことはできない存在になっている。「僕」は「屍」に「お前」と呼びかけるが、「屍」は「僕」に口をきくわけではない。「らしい」と「恐らく」によって強調されているように、「屍」の内面は推察の対象だ。「屍」が自らを表白することはない。「屍」はむしろ「僕」の、「こうではないか」という必ずしも自覚的でない自己意識の反射鏡なのであろう。そして「僕」はそうだと思うながら、そうだと結論することをおそれても

いるのである。「僕」はその意識から免れない。

さて初出形の第八連冒頭には、現行形では想像だにできなかつたような三行が付け加わっている。再び火田民が襲つて来て一波乱起こらなければ、「屍」との関わりはそのままで、新しい「僕」の生はないというのである。いや、そのように断定はしていないかもしれないが、少なくともそういう可能性を含み持った言句であろう。しかし現行形の詩にはそういうふうな読みの可能性はなさそう。そうすると、第八連とそれを受けた第九連との変化を通じて、詩の全体の解釈にも変化が及ぶのではないだろうか。初出形では、「僕」は現在に目を据えて、そこからおさらばし、足に地の付いた活動の場が開けることを夢見ている。が、己が過去のしほりによる葛藤が強まってもいることを感じ、まわりは荒地であり外からの幸運にもどこまで期待してよいものか見通しは必ずしも定かではない。これに対し、現行形では、外からの声が届くことはない。周りの「荒地」はそのまま日本全体の象徴的な寓意に近い。脱出して新しい足場を作ろうとする夢もついに夢に終わり、変らぬ生活を送り続けるしかないのだろうか、というあたりであろう。もう一度「恐

らく」が入りながらも、内なる葛藤の強まりが募っており、二つの間の差は微妙だと思われるが、そこをあえて書き分ければ、言わば自らの夢に対する執着の強さの違いとなつて現れるということであろう。

それでは作者の立場はどこにあるのだろうか。二つの差は微妙であつて、いずれにしても希望と絶望の間であり、テキストの改変は希望から絶望の方へ、程度の差はともかくその方向で揺れたことになる、と言えるのではないか。書きながら私は、作者の立場の問題とこの詩を書いている彼の書き方の間には深い関連があるのを感じた。つまり上の「絶望」というのは、テキスト改変後の時期（端的に言つて、高度経済成長と大衆社会化によって特徴づけられる）の堀田にとつて下からの変革可能性が弱まり、人々が引きずり込まれるような状態になりつつあると感ぜられているということであろう。それが「夢に対する執着の違い」ということなのだが、だからと言つて、いっしょに流されようというのではないであろう。もともとどこまでも主体の抵抗への思いや態度というものに固執したいということから、詩が自己を対象化する書き方が生まれたのでないかというのが私のとりあえず

の推定だが、はてさてこの問題にどこまで迫れるだろうか。

この点で先例を求めて『別離と邂逅の詩』を開いてみると、雲の形に「死んだばく」を見て、「おまへ」と呼びかける「哀歌」、過去の自分の姿を思い浮かべて「若い日のむくろ」と表現する「京都」、自分のイメージを強調するために「私」と「お前」という枠を用いた「野辺」など、先立つ諸詩のなかにそれぞれつながりを予感させる先駆的な試みを見ることが出来る。「対象化された自己」が詩中に投入された明らかな例としては「水のほとり」にその最も早い例が見出される。晩秋の情景のなかに山毛櫨の樹に凭れた詩人の姿が示され、自分の詩の振り払うべき「かなしみ」について自問する。この詩では、詩中の「おまへ」は詩人が外から呼びかけているのではなく、詩人自身が詩中に入り込んで、自己対話をしているのである。さらに「瀉の風景」といっそう近い関係にあると思われるのは、上海で作られた二つの詩「ジェスフィード公園にて」と「序の歌」である。これらについては、少し立ち入つて「瀉の風景」と比較しつつ分析しておき

たい。

「ジェスフィールド公園にて」〔『歷程』一九四八年七月号）には「おまへ」が登場するとともに、しかしまたその「若き日のむくろ」の登場によって目を引く。「潟の風景」との発想の共通性は明らかである。「去年おまへは東京にゐた／今年おまへは上海にゐる／おまへが海を越えて来たあの荷物飛行機に／おまへの荷物もあつたのだ／誰も忘れずに……／おまへはやはり背負つて来たのだ／若き日のおまへのむくろ」とあり、「若き日のむくろ」は、飛行機の荷物として東京から上海へいっしょにやつて来たのだ。詩は、「かたはらに／横になつてゐるのは／あれは、誰だらう」と始まる。「むくろ」はふと気づくと傍らにいたのだ。「けうとい四月」「けうとい桜の花」とあつて、自分に若さが、活力が失われていると思つたのだらうか。今後の力になると思つたからこそ運んで来たのに、忘れていたのだ。「池のさざなみが既に痛ましくなつたなら／おまへは眠れ」と詩人は「おまへ」に忠告する。こうして「若き日のむくろ」の一番が来、「天からゆつくりおりて来る／明るい歌を書くだらう」というお終いの語句へとつながっていく。一見元気づけのように受

け取れるのだが、実はそうではない。この歌は「むくろ」が「黒枠」の中に書き入れるせりふなのである。「黒枠」は死亡広告であろうから、逆に、明るい歌など無用だ、ということになるのではないか。「むくろ」という言い回し自体、出て来ても上海で生きる余地がないからなのか。「むくろ」の自身は、「水のほとり」のような「かなしみ」の感情そのものでなく、むしろそれに対するなぐさみの歌のようだ。そうすると、この詩の眼目は、上海でしっかりと足を地につけて生きろと改めて自分を戒めることにあり、詩人はしつかり自立せねばと思つているのに、ふとそんななぐさみの歌が自分の口をついて出てしまうことにむかついているということであろう。この詩を表現の面から見ると、「むくろ」の登場とともに、自己の分割された対象化、そしてそこに独特の役割分割が行われていることに特徴がある。しかし詩人は詩の中で自分を眠らせ、「若き日のむくろ」を独自に動かし、そしてそれに無効の判断を下すというまことに複雑な構成方法を取っている。

それにしてもこの詩のタイトルは、なぜ「ジェスフィールド公園にて」なのか。堀田にとつては大事なのだから

うと思いつながら、なんとなく『上海日記』を覗いてみると、一九四六年四月二一日のところに、ジェスフィールド公園に行ったことが出ています。詩に「去年おまへは東京にゐた／今年おまへは上海にゐる」とあり、しかも「けうとい四月」ともあるから、ぴったりこの時の堀田に当てはまりそうだ。堀田が飛行機でやって来たのは一九四五年三月のことだから、はや滞在一年を越している。「けうとい」のは慣れないせいではない。堀田は上海で親しくなった武田も女性も従兄の市川も帰国してしまい、孤独な生活に耐えている。夜女性や夫人のことを思い、「泣きべそをかきたい気持」になっている。これから先の生活を考え、堀田に大きな心理的危機が訪れたのだろう。詩も公園を借景にして、詩に設定されたこの頃に書いたのだろうと推定したい。

さて「序の歌」（『歷程』一九四八年五月）に移ろう。ここでも「お前」と「若きむくろ」が登場する。両者ともに詩人の二分割された自己の対象化であるという点で「ジェスフィールド公園にて」に同じい。だが「お前」と呼ばれるのは「船」であつて、「若きむくろ」はその船で脱出の機会を伺うのである。五連から成る長詩で、こ

の詩がいつどこで書かれたかを示す書誌データはないのだが、中身から明らかに上海の所産だ。今いる「いたづらにさびしく広いその国」とは中国である。そのいつのことかのほうは判断が難しい。詩人は「船よ／お前はいつ出発するのだらう」と問う。いかにも自己問答のような口ぶりだが、「船」は詩人自身の身体、「若きむくろ」はその心の対象化なのであろう。それでは、どこへ向かうのか。「青い空と／青い夜と／無智な動物と／言葉の通じぬむくろ」つだけのある／追憶の海に似た国へ……」という。そして「喪失と怒りと／飢ゑた心で食ひ入るやうに／眺めてゐる若きむくろは／遠くをのぞむ眼だけをいのちに」というのが「むくろ」の状態だから、あわせ考えると、「言葉の通じぬ」「遠く」とはヨーロッパであろうか。それともやはり日本だろうか。それは「死の国」ではないかとも言われている。あるいは周りに血と暴力があり砲声が聞こえるのに、どこへも行先がなく、どこへでもということの表現だろうか。しかし詩人は怖れを抱いているわけではない。「洗へ！洗ひ流せ哀歌や逃亡への古い夢を洗へ 洗ひ流せ／郷愁を洗へ 洗ひ流せ／人間の古の一切を洗へ 洗ひ流せ／この若きむくろの眼

と心をも洗ひ流し追憶の海へと流しされ」と激しい言葉が飛んでくる。自分はこれまで何をして来たのか。哀歌や逃亡への古い夢や郷愁にとらわれた不毛で空虚な生、それがゆえの「むくろ」であり、自分の心の状態だというのであろう。ただ「むくろ」が「ジェスフィールド公園にて」のように「若き日の」でなく、「若き」であることに注意が必要だ。「追憶の海へ」向かわせる以外にもはやないのだが、それには甘い考えを捨て去る決断が必要で、自己のなかにある逡巡に迫る詩と言えよう。詩の最後は「船よ出よ哀歌よ去れ／この若きむくろには未だ夜の中で／ただ一つの熱いものを浪費して／絶望を燃やし焚きつくす義務がある／……その火に照らしても／しかし船は出るとすぐ行方不明になるだろう」である。「出よ」と言いながら、行き着く見通しはないのだ。あれこれ迷いながら私が到達した結論はこうである、不幸を嘆きつつ上海に留まるのも（哀歌）、ヨーロッパないし世界のどこかへ逃れるのも（古き逃亡の夢）、国へ帰れば何とかないというのも（郷愁）、絶望をつきつめて考えていないのだ、その甘さを捨てなければ、どこへも通じようがないのだ、と。この「序の歌」とは、目標に向かつての第一

歩という以上に物事の初心に帰れということではなからうか。

この詩では詩人の自己が「船」の「お前」と「若きむくろ」の二つに分割され、詩人の内面は「若きむくろ」に託される一方、その表白はもっぱら「船」に向かつてなされているが、誰に向かつてというのでもない言葉も「」付きで登場し、詩人は三種類の言葉で読者に対するといふ、これまた複雑な設定になっている。まわりの状態や読者に必要なことすべてを言うためにはそうせねばならなかったのだろう。

「序の歌」も「ジェスフィールド公園にて」も、上述のように『歷程』に掲載された。堀田は上海で国際文化振興会の「上海資料室」に勤務することになっていたが、極度のインフレのために仕事にならず、金欠に困りながらぶらぶらしていたのを、名取洋之助が見かねて、武田泰淳といっしょに南京見物に招いてくれた。そして南京では草野心平の館に厄介になり、飲み食いをし、街の見物をした。城から見た紫金山の眺めがのちに『時間』の執筆を促したことはよく知られている。草野からこのとき『歷程』に誘われたのだった。二つの詩は、おそらく

のちに草野が上海に来た時に手渡され、草野が戦後『歷程』を復刊してから、遅れて掲載の運びになったのだらう。

かくて堀田の上海からの帰還とともに、私たちも「瀉の風景」に戻つて来る。「ジェスフィールド公園にて」「序の歌」との比較も念頭におきながら考えてみよう。上海の一九四六年の二つの詩、そして帰国した日本の、アメリカ占領下にあつて、社会像が未だ定まりきらぬ一九四七年初めの詩。異なる時空間、そして堀田のやはりそれぞれに異なる立ち位置によつて詩は規定されている。ここでは詩のなかの「対象化された自己」の問題にしぼっておきたい。

「ジェスフィールド公園にて」には「若き日のおまへ」が登場し、上海にあつて異質な日本が噴出したわけ、特定の過去の自己である。自らの悲しみの感情に対してもたらされた明い歌にも無効の判断をするというイロニーニッシュな表現方法による悲しみの振り切り方に上海らしさがあるのだらう。この詩に続く「序の歌」では、港にもやう「船」とその船で脱出しようとする「若きむくろ」が登場し、「若きむくろ」は明らかに詩人自身の内

面を担っているのだが、詩人の表白は直接「むくろ」に向けられず、詩のなかの「おまへ」は「船」なのだ。その点で自分自身の内面に対してやはりイロニーニッシュに臨んでいると言えるだらう。詩人がきわめて困難な状態に追い込まれていて、選択肢を探っていることに対応しているように思える。そして「瀉の風景」では、帰国した詩人は、眼前に過去の自分の「屍」を見出す。「屍」という言葉に「むくろ」と使い分けがあるとも思えないが、詩中にこの「屍」とともに「お前」でなく、「僕」が登場するのが何よりも新しい。そしてその「僕」が「屍」に「お前」と呼ぶのだ。「ジェスフィールド公園にて」では詩中に過去の自己である「若き日のむくろ」が登場し、詩人自身は外において、詩に自分の内面を表わすというやり方であり、「序の歌」では現在の自己が「船」と「むくろ」に対象化され、それを使い分けるやり方で詩人はやはり外から自分の内面を表わしていた。それに対し、「瀉の風景」には詩中にある現在の自己である「僕」と過去の自己である「屍」が対峙する緊張関係が生まれ、「僕」はある意味では詩人そのものだから、適宜その中へ入り込みもし、同時に「僕」は詩の時空間に限定された存在

として独自に生きてもいるという巧妙な設定である。「屍」は詩人が戦時下の皇国日本で過ごした「青春の過去の自己」であり、そこで身につけた苦しく悲しい体験とその中で自らに作り上げた文学的な蓄積と意欲の両面がその内実であろう。上海から帰国したばかりで、戦後日本の像もまだ結べぬ詩人にとって、自己のこの過去に対していかなる態度が取りうるかを想像すると、詩のこの設定はかなりうまく相応しているのではなからうか。「弾力ある土地」を足の下に踏まえることができるかどうか、たしかに予断を許さないが、それを捨てることはないだろう。それは上京して自立した文学者として立とうとする、堀田にとって他に代えようのない道である。

ここでの詩人の立ち位置、この時点の日本での状態については、次節に譲るとして、大きくまとめて言えば、いずれも詩人の「対象化された自己」の詩中への投入なのだが、「現在化している過去の自己」または「過去化した現在の自己」という二つの類型があるようだ。双方ともに踏ん切りをつけて、前方へ、上方へ出ようという姿勢が根底にあり、それを示そうとする表現を試みた詩として、一つの系譜を形作っていると言えるのではない

だろうか。「潟の風景」は、日本への帰国という堀田の大きな転換点にあつて、とりわけそのような自らの詩的蓄積の上に立つた試みであつた。

## 5. 堀田の立脚点とその背景

この詩は一九四七年の二月か三月に書かれた。上海から帰国して間もない頃で、上陸して故郷の伏木に帰り、その後将来の生活への見通しを立てるために上京するが、その前に一時期滞在していたから、「潟の風景」はおそらくその折に着想されたものである。詩の風景空間を形成する「潟」がどの潟を指すのか、必ずしも特定するには及ばないと思うが、上海に出かける前の詩「故里<sup>二</sup>」にうたわれた「海のへの紫濃き藤花のもとに／大伴家持卿が別業の跡はあり／かの丘に かの浜に／思ひ出はしづかにねむる」への自然なつながりで、十二町潟あたりかもしれない。

しかし「故里」が入営中に得た病の療養中にその故里で書かれ、いささか回顧的な色彩を帯びているとすれば、「潟の風景」はひたすら現在に目を据え、過去の自己か

ら脱出する夢の帰趨が焦点にある。ここに描かれた湯のイメージは少年時代を送った故里で触発されながら、その懐かしい風景ではなく、帰国して眼前にした、詩で「荒地」という言葉に括られるような故国の荒れ果てた姿の象徴的な風景である。そして詩の核に「僕」と「屍」の対峙があるように、それ以上に詩人の心象風景である。

「僕」に対峙している「屍」は、戦時下の皇国日本で送った堀田の青春時代の自己であろうから、今更ながらにありありと迫って来るであろうが、「僕」のほうにも、上海で日本軍の侵略の状態を見聞きし、その敗北によって受けた衝撃、国民党の治安機関で自ら活動し見聞きし蓄積した体験、帰国しての短い期間の体験、上海から引き続いて待ち受けている女性をめぐる問題などを背負っている事情は複雑であり、それらと絡まり合いつつ、何をにおいても自分自身の道をどう切り拓いていくかということこそ、片時も心から離れない問題だったであろう。詩には、今後の、人間としての、またとりわけ文学者としての在り方への思いが込められているのであろうが、まわりつづくものの重さも感じられるようだ。

帰国前と思われる『上海日記』の最後のページ<sup>二九</sup>には、

次のような記述が見いだされる。

内地へ帰つたら、

「日本」のこと。

「血の呼ぶ声」

「身体と呼び声」

「身体について」肉体化されたとも云へぬほどに身体そのものである日本について。

上海へ出かけるときは、いずれはそこから夢見たヨーロッパへの脱出もという思いがあったはずだが、現実それが不可能なことが分かり、アメリカ人たちとの接触により占領軍というものの実態も知り、ある程度日本での生活の状態も伝わって来、近しくなった女性や武田泰淳も帰ってしまった後となつては、また国民党に片足突っ込んだ立場のままでの危険も感じざるを得なくなり、日本へ急いで帰国しようという気持ちをはっきりした時点での、これは自分の内心を探っている言葉だと思われる。幸か不幸か、日本を「肉体化されたとも云へぬほどに身体そのものである」と彼は感じていた。おそらく上

海での中国の人々や諸外国の人々と日本人との違いの観察からだけでなく、彼らへの自らの対応の仕方にも、ひいては自らのあり様そのものにも、それをイヤというほど感じ、感じさせられていたであろう。この「身体そのものである日本」の実態、中身となると不分明だが、人間としての自然なあり方、自分固有の目指す方向として自覚しているもの、皇国臣民として体得しているものなどが混然一体としていないものではないだろうか。しかもこれから帰りゆく日本ではその表の面さえも混乱している、まだ合わせるべき自分の「日本」もなく、自分自身の身体によって切り開いていく、その先にしか考えられない、ということでもあろう。またこういうことはずっと日本にいたとすれば考えなかっただろうという思いをも噛みしめているかもしれない。

八月一五日の天皇の敗戦の詔勅は、とりわけ「堪へ難キヲ堪へ」と国民の優情に訴えて足元を固め、在日朝鮮人を始め「大東亜共栄圏」への協力を誘い強いた人々に対しては「遺憾ナシトセズ」という曖昧な二重否定で無責任に突き離れた。とくに後者は堀田を直撃し、彼らの身の安全と生活維持のために、時にわが身の危険を賭し

ても、ただちに行動に移るように彼を促した。中日文化協会の仕事を通じて親しんでいた中国人たちが抗日運動の両勢力（国民党、共産党）にとつて「漢奸」であり、民衆にとつては裏切者以外の何物でもないことはしかと呑み込んでいたであろう。堀田はここに自らの人間が問われていることを感じ取ったはずである。

また詔勅の後、すでに用意しつづあつた「中国文化人に告げる書」<sup>三〇</sup>の企画の実行を急いだ。これは上海在住の日本人の真情を中国文化人に率直に訴える文章を集め、パンフレットにして空から散布しようというもので、天皇の放送時には資金の調達や散布する戦闘機の将校の応諾や人々の原稿協力や翻訳などすべてトントン拍子に進んで印刷のグラが出る段階に入っていた。しかし今となつては日本人たちへの協力は非常に困るという印刷労働者たちのまことにもつともな抵抗に合い、あきらめざるを得なかつたのであつた。のちに振り返つて堀田はこのパンフレットのことを思い起こし、「あんなに愛国心に燃えたことなかつたな」と語っている。つまり、このとき堀田は国体から純化された「日本」を自らのうちに感じ、それを辛抱強く行為に移し、その蓄積された体験を身体

に持っていたと言ってよく、その接ぎ穂が帰国した日本で見つからないということであろう。

この点で帰国の船の中での体験も重要であろう。一九四六年の暮れに佐世保に着岸したが、船内に伝染病が発生し、一週間ほど沖で足止めを食った。退屈しのぎもあって、船底に引揚者たちを集め、一日一度はやって来る警官を呼んで、ミカン箱の上に立たせ、「いま日本でいちばん流行っている歌をうたえ」と言ったところ、警官が歌った「リンゴの唄」<sup>三</sup>を聞いて、堀田は心底ショックを受けたのだった。戦乱と革命で激動する中国から帰って来たばかりで、日本でも二・一ストが間近な時期であり、敗戦ショックで食べ物もろくにないのに、こんなに優しく叙情的な歌が流行っているとは！ というのであった。船の中でも行動力と統率力を示した堀田だったが、それにつながる結果は無惨だった。しばらく後に堀田も日本の事情を理解したのだった。

その後、『批評』の同人会が行われたが、上海でもの考え方や感じ方も変化していて、みんなの喋っていることが全然分からなかったという。いちばん若い同人でさかんに喋っていた以前の堀田を知らない小林秀雄が隣に

いて、「君は随分おとなしい人だね」と言われたそうだ。彼が今後の文学に期している思いを口にできるような状況ではなかったのだろう。『批評』が続刊されたので<sup>三</sup>、書いて行くことのできる場が与えられたのだが、日本とその文学界の状態を見極めるには、時を要するはずである。

二人の女性のことについては、この時期の堀田の背景として重い位置を占めている。もはやとくに改めてつけ加えるべきことは何もないが、その重要性をもう一度強調しておきたい。

さて詩の「弾力ある土地の夢」との関わりで、上に「何をおいても自分自身の道をどう切り拓いていくかこそ、片時も心から離れない問題だったであろう」と書いたのであったが、これは間違いなく、詩人として文学者として自立的な立場を築き上げて行くことを意味していた。それは一人の人間としても文学を追求する者としても一貫した立場でなければならなかった。しかし上海での経験は、それまでの彼自身「芸術至上主義的」と名づけていた立場を根本から崩すようなものであった。一切のイデオロギー的なものを排除するところから彼の詩は出発

していた。したがってこの面での帰国後の彼の仕事として待ち構えていたのは、彼の文学的仕事の中心をなしていた詩と今後の自分のなかでどのように向き合い、どのように位置づけて行くかということとは避けて通れないことであつたろう。それらの詩は、死後に『別離と邂逅の詩』という一冊の詩集として刊行されたことは先に見たとおりである。自身そのつもりで編纂していたにもかかわらず、なぜ実現しなかったかの事情はよく分かっていないが、彼なりに内的葛藤をずっと引きずっていたに違いない。刊行するはずの詩集には「あとがき」があり、引用すると、

この詩集にをさめられた詩は、大部分昭和十二年頃から二十年の春頃までに至る、殆ど全部戦争中の作品であります。

帰国して以来約半年、少年時代と呼んでいいやうに思はれる時期の、これらの作品を読みなほしてみても、私は私流に戦争中如何に死の影に脅かされ、かつ死を予定して暮して来たかをはつきり知り、又、未来にわたつても死は生涯の歌となるものであることを知り

ました。この詩集と私のこの時期はこれで終りです。

「帰国して以来約半年」とあり、「瀉の風景」を書いた時点で、どれだけの詩を前にしていたかは必ずしも明らかでないとはいへ、それほど時間的な差があるわけではないから、彼の基本的な視点はここに出ていると考えてよいだろう。詩における「心象風景」にこの問題の重さを投影して考えるならば、「少年時代」の詩こそほかならぬ詩の「屍」であり、「死の影」のもとに生れたことさえそのイメージを強めることに結びつきそうだ。詩そのものからこのことをただちに読み取れるというわけではないことは無論だが。

堀田は上海で中国国民党中央宣伝部対日文化工作委員会に留用されたが、そこでの重要な仕事の一つに雑誌『新生』の編集がある。同上海分会が編集・発行した日本語雑誌である。その創刊号に彼は「文学の立場」<sup>三三</sup>と題する評論を載せている。『上海日記』では「風立ちぬ」という題で言及されていたもので、実際に「第一次大戦後『精神の危機』を説き欧州の危機を警告し続けて今次大戦中に死んだ詩人ポオル・ヴァレリーの詩の一節」として「風

立ちぬ／いざ生きめやも……」を引用している。この文章は「戦後の文学」について書くことを求められて生れたのである。帰国した後の堀田の文学への思いがここにはつきりと出ている。

風立ちぬ、いざ生きめやも——我々は待っているのだ。新しい生への誘いに我等を駆り促す風の立ち初め、颯々として吹きつゝのり、戦時から引き続いている我々の苦悩の熱度を少しでもさましてくれることを。又我々は待っているのだ。我等の精神の中に重く横っている死者を風化し、これをみより多かるべき精神の土壌と為し得る残酷な風の吹き来たる日を。

その風はどこから吹くのかと堀田は問い、「今後の文学の題材たる大理石は、矢張り現在に続く過去に於て我々を捉えていた苦悩に他ならぬ」であり、「この度の戦争と敗北は我々を文化的にもぎりぎりの瀬戸際まで叩き上げてくれた。悪劣な精神主義、驚くべき虚偽をも我々は経験して来たのだ。……如何なるイデオロギーとも文学は最後には訣別するものである。道徳とはすべて破滅を

背に控えた覚悟であろう」という。口調に強い危機意識が現われているのが感じられる。当面の生活に追いまくられている人々、戦争がともかくにも終り、ホツとしている人々、これからは何でもやれるぞと思っている人々には耳遠い言葉のようだ。堀田の帰国を待ち受けてくれている人々との間にも、それぞれにギャップを経験することになるだろう。帰国して最初に手がけた過去の詩をまとめて刊行することも、自分のなかでその比重を下げて行ったのではないかと私には思える。

### まとめと補足

思いがけず長文になってしまつて紙数削減に苦慮し、二つの問題について大幅なカットを行った。当初の目論見では、「鴻の風景」がこれまでどのように論じられてきたかを検討することと詩のなかに異物のように存在する「火田民」の語をどう考えるかということについて自分の回答を与えることを課題に加えていた。前者では三つの論考を見出し、紹介しながら、コメントを加えたが、いずれもこの詩を主対象とするものではないので、

その項全体を省くことにし、私とその検討から得た結果を記述に生かすように書き改めた。後者はこの詩の重要な論点だが、他の箇所との結びつきが比較的薄いので省くこととし、さらに調査を深めた上で、いずれ独立の別稿として発表したいと思う。

『個性』誌の「鴻の風景」が初出掲載された号を入手し、そこにこれまで読んでいたのと異なるテキストを目にしたことが小稿の出発点であった。両テキストの比較を行い、詩の読み、詩の持つ意味を考えるうちに、堀田がそれを書いた時点の立ち位置と不可分の関係にあることに行き着いた。それは同時に彼の人生上、文学上の転換時でもあったから、詩に直接つながる狭い範囲内の考察を越えざるを得ず、当初想定していたよりもはるかに長い原稿になってしまったのだ。また他者の見解に踏み込んで検討すべき課題や論点を見出したことで、それに対抗しうる、自分でも納得の行く見解を創出することに腐心したためでもある。四〇五節で、私の考えをほぼ出せたとと思う。以下に、書き落としたことなどを簡潔に記しておきたい。

「1」「鴻の風景」と取り組む過程で、堀田の「むくろ」

や「屍」のイメージと出会い、これは彼に（彼だけに、と言うつもりはない）固有の発想だと思った。あるいは彼自身のなかで、特異な瞬間の発想と言うにとどめた方がよいかもしれないのだが、こんなふうには自己の過去に立ち還ってこたわるのは、おそらくは時代の転機と彼自身のある種の危機意識が一つになった時であろう。戦時期の皇国日本から戦後社会への過渡期は、彼の人生上でそのような最大の危機の時期だったのではないだろうか。このつながりでふと思ったのだが、晩年の時評的なエッセイの数々を読んでいて、いや以前の著作にもしばしばあったのだが、何度も繰り返しが見られることについて、わずらわしく感じたり、彼がその前に書いたことを自分で忘れてしまったのではないかと思ったりしたことがある。たしかに年老いれば、そういうことがあってもそれはそれでありうることだが、ここで言いたいのは、むしろ彼が意識してそうしたのではないかということである。つまり、上の危機意識とは別に、自分のなかで事柄の出発点に立ち還り、もう一度反復してたどり直す欲求を感じ、人に対してもそのことの重要性を伝えたいと思ったのではないか、と思うのである。そういう意味では、この場合

にも人と人との関係のあり方にある種の危機意識をやはり持っていたのかもしれない。

「2」人生上での最大の危機という言葉を上に使ったが、この時期は多少とも親がかりを抜け切っていない状態に置かれていたのであり、そこに例の女性関係が複雑にからまっていたのである。文学上の先輩・友人たちのおかげで就職やアルバイトもできたのだったが、せっかくの外国通信のジャーナリズムの仕事も「若き日の詩人たちの肖像」の「序章」にいう「人を喰ったり喰われたりして暮さねばならず、そうすることのほかには生きる方途を許されていない」世界にはかならなかった。退職を機に早くから決めていた新しい女性との共同生活と作家業への専念に踏み切ったものの、生計は不安定なままで、そして何よりも見捨てた夫人と子供のことが彼の心にトゲとして突き刺さり、一刻も忘れ去ることのできないものであった。あらかじめ話し合って全体を円満に解決しなければならなかったのだが、そうせぬままに踏み切った以上、すでにこじれてしまっているということである。こういうことには位相を異にする四つほどの問題が含まれているようだ。一つは経済的な問題で、自らも貧

窮生活のなかで別に夫人と子供の生計をも支えねばならない。それから社会的制度的に解決することとして、離婚の手続きと子供の親権と養育の問題があり、これは先の問題とも重なって来るであろう。さらに心理的な加害行為というものもある。堀田の側の一方的なものかどうかは知りえぬことだが、俗にいう「世間体が悪い」とか「面子をつぶす」というようなことである。こういう心理面は女性が周りからあれこれ不快なことを言われる状態にも陥れ、話し合いの場でもけっこう厄介なやりとりのもとになる。またそれが新しい夫人に跳ね返ってくることも考えられる。恋の争いから一步抜け出した彼女にとって、これらの問題がそう簡単に解決することでないとは分かっていても、ずるずると遅延することはまことにやりきれない思いであろう。最後に堀田にとつて、以上のような問題が大ざっぱに言って社会的に解決したとしても、もう一つの道徳的倫理的な問題はいつまでも残り続けるであろう。「若き日の…」の「序章」の女の首を絞める行為は、このことに関わっている。しかし他方で、砂浜の土を掘り返し、糧を求めて、死んだ魚の代わりに、死んだ女が生きて現れればこわい話だが、これこそその

後堀田が生き続けていく倫理的なバネとして糧になるものであろう。私が思うに、最終的な解決への方途は、堀田が自分で選び取った作家としての道を通じて、そこに開かれた彼自身の世界が人々の世界をも開き、彼のすべての体験がそのなかに生かされてある、というふうになることであらう。彼はその道を最後までたどり通そうとした、たどり通すしかなかったと思う。もちろんその営為をどう評価するかは人に委ねられるのである。

二人の女性の問題は、まずいことになる、風聞の餌食になりかねないところがあり、堀田の私生活にも小さなぬれ波をもたらしたと思われる。彼は何としても旧妻子、新妻子とともに覗きジャーナリズムから護らねばならなかった。私生活に関わる問いはすべて撥ねつけたようだ。いくつか出版社の作家アルバムなども出たが、堀田のものがないのはおそらくこのことに淵源を持つだろう。

「3」他者の「扼殺」の問題は、堀田が小説の「序章」で「瀉の風景」とともに、もう一つ田村隆一の詩「一九四〇年代・夏」を引合いに出し、戦争から生き延びた人間はどうすればよいのかを問うことで、さらに明瞭な形

を取っている。上海時代の「文学の立場」にはっきりと見られた、戦争と敗戦による自分たち日本人への強い危機意識とここでの「扼殺者」としての深い自覚を持つとする志向はまっすぐにつながっている。これはやはり中国で日本軍が行ったことを自分の眼で見、耳で聞き取ったことの衝撃があり、そこに「終戦の詔勅」の、日本に協力させられた人々への突き放した言葉が決定的な打撃として加わり、抗日戦についての知識も得、支配帝国から敗戦国民への転換からも、これまで自分たちがどんなに無自覚に抑圧に加担していたかを思い知ったということがその土台をなしていたであらう。国境や民族の違いを越えて直接に理解しあいたい、つながりあいたいという志で彼がただちに動いたことを先に記したが、堀田は上海でさらに戦争の勝者であるアメリカが援助の名のもとに中国の国民経済を無惨に押しつぶす様をつぶさに体験したことで、アメリカの日本への対応をも予知し、抑圧する者と抑圧される者との関係のなかに、後者の中から抑圧を前提として自己の利益を引き出す対応をする者が出て、力を持つようになり、抑圧される者が二重に抑圧される認識をも徐々に深めていくようである。

戦後の堀田に大きな位置を占めるアジア・アフリカ作家運動の原点をこれらの体験と認識に求めることができるということをつけ加えたいと思う。堀田はこの運動の創始者の一人であり、その後も国内でも国外でもリードし、後継者を育てた。運動の実際の形は会議の連続であり、その間の連絡や折衝や文書書きなどの準備の仕事であったから、いわば裏方に徹したといってもよいのだろう。堀田の関心の中心は、国境を越えた、まさしく文化的他者の作家個人との人間的交流にあったと思われる。運動そのものは、中ソ論争や世界経済の新植民地主義的再編を経て、民衆と民衆の、被抑圧者の国境を越えた共同をいかに作り上げていくかの方向へと内実も形態も変化するにつれて、堀田の関心を占めていた作家同士の個人的交流は後景へと引き、彼自身も自分の仕事の最後の仕上げへと向かうようになったと思われる。『ゴヤ』によってアジア・アフリカ作家会議の「ロータス賞」を受けたことは彼なりの満足を伴った転機になったであろう。

「4」堀田が「若き日の…」の「序章」に「瀉の風景」から引用したにも示されているように、あまりにも大小違いすぎるとはいえ、この小説と詩は二〇年ほどの

時を隔ててまっすぐにつながっているのだということ強く感じた。戦争で奪われた青春の詩が「屍」に込められているのだが、それは暗い時代の自分の詩人としての、文学者としての生い立ちの過程であり、それを共にした詩友たちとの共同の歩みであり、それが開かれた形で小説の姿を取っている。その中に主人公が「もう一つの日本」を考えるとところがあるが、そのあたりは詩の「夢」に対応するものであろうか。どちらもはかなげではあるが、それを持つか持たないかで、周りを見る目が違ってくることの重要さがよく出ているようにも思える。

私の文中（また註）に、分かる限りで、この自伝的小説にモデルとして自らを提供した人々の名を記すように努めた。そういう観点から言えば、一番はつきりしないのは、やはり女性たちであろう。小説は明らかにここで最も自伝から逸れている。手にその感触を覚えながら絞殺した女のことを書けないであろう。それは許されないことだ。「序章」にあのように書くことと小説に書かないこととは表裏のセットのようだ。小説には主人公にとって三人の女性が登場し、そのなかでマドンナがもっとも重要だが、まったく違った経歴を与えられており、特定

のモデルに結びつけられないための配慮が施されている。小説の時間も現実に兵役に召集される前のかつかつの時点に収められている。『上海日記』に「僕はNのうしろに立つて、Nの肩をとった。むかしナルシスの台所でマア坊の肩をもつたあのしびれるような感覚を再び覚え、自分はいよいよ、と思はざるをえなかつた」<sup>三四</sup>というところを読み、くらくらしたのだった。小説は「ナルシス」と「マア坊」の名を頂戴しただけだったのかと思ひ直した。ちなみにNは、新しくいっしょに暮したほうの女性、のちに二番目の夫人となった人だ。

小説は、二・二六事件の前日に主人公が上京するところから始まり、兵役の召集を受けて郷里にもどったところで終わる。この時点で終わることには特に意味があるとも思えない、現実の堀田にはもちろんだが、小説の主人公にも。河出書房が倒産して、ここでキリをつけて単行本を他社から出したのは、堀田にとつて思いがけない救いだっただけであろうか。という言い方はよくないかもしれないが、いずれにせよ、戦時下の青春小説は未完のまま、続編は書かれなかつたのであり、私はこのことを返す返す残念に思っている。

ここで原稿を閉じ、目をつぶると、帰国の寸前、二八歳の堀田青年が上海の端つこにある黄浦灘公園にいる姿が思い浮かぶ。揚子江の流れ行くかなた遠くに日本があり、背後には上海・中国からユーラシア大陸へと続いて行く、ここは分岐点だ。頑丈な鉄棒が目の前にある。ベンチにもたれ、鉄棒に足をのっけて、空を見上げる。どこまでもどこまでも空を上って行き、上から見下ろすと、眼下に果てしない大地が広がり、その端に日本海という名の小さな水面があり、その向こうに日本の国が潟状に横たわっているのが見える。これが堀田青年の、いや私の「潟の風景」の原像である。

## 注

一 「潟の風景」初出 『個性』第一巻第五号（一九四八年五月号）。

二 「火田民」 「火田」は朝鮮語で、ほぼ中国語の「火耕」、日本語の「焼畑」に対応し、農耕の古い形を指し示す語である。しかし「潟の風景」の中では、人を襲う集団的な主体を表しており、詩の他の諸部分とどんな響き合うものもない。堀田のまったくの

誤認・誤用であろう。

三 「私の創作体験」、中野重治・椎名麟三編『現代文学・創作方法与創作体験Ⅱ』（新評論社、一九五四年）所収。

四 『個性』 古林尚『個性』の検討、『国文学解釈と鑑賞』一九六八年一〇月号、および大屋幸世『個性』細目、『日本近代文学書誌書目抄』所収（日本古書通信社、二〇〇六年刊）を参照した。

五 片山修三 片山修三『出版屋落第記——ある出版屋の半世紀』、『随筆』一九五二年一〇月号、および『帖面』五七号（帖面舎、一九七九 小山弘一郎追悼特集）を参照した。

六 「世界日報」 国策会社・同盟通信の連合軍司令部による解体方針が明らかになり、自ら分割することになったが、世界日報社もそれに際し一九四七年に時外国特派員だけで設立した。外事ニュース専門紙だった。

七 鈴木重雄 片山修三を中心とした『個性』の編集部にいた。ここは慶応仏文科のいわば巣窟で、彼もそうであった。堀田に『世界日報』のことを教えた。

八 『批評』 覆刻版あり。全六冊（昭和一四年八月創刊号〜二〇年二月復活二号）、臨川書房、一九八六年刊。『解説・著者別書目索引』が付されている。

磯田光一の「解説」のほか、西村孝次「回想の『批評』」、『日本古書通信』一〜四（一九九二年一月〜四月）参照。紅野謙介「堀

田善衛の上海行き——国際文化振興会との関係」（『神奈川近代文学館』、二〇〇八）参照。

九 繰上げ卒業 堀田は一九四〇年四月に仏文科に進学したから、順調に行けば、一九四三年三月に卒業の予定だったが、半年繰上げの四二年九月に卒業させられた。学生を二月までに入営させるための措置であった。すでに四月に兵役検査があり、堀田は第三乙種合格であった。

一〇 国際文化振興会 外務省の外郭団体で、日本が進出したアジアの国々への宣伝、また交流を担当した。機関誌『国際文化』を発行し、ここに戦後堀田も回想を寄せている。彼にとつて、『批評』グループへの媒介、上海への渡航の土台など果たした役割は大きい。

一一 伊集院清三 音楽家として演奏・批評に携わっていたが、堀田が振興会に在籍していた当時、調査部副部長の位置にあり、ナチス・ドイツ帰りの部長と対抗し、リベラルな文化人たちを振興会に引つ張り込み、部に独特の雰囲気をしらえていた。

一二 卒業論文 堀田は仏文科の卒論として「ランボオとムイシュキン」を提出した。表題通り、フランス象徴詩とドストエフスキーを学んだ成果であろうが（現物は行方不明）、彼自身の深いモチーフとして、戦時下の閉塞状況からの脱却ないし打開への思いが込められていよう。

一三 『山の樹』 『復刻版「山の樹」』全一三冊（昭和一四年三月創

刊号く一五年二月第一三号)、角川書店、一九八四 鈴木亨「第一次『山の樹』復刻版・解説」が別冊として付いており、総目次も含まれる。

堀田は慶応で同期の親しい友人たちがやっていた、その同人に加わらなかったが、しばしば同人会に呼ばれ、出席し、そこで同人たちの学術的文学的な知識を取得し、三田の教員たちや『三田文学』などについて知ることが出来た。

一四 『詩集』 『ルナ』(註二〇参照)の後身で、政府による用紙欠如のための統合策で、『山の樹』と合併した。水と油のような二つの雑誌の合併に際し、双方の会員に親しい堀田は頼りにされ、彼らを結びつける重要な役割を果たした。『詩集』は「新宿の詩人たち」の多くが兵役にとられたことで四二年九月に刊行を停止した。その後身として『早蕨』(さわらび)が出(おそらく三号まで)、堀田も書いていることが確認されているが、目下現物は見つかっていない。

一五 鈴木亨と『四季』 鈴木は『山の樹』の創設者であり、その終刊にいたるまで、責任者でもあった。復刻版の解説も当然ながら彼の仕事である。彼の堀辰雄論の『山の樹』掲載が注目と称賛を呼び、『四季』派の東大生たち(中村真一郎、加藤周一、小山正孝など)が『山の樹』同人に加わった。

一六 立原道造の詩 堀田はいつの頃からか立原道造の詩と親しんでいたが、一九三九年に亡くなった立原との個人的な面識はなかつ

たろう。『批評』の一九四三年八月号に立原論のエッセイ「何處へ？」および詩「みまかれる美しき詩人に」を寄せている。この点で芳賀檀からの強い影響も感じられる。

一七 堀辰雄訪問 堀田は上京後に頻繁に引つ越しをしたが、最後に生活費の欠如から阿佐ヶ谷の長兄の家に逃げ込んだ。青梅街道を隔たてて、近い杉並区成宗に堀の住いがあった。散歩道が同じだったため、しばしば顔を合わせ、やがて話を交わすようになり、そして四二年か四三年のことだが、詩稿一五編をもって堀宅を訪れた。「旅人の夜の歌」などをほめてもらい、「生涯の夜であった」と親しい友の古河俊造宛の手紙に書いている。当初堀田は「四季」派の詩に対して距離をおき、揶揄的な態度さえ見せたが、堀自身には根太い違った面も見たようだ。

一八 「若き日の詩人たちの肖像」とそのモデル 自伝的長篇小説「若き日の詩人たちの肖像」は、『芸芸』(河出書房)の一九六六年一月号から六八年五月号まで連載され、六八年九月新潮社から単行本として刊行された。一九三六年二・二六事件の直前に上京し、太平洋戦争下兵役に取られるまでの著者の青春時代を描いている。ここではきわめてユニークな命名がなされている詩友たちのモデルを小稿との関わりで紹介しておきたい。「汐留君」|| 小山弘一郎、「浜町鮫町君」|| 村次郎、「光を厭う黒眼鏡の君」|| 鈴木亨、「胸紐君」|| 青山庄兵衛、「澄江君」|| 芥川比呂志、「赤鬼君」|| 加藤道夫、「白柳君」|| 白井浩司、「富士君」|| 中村真一郎、「下

クトル」 Ⅱ加藤周一、「冬の皇帝」 Ⅱ田村隆一、「良き良心の翳」  
Ⅱ鮎川信夫、「ルナ」 Ⅱ中桐雅夫、「アリョーシャ」 Ⅱ三輪孝仁、  
「詩人彫刻家」 Ⅱ井出則雄、等々。

一九 「新橋サロン」 小山弘一郎の自宅である新橋駅前の和田運送店  
二階の広間に、『山の樹』の編集や談論のために仲間たちが集ま  
った。

二〇 「新宿の詩人たち」 「東京ルナクラブ」と称していた。もとも  
と中桐が神戸で出していた『ルナ』誌の読者たちの集まり。雑誌  
は「ルナ」から「ル・バル」、そして「詩集」へと表題を変えた。

田村隆一『若い荒地』（講談社文芸文庫、二〇〇七）参照。堀田  
が上京して最初に知り合った詩人仲間である。中桐のほか、鮎川  
信夫、田村隆一、三輪孝仁らがいた。戦後の「荒地」派の母胎と  
なる。

二一 芳賀檀 芳賀は日本浪漫派系の批評家として活躍したが、『四季』  
の同人でもあった。ドイツ留学中にE・ベルトラムと親しみ、彼  
から強い影響を受けた。堀田は『批評』同人会に顔を出した芳賀  
と知合い、とりわけ音楽やヨーロッパの話などを通じて、親しさ  
を深め、軽井沢の別荘へも出かけたたりし、彼の著書をよく読むよ  
うにもなった。『西行』論には『古典の親衛隊』からの影響が見  
逃せない。芳賀を堀田の「師」と呼んだのは、その頃『批評』の  
編集をともにし、堀田のすべての文を知悉していた山本健吉であ  
る。

二二 「アリョーシャ」 「アリョーシャ」とはドストエフスキーの登

場人物名から取られた『若き日の詩人たちの肖像』の人物名で、  
三輪孝仁をそのモデルとする。作中、神経質に突き詰めた考え方  
の驚くほど激しい変貌を見せる。ドストエフスキーに心酔し、そ  
こから神経病院暮らしをすることになり、出て来ると太宰治に首つ  
たけになり、やがて皇国主義者まがいの言辞を怒鳴り散らす……。  
最後は文化学園のおそらく在学中に大映の芸芸部つきの座付き  
作者となり、戦後そこから大映の監督、プロデューサーとなる。  
堀田とはどこで知り合ったのかはつきりしないが、堀田も文化学  
園によく出入りしていたから、そこでの可能性が高い。

二三 河上徹太郎 河上は『批評』同人になるのは遅かったが、その鋭  
い問題意識と深い学識によって同人たちへの影響は大きかった。  
堀田は河上がある同人会で、戦後がどうなるか知る必要があると  
いう彼の発言を聞き、驚いた。また河上の呼びかけで、実藤恵秀  
から山本健吉らと有志で中国語を習う。河上は中国との交流の大  
切さかねてから吹聴していた。堀田「丸山1」は河上に親炙す  
るようになり、二人の間は急速に深まった。この関係は堀田が帰  
国してからも続き、とりわけ『世界日報』の倒産のあとの堀田の  
極貧時代には、河上から廻された下訳などによって経済的に支え  
られた。河上徹太郎は堀田が吉田健一と並んで「生涯の恩人」  
としたもう一人の人だった。

二四 堀田善衛・武田泰淳帰国歓迎会 一九四七年二月か三月、有楽町

- のカストリ屋で『批評』同人たちによる二人の歓迎会が開かれた。吉田や河上也参加。スタンド風の店で、一人ばかりの仲間が一列横隊に並んで、お互いに隣としか話ができなかったそうだが。
- 二五 三角関係 堀田善衛と武田泰淳の上海での、また引き続き帰国後の日本での、一人の女性をめぐる恋争いのこと。しかし女性にも、堀田にもそれぞれ連れ合いがあり、五角関係でもあった。決着は一九四七年にまでずれ込み、武田は別の女性との幸福に恵まれた。武田はこの三角関係を大いに創作活動の種にしたが、堀田の方はメディアの対象となることから妻子を守り抜く姿勢を貫こうとした。堀田も武田もそれぞれ埴谷雄高と相談をしたため、埴谷は二人の身近な観察者となり、後にその証言を書き残している。
- 二六 堀田詩を取り上げたいくつかの論考 「渾の風景」をテーマとした、あるいはその分析に大きく筆を割いた論考は存在していない。本論の構成は章題からも判断されるであろうが、初出を見出しそこから出発したこととともに、方法的にもまったく異なった立場に立っている。これまで書かれた諸論考から、それらがどのように異なっているか、そのような議論がどこから来るかを考えることによって、さまざまな収穫を得ることができた。私は詩の内在的分析、作者の立ち位置との密接な関わりに特別な重点を置いたが、自己を、とりわけ特殊な位置にいる作者の自己自身を対象化したこのような詩にあっては避けられないことと思われる。これが不十分にしかなされなかったのは、詩の分析が論考の別な

目的に奉仕しているためだと思われる。

- 二七 『上海日記』(一九六四年四月二日) 『堀田善衛 上海日記 滬上天下一九四五』(紅野謙介編、集英社、二〇〇八) 以下同様。
- 二八 「故里」 『文芸世紀』(一九四四年九月号)、『堀田善衛全集』I、II、第一巻及び『堀田善衛詩集』所収。
- 二九 『上海日記』(最後のページ)
- 三〇 「中国文化人に告げるの書」 『めぐりあいし人びと』(集英社、一九九三) 所収。『わが文学わが昭和史』(筑摩書房、一九七三) p. 二二八―二九、および、開高健との対談「上海時代」、初出『海』一九七六・一二、『文芸誌「海」精選対談集』(中公文庫、二〇〇六) 及び『上海日記』(前掲、p. 三九九―四〇〇) など
- 参照。
- 三一 リングの唄 『めぐりあいし人びと』(同上)。
- 三二 『批評』の続刊 誌は一九四九年末に廃刊になった。同人たちがそれぞれの道をもったということであろう。総目次なども見つけられず、全体像は明らかでない。堀田は一九四八年三月号に「詩十篇」、四九年一〇月号に音楽エッセイを載せている。
- 三三 「文学の立場」 『新生』 『すばる』二〇一九年三月号に掲載。
- 三四 『上海日記』「マア坊」の件り 同日記の一九四六・一・九に記載。

後記

本文部分を書き上げたのはかなりはやかったのだが、それを機会に別の仕事に向い、註釈は後でもいいだろうと考えたのが過ちのもとだった。その後、私は従来からの病状のほかに、深い疲労状態に落ち込み、自分で自分の体を動かさなくなってしまった。老人ホーム、ショートステイの世話になり、いまもそこから抜け出せないでいる。

註釈文に必要な本やとりわけ出典等を裏づける現物資料から遠ざかり、頼りに出来るのは、記憶と持参したパソコンに入っている材料だけとなった。この註釈はそれぞれの項目に要求される徹底性に欠け、また表現の私的な偏りも避けられないものと思われる。筆者の事情へのご理解とご容赦を切にお願いしたい。

(二〇二三・三・一一)

群峰 第6号

発行日…2021年4月1日

◇特集 翁久允  
逸見 久美

わが想い出に生きる父翁久允

須田 満

翁久允「安孫子久太郎翁と私」―自筆原稿の翻刻と解説

水野 真理子

翁久允と富山―『高志人』で目指した郷土研究

近藤 周吾

新民謡の流行―『民謡詩人』を中心に

◇研究論文

谷川 拓矢

共振する性欲―田中兆子「べしみ」論、あるいは性欲文

学史序説

◇資料・報告

高熊 哲也

「黒百合」私注

金山 克哉

滑川文学散歩 記録

高熊 哲也

文学散歩報告 いたち川沿いを歩く

◇2019・2020年度 活動報告

群峰 第5号 富山文学の会10周年記念号

発行日…2019年4月20日

◇特集 富山文学の会10周年

高志の国文学館

お祝いのごとば

富山高専専門学校

祝辞

金子 幸代

「群峰」記念号に寄せて

富山文学の会

富山文学の会 十年の軌跡——二〇〇九年から二〇一

八年まで——

黒崎 真美

富山文学の会発足あれこれ

高熊 哲也

富山文学の会との出会い

今村 郁夫

金子幸代氏の講義と富山関係の業績

綿引 香織

高志の国文学館と富山の文学

近藤 周吾

富山高専と富山文学の会

西田谷 洋

尾島菊子『教育勅語御伽噺 少女の一念』のこと

金山 克哉

さまざまな〈富山〉

◇研究論文

水野 真理子

小寺菊子の死生観―「逝く者」より

金山 克哉

高島高詩集『山脈地帯』における「戦争の詩」

丸山 珪一

堀田善衛の天皇小説「曇り日」をめぐる

中山 悦子

佐多稻子「水」における敗北と春の陽―感情表現をふまえて―

高熊 哲也

黒部ダムをめぐる作品群―吉村昭「水の葬列」と「高熱

隧道」、そして木本正次「黒部の太陽」

谷川 拓矢

断絶と和解の円環―山川健一『人生の約束』論

関戸 菜々子、姫野 諒太郎、早瀬 裕也、小谷 瑛輔

ナツツタの樹液による芋粥再現実験

◇2018年度 活動報告

隨筆・報告



## 翁久允研究を見つめ直して

### ―翁の人生の軌跡を辿る

水野 真理子

二〇二二年度は、私にとって翁久允研究に改めて向き合う重要な一年となった。二〇二二年五月に、大変光栄なことに、翁久允研究の功績に対して、富山県ひとつくり財団より第三九回「とやま賞」を受賞した。その後、県内において多くの講演をさせて頂く機会に恵まれた。

六月には富山八雲会の公開セミナーで、ハーンと翁の文学について、それぞれのアメリカ時代に焦点を当て、またコスモポリタンという観点からも考察を試みた。九月には富山高等学校（以下、富山高校と記す）において、文化活動発表会の開会に際しての講演会で、翁について紹介することができた。旧制富山中学校（現富山高校）出身である翁が、アメリカに飛び出して移民地文芸を創作し、移民地の作家、新聞記者として活躍した後、帰国して郷土に目を向けた文化運動を行っていくこと、さ

らには翁が一九六七年より、自ら筆を取った曼荼羅画帖の頒布を始め、奨学基金を募っていったこと、それにより財団法人高志奨学財団が設立され、県内の高等学校の生徒の卒業時に、翁賞が与えられることになったことを説明することができた。

富山高校は私の母校でもあり、そこで、翁の人生や功績について話すことは、長らく私の念願でもあった。というのは、私自身、高校生であったとき、翁賞という存在について聞いてはいたが、それがいったい何であるかは、全く知らなかったからである。先生方からの説明もなかったと思う。それは非常にもったいないことであり、常日頃、富山高校は伝統のある学校だと先生方からは言われていたが、その伝統を培ってきた先達者がいったい何を成し遂げてきたかについて、学校生活の中で知る機会はほとんどなかった。もちろん、自分で興味をもって調べれば良いのだが、勉強と部活に追われている現役高校生にとってはなかなか難しいであろう。私自身も、翁研究を開始してからようやく母校の歴史や先人たちの功績に関心を持ち始めたのである。研究を進めていくにつれ、いつか母校で翁について紹介したいと思っていたので、

絶好の機会であった。

加えて一月にも、富山県高等学校教頭会研究発表会において、翁久允の人生とその功績について話させていだいた。また九月から一月にかけては、計三回、雷鳥会主催の二一世紀講座の講師を務めさせて頂き、翁の移民地文芸論、コスモポリタン思想、郷土研究について紹介しながら、それらの現代的な意義を考察した。そして二月にも富山市民大学閉校式の特別講演会で、翁の軌跡を総括する内容で、彼の八五年の人生を辿ってみた。

二〇二二年度以前からも、翁についてはいろいろな場所で講演させていただいてきたが、その講演内容は、まだ翁の人生全体のうちの一部を紹介するという傾向があった。翁のアメリカ時代についてや、移民地文芸論、そして世界人・コスモポリタン思想、郷土研究など一九三〇年代頃までの翁の活動に焦点を当てて話すことが多く、一九四〇年代以降についての翁の活動については概略的に捉えている状態であったので、常に薄暗闇の中にいる印象を自身の胸の内に抱いていた。ところが、今回は戦時中から戦後にかけての、翁の三尊道運動にまで射程を広げることができ、さらには翁の人生が、そして彼が実

践してきた文学および文化的活動、加えて彼が抱いた思想が、どのような世界情勢、社会背景の変化の中で生まれて、発展していったのかということについて、以前よりも深く検討することができた。以下にその概要をまとめてみたいと思う。

## アメリカ時代

翁は一八八八（明治二一）年に立山町の六郎谷に生まれる。啓迪高等小学校や松本開高等尋常小学校、そして五百石町立尋常小学校を経て、富山県立富山中学校に入学する。腕白で活発、負けず嫌いで勉学にも励んだ翁の少年時代は、日本が近代化を推し進め、近代国家としての国作りを、日本帝国憲法をはじめとする法制度においても、また学校教育の現場においても行っているという激変する社会状況の中にあっと思われる。また学生たちの間には立身出世への渴望が見られ、その一端が学生たちによるいわゆる渡米熱に現れていたと考えられる。翁も片山潜が著した『学生渡米案内』（一九〇一）を読み、文明国アメリカへの憧れを抱いて一九〇七年に渡

米した。

一方、二〇世紀初頭のアメリカは、どのような状況であつたのだろうか。イギリスからの移民たちが、ヨーロッパの旧世界からの決別をうたつてアメリカに渡り、自由を掲げて本国イギリスから独立したのが一七七六年である。その後、アメリカは外交的にはモンロー宣言に見られる、ヨーロッパからは一線を画した孤立主義をとる一方、領土と通商については膨脹主義をとつてきた。一八九八年の米西戦争でスペインを破り、キューバ、フィリピンを實質上の支配下において以後、一八九九年には中国の門戸開放を提唱して中国市場への進出も開始し、極東地域にも触手を伸ばしていった。また、一九〇四年に開戦した日露戦争に日本が勝利したこと、および一九〇〇年から一九一〇年頃、アメリカに渡る日本人の数が増大したことも相まって、西海岸周辺を中心にアメリカでは日本人排斥運動が激化していくことになる。そして日本は一九一〇年に朝鮮を併合し、大陸進出への足掛かりを作っていく。このような動きの中で、翁はシアトルやオークランド、スタクトンなどのサンフランシスコ周辺に居住し、日本人移民たちの厳しい生活実態や人種差別

を受ける境遇、日本の日本人とは異なるアイデンティティを持つ在米日本人たちの悲喜劇を、文芸の形として残すべきであると考え、移民地文芸を創作し、それと同時に移民地文芸論を積極的に提唱していった。

加えて翁は、アメリカ時代後半において世界人・コスモポリタンの思想を抱くようになる。その思想が明確に現れているのは、「米国よりの感想」（全一二回）『富山日報』一九二四年一月一日（一四日）である。この隨筆の中で翁は、自身の文化を堅持し、それと同時に他者の文化を尊重した上で世界で活躍できる人物のことを、真の世界人だと称した。彼のこの考え方は、翁自身が六郎谷から東京へ、そして世界を象徴するアメリカへ移動していった移動の軌跡と、アメリカにおける人種差別の現状、また第一次世界大戦の勃発と戦後の世界秩序に対する幻滅感、そうしたものが影響して形成され、差別のない平和的な世界を作るためにはどうしたら良いのかと考えた末の思想であつた。加えて、翁自身がアメリカに生きる日本人として、自身の中にある日本人性や日本人としての文化的特徴をどうしたら良いのかという苦悩から至つた一つの答えであつたと思われる。一九二〇年代の

アメリカ社会においては、ホレイス・カレンやランドルフ・ポーンなどの知識人が、アングロ・サクソン文化への同化を各民族集団に求めるのではなく、個々の集団が民族的特徴を保持しながら、他集団と協調してアメリカを統合していくべきであるという文化多元主義を唱えていた。翁が彼らの思想に影響を受けて世界人・コスモポリタン思想を主張するに至ったとは考えられないが、偶然にも、同時代的に生まれた考え方であったと思われる。おそらく、この一九二〇年代頃というのは、移民に象徴されるように人々の移動がより活発化し、また世界を巻き込む戦争が起こり、人種、民族、文化的差異がぶつかり合う時代であったため、そうした様々な人種や民族間の相違をどのように統合し、包摂していくかという問題に関心が向かった時代だったのだろう。こうした中で翁は、移民地文芸と世界人・コスモポリタン思想を自身の中核に据えながら、一九二四年に日本に帰国するのである。

## 帰国後

帰国後は、翁よりも先にアメリカから帰国していたジャーナリスト清沢洌の紹介もあって、朝日新聞社に勤務し、一九二六年からは『週刊朝日』の編集を担当することになる。在米時代から憧れていた日本文壇の著名な作家たちとも交流することができ、さらには長編『道なき道』（一九二八）など、自身の移民地文芸も日本文壇で発表し、これまでの文壇には見られない、日本人の移民地における生活を現実に描いた異色の作家として着目される。ところが、一九三一年に朝日新聞社を退職し、竹久夢二とともに夢二の再起もかけて、ハワイ、アメリカを起点とする世界漫遊旅行に出発したこと、しかし夢二との関係が一年で決裂し、一人で帰国したことにより、翁はその後、日本文壇からは少し距離を置いた形で文筆活動を行っていくことになる。夢二と再渡米した際、翁がアメリカ時代に勤務していた『日米』が、世界恐慌の余波を受けて、労働争議に入り、その労働争議の解決のため翁が奔走していたことも、夢二との仲に溝ができる一因でもあった。

アメリカから帰国後は、仏教への関心を募らせ、一九三三年にはインドの仏跡巡礼の旅に出かける。インドを訪問した理由は、インドで、日本人や日本の文化の源流を探し当てたいと思ったからである。インドの仏跡を巡り、釈迦の人生に思いを馳せると同時に、翁はインドがイギリスの植民地支配下に置かれていることの現実を肌身で感じてきたのであった。このとき翁は、おそらく、西の文明に抑圧されている東の文明という構図を見て取ったと考えられる。

そしてインドから帰国後は、翁は山岳信仰に関心を抱き、研究を進めるが、研究に熱中しすぎたためか体調を崩してしまう。親戚のいる飛騨高山へ療養に出かけたのだが、そこで郷土研究家の福田夕咲と江馬修を紹介され、富山における郷土研究を構想するようになるのである。郷土研究に注力していくことになる大きな思想的根拠は、翁の世界人・コスモポリタン思想であった。真の世界人になるためには、世界を知ると同時に、日本を、そして自身の故郷を知る必要があると翁は考えたのである。また、その当時の時局も影響しているであろう。翁の回想では、忠君愛国が叫ばれる当時の時代において、本当の

世界平和を願うためには、忠君ではなく忠人間、愛国ではなく愛世界であるべきだと思つたと述べている<sup>二</sup>。国家神道を声高に叫び、忠君愛国を掲げて、軍国主義に邁進していく日本の状況に対する危機感も抱いていたのではないか。そうして、一九三六年に翁は『高志人』を創刊するのである。その際には、友人であった柳田国男の助言があり、また小杉の片口江東、八尾の川崎順二ら、富山ですでに郷土文化の研究や保全に精を出していた文化人たちの協力があつたものと思われる。

## 戦中・戦後

一九四一年一二月、日本軍の真珠湾攻撃により、太平洋戦争が開始する。翁のように在米経験を持つ者たちにとっては、よりいっそう厳しく辛い事態であつた。アメリカは、翁を育ててくれた第二の故郷のような存在でもある。さらにアメリカという国の豊かさ、国力を熟知しているがゆえに、日本がアメリカとの戦争に勝利できるとは思えなかつた。しかしながら、そのようなことを口にするには決して許されない風潮であつた。さらに、

翁が富山に疎開した後には、県の特別高等警察が翁の思想や活動に対して問題視する疑いの目も向け、四六時中、彼を見張っているような状況でもあった。戦局が悪化し、翁には日本の敗戦がたやすく予想できたが、しかし彼自身も日本人であるがゆえに、日本の勝利を切望する気持ちも同時に強くあった。男性は戦地に駆り出され、国民たちは厳しい生活に疲弊する毎日の中で、翁は日本の悲劇的な現状をもたらした原因は、軍部や官吏ら日本の指導者にあると強く感じていた。彼らへの批判精神が溢れていたのであるが、それを表だつて唱えることは不可能である。そうした際に翁が思いついたのが、三尊（釈迦、不動、観音）の真・正・愛運動であり、三尊三千体謹写であった。日本の勝利を祈念し、三尊の絵を描いて、三千人の友人に贈るといふ悲願を立てた。そこに込められた思いというのは以下のようなものであった。①釈迦のように真つ裸になる②不動明王のように邪をくたく③観世音菩薩のように弱いものをいじめない。この三つの思いの裏には、大政翼賛運動に対する以下のような批判精神が込められていた。①軍や官吏が虚名や権力を使い国民を間違つた方向に導いていることへの批判②戦場で行

われている不正や残虐行為の横行に対する批判③大東亜共栄圏構想のもとに、弱い民族を圧迫していることへの批判。これらの思いが三尊の謹写という実践の背後にあった。

一九四五年八月、富山も大空襲に見舞われ、広島、長崎に原爆が投下されて、日本は八月十五日、敗戦となる。その後一九五二年まで連合軍による占領が続ぎ、日本の民主化と復興が目指された。戦前からの価値観は大転換し、混乱極めた社会情勢であった。そして一九五一年にはサンフランシスコ平和条約を締結し、日本が国際社会に復帰する。そして一九五四年から一九七三年という時期は、日本が経済的復興を果たし世界で有数の経済力を誇る国に再生していく、高度経済成長期となる。一九四五年、翁は五七歳、そして一九七三年は翁が八五歳で生涯を終える年である。翁の晩年は、日本の経済復興の時期と重なっている。戦後翁は富山を拠点に、『高志人』を発行し続け、さらには現在の護国神社裏手、磯部町にある自宅兼三尊道舎を設立し、三尊道運動を行い、また県内各地で講演活動を積極的に行つていった。そして三尊道士会の結成を積極的に進めた。三尊道士会は、次の

ような規約を持っていた。

①三人の友人が集まり、三人共通の実行しやすいことの誓いを立てる。

②三人は各自、釈迦（真）、不動（正）、観音（愛）に象る（真似る、象徴する）

③三人は別に各自、友人を一人選び、その友人に三尊会を結成してもらおう。そしてその会と連結する<sup>三</sup>。

三尊道舎は一九五二年に宗教法人となるが、三尊道運動は宗教活動というよりも、仏教思想を根本に据えながら、個々人が個々の生活の中で、自ら決めた事からについて、真・正・愛の精神をもって実践していくという、草の根的な文化運動だと言えよう。三人で決意して行うことの内容というのは、俳句でも、囲碁でも、芸術鑑賞でも何でも良いのである。そして、月に一回、自由な集会を開き、翁の講話が行われたり、それに対して意見交換などを行うという、ゆるやかな会合であった。

### 翁から学ぶべきこと

翁のこうした人生の軌跡を辿ってみると、明治、大正、

昭和という近代化と戦争の世紀を翁が生き抜いてきたことがわかる。そしてその過程で、翁は人種間や国家間の争いを認識し、そうした争いを超えた世界的な安定や平和を作り上げるためには、個人としてどうするべきかを考え、実践してきたように思われる。翁の活動や思想から、現代の私たちも学ぶべきことが多くあるだろう。移民地文芸論からは、他者を理解することの大切さ、世界人・コスモポリタン思想からは、世界と地方を両立させる視野、郷土研究からは、郷土文化の見直しと活性化、そして三尊道運動からは、地域に根差した草の根の文化運動の持つ力というものを学ぶことができよう。

しかしながら、この現代の複雑化し、入り組んだ国際情勢、環境破壊など地球規模で対応しなければいけない問題が山積する中で、平和と安定を獲得する道はひどく険しいものに見える。翁の世界人・コスモポリタン思想は、文化多元主義に近い考え方であると思うが、その文化多元主義の実践は、決して容易なことではない。けれども、翁のような先達を試行錯誤して築きあげてきたものを振り返り、理解し、現代に投げかけてみることによって、現在の私たちが直面している課題を少しでも解決

しようとする前向きな動きを生み出すことができるのではないかと、そうなつてほしいと微力ながら切望している。翁という、世界を視野に入れつつ故郷で活動した稀有でありまた興味深い人物について、研究していくことの意義もそこにあるのではないか。そう強く感じた一年であつた。

注

- 一 本稿は、二〇二二年度に筆者が講演した内容について包括的にまとめたものである。翁の経歴については、主に逸見久美、須田満編『翁久允年譜―一八八八―一九七三』（第三版）（翁久允財団、二〇二〇年）、『翁久允全集（全一〇巻）』（翁久允全集刊行会、一九七―一九七四年）を参照。
- 二 『翁久允全集（十）』一九七三年、八五頁。
- 三 『翁久允全集（九）』一九七四年、二六―七頁より要約。

群峰 第7号

発行日…2022年4月1日

◇追悼 金子幸代先生

巢組 惠理

富山大学で過ごされた日の思い出―二〇〇二年～二〇〇八年

錦織 なな子

金子先生に宛てて

長江 弘一

金子幸代氏に学んで

今村 郁夫

私にとつて一番の恩師

近藤 周吾

書評 金子幸代著『森鷗外の西洋百科事典』『椋鳥通信』

◇研究論文

黒崎 真美

富本一枝「貧しき隣人」を読む

金山 克哉

『久遠の自像』についての調査報告―詩人・高島高の多

面性

水野 真理子

木崎さと子の文学―富山・宗教・生命の探求

久保 陽子

山内マリコ『あのこは貴族』における女同士のつながり

◇2021年度 活動報告

## 『群峰』編集に生きている経験

今村 郁夫

今回、近況報告を書く機会を得て、何を書くか考えること幾日。ふと、これまでの仕事の話をしてこなかったなあと思い至りました。教員や文学に直接関わっている方が多い中、全然違う分野の話をするのも面白いだろうし、四号から編集を担当している『群峰』にも関わるとの考えからテーマを定めました。

さて、私が富山文学の会に入会したのは、発足した二〇〇九年のことだったと思います。当時は富山大学大学院の修士二年で、指導教員だった当会の創設者でもある金子幸代先生のすすめもあつたと記憶しています。大学院を修了した後、地元の新聞社に就職し、その後、製版会社に転職しました。製版というのは大雑把に言うと、印刷するために使う版（ハンコのようなもの）を作る仕事です。『群峰』の編集に生きている、これまでの仕事や経験を簡単に紹介したいと思います。

## 新聞社での仕事

新聞社では、初めに記者として日々の取材や撮影、記事執筆を行ったほか、紙面の組版にも従事しました。新聞は自身の記事が大事なのですが、どういう見出しを立てたら読んでくれるか、どんなレイアウトにしたら目を引き付けられるかを考えながら紙面を組んでいくのは結構面白い仕事でした。もちろん、デスク（統括する人）から大枠の指示はありますが、人によって色が出やすく、これは〇〇さんが組んだ紙面だなと分かることもあるようです（私はその域には達しませんでした）。

このような新聞記者を一年ほどした後、出版部門に異動になりました。ここで担当したのは、月刊誌の連載の取材、記事執筆、企画本や自費出版の編集でした。長くいたこともあり、さまざまな仕事に携わりました。釣りの同行取材や検定の予想問題集の編集、地元プロ野球チームのイヤーズブック制作など、さまざまな方々にお世話になりました。こういう仕事をしていると、著名な方と話ができるので、役得だなあと感じました。釣りの全国組織の北陸支部長と関わったり、監督やGM（ゼネラル

「マネージャー」となった元メジャーリーガーと話せたり、全国的に有名な作家さんとやり取りできたりと、他ではできないことをたくさん経験しました。振り返ってみると、今だったら、もう少し丁寧にうまくできていただろう仕事もあり、少し心残りもあります。

### 製版会社での仕事

それはさておき、諸事情あって六年ほど前に今の会社に転職しました。今の会社で私がしていることを簡単に言うと、さまざまな形態で入稿してくるデータを印刷用のPDFに変換しているということになります。データと言っても、おそらく読者のみなさんになじみ深い Microsoft Word やデザイナーが主に使っている Adobe Illustrator など、さまざまです。他にも、決まったレイアウトに原稿を落とし込んで校正刷りを作ったり、前述した印刷するために使う版刷版を出力したりもしています。このように仕事は多岐にわたるため、広範な知識や技術が必要とされることもあり大変ですが、やりがいも感じています。

このようなこれまでの経験が『群峰』の校正のやり取りや、印刷用PDFの作成に生かされていると感じています。『群峰』の編集は大変ではありませんが、その分、やりがいと面白さがあります。今後も富山文学の会にはお世話になると思いますので、よろしくお願いいたします。

## 2022年度 活動記録

第83回	6/18(土)	<p><b>研究会</b> (富山高専射水・リモート)</p> <p>「小寺菊子作品にみる労働観—「赤坂」を中心に」 久保陽子</p> <p>近況報告 第39回とやま賞受賞 水野真理子 9名</p>
第84回	8/31(水)	<p><b>読書会</b> (佐久良)</p> <p>江戸川乱歩「押絵と旅する男」 9名</p>
第85回	9/17(土)	<p><b>研究会</b> (魚津市立図書館)</p> <p>魚津市制70周年記念シンポジウム</p> <p>乱歩と魚津幻想—『押絵と旅する男』の世界— (魚津市・海市社共催、富山文学の会協力)</p> <p>「反転する虚実」 木村小夜氏</p> <p>「苦悩する青年の物語」 宮本和歌子氏</p> <p>「乱歩と魚津幻想」 八木光昭</p> <p>総合討議『押絵と旅する男』の世界 木村小夜氏・宮本和歌子氏・八木光昭・近藤周吾・黒崎真美 34名</p>
第86回	12/22(木)	<p><b>忘年会・打ち合わせ</b> (佐久良)</p> <p>10名</p>
第87回	2023/3/25(土)	<p><b>研究大会</b> (富山大学・リモート)</p> <p>第12回大会</p> <p>司会 高熊哲也・久保陽子</p> <p><b>研究発表</b>「茶川龍之介と江戸川乱歩——蜜気楼を中心として」 近藤周吾</p> <p><b>シンポジウム</b>「富山文学コレクションの未来——発掘・保存・活用」</p> <p>須田満・千田篤・山本正敏 コーディネーター:近藤周吾</p>

## 編集後記

▼二〇二二年度は前年度に引き続き、ロシアによるウクライナ侵攻が世界に影を落とした年度となりました。また、二月にはトルコ、シリアで大地震が発生し、東日本大震災を上回る人々が犠牲となりました。そのような中、二〇二〇年から猛威を振るってきた新型コロナウイルス感染症が落ち着いてきたことは、一筋の光と言えるのではないのでしょうか。約三年間のコロナ禍での生活から、少しずつ以前の日常に戻りつつあることを肌で感じているところです。

▼さて、今号では二〇二二年三月に富山文学の会研究大会の際にご講演いただいた立野先生に、ご寄稿いただきました。さらに、海外に日本を紹介した北星堂書店に関する研究論文や翁久允研究を振り返った随筆などが集まりました。これらを読み、富山の文学土壌の豊かさを改めて認識するとともに、郷土文学や郷土史を研究することは、やがては世界を俯瞰することにつながるのではないかと思います。

▼前述したように世界では戦争が起っています。医

学や薬学などと違って、私たちの文学研究で直接人を救うことはできません。しかし、作家や作品を研究することは、人間の心の動きを研究することとも言えるのではないのでしょうか。さまざまな思惑があつて、戦争や紛争が起るのだと思いますが、お互いに相手の心に寄り添うことができれば、そのような過ちはなくなるのではないかと考えています。文学研究を続けることがその一助になると、今号を編集しながら感じた次第です。

今村記

群峰 第8号

二〇二三年四月一日 発行

編集・発行 富山文学の会

連絡先

富山県射水市海老江練合1番2

富山高専専門学校（射水キャンパス）

国語科気付



